難い手合ひでな。』

『陛下は美妙くも申されました』と相槌を打つたのは鹽稅奉行で、先刻からレオナルドに關する話を持ち出さうと頻に焦慮してゐたのであつた。『總じて畫家は不實行の輩でござる。これは先日の事でありまするが、婚禮の手箱に一つ喩の繪を描いて貰はうと思ひまして、レオナルドの畫室を訪れました。何うぢや先生は在宅かなと訊ねましたところ、其の返答はまあ何うでござらう、否、不在でござります、先生は空氣の目方を量るため大急ぎでお出掛けになりましたとの事。全くの話が拙者は此の青二才奴、人を愚弄しとると心の中で思つてをりました。それからレオナルドに會ひまして、そんな馬鹿な眞似を貴殿はなさつたのかと質しますと、如何にもそれに相違ござらぬと白狀に及びました。そして却て拙者の方が馬鹿であると云つたやうな顏付きをして拙者をじろ〳〵眺めました。何と御婦人方各位は此の考へを如何やうにお取りなされます？　そして春風の目方は何匁でござりませう？』

『あのレオナルドの事ならばそれよりも更に非道い事を知つてゐます』と野鄙な、獨りよがりの顏せる年若い公卿が言つた。『レオナルドは或るボートを發明しました、それは櫂なしに水流を行く事が出來るのです。』

『何うして行くのでせう？』

『車でゝす、蒸氣の力に依つてゞすな。』

『車のあるボートですつて？　嘘を仰有い、あなたはレオナルドの發明でなくて唯つた今あなたが發明なすつたのでせう！』

『私はルカ・パチオリ師から聞いたのです。ルカは親しく其の雛形を見たのでした。蒸氣には大船を動かすに足る力がある、況や小船なぞは何でもないとレオナルドは信じてゐるさうです。』

『それ御覽！　それ御覽！　だから私然う言つたのではありませんか』とエルメルリナは叫んだ。『それがあの人の神降ろしですよ、純粹簡單な魔法ですよ！』

『レオナルドの狂氣である事は否むべくもないが』と公は都雅な微笑を含んで言つた。『とは言ふものゝ予は彼の健康を欲しますな。彼と共にゐると毫も倦む事を知らないから！』

八

レオナルドはヴェルチェルリナの門の靜かな郊外を通つて歸路に就いた。時は心地好い夕暮で、數匹の山羊はさも滿足らしく路傍の草を食んでゐるし、顏は日に燒け身體には襤褸を着てゐる少年は鶯鳥の一群を追つてゐた。テルプスと覺しき邊の空際の北に方つて金に裏打された雨雲が昇つて、澄んだ空には星が一つ高く輝いてゐる。

畫家は緩やかに歩んで行つた。彼の頭には丁度今し方濟まして來た科學上の論爭の事があつた。尋いで考へは自分がフロレンスで見た火の審判に移つたが、彼れと此れとの兩種の爭ひの互に類似せる有樣は宛ら雙兒其の儘であるとほか思へなかつた。

其の時年齡は六つの小さな女の子が一人ライ麥のパンと葱を食べながらとある陋屋の外側に懸けてある梯子段の上にゐた。これを見てレオナルドは女の子を呼んだ。子供は一寸躊躇つたが、レオナルドがニコ〳〵してゐる

のに安心したと見えて、自分の方から笑ひながらレオナルドの側へチョコ〳〵歩んで來た。そこで畫家は晩餐の席から持ち歸つた橙（これは砂糖漬で、金箔を塗つてあつた）を與へた。

『まあ、これ金の玉だわ！』

『いゝえ、玉ではありません。林檎のやうな物です。お食べなさい中は美味いから。』

と言はれても少女は未だ見た事もない美菓をば依然恍乎と眺めてゐた。

『あなたの名は何と言ふの？』

『マイアちやん。』

『ぢやマイアちやん、あなたは鷄と山羊と驢馬の三人が一緒に魚を捕りに行つたお話を知つてゐますか？』

『私知らないわ。』

『では聞かして上げませうか？』

と言ひながら女に似た華奢な手で少女の柔い亂離の髪を撫でゝやつた。

『では最つと此方へお出で！　さ、一緒に腰掛けませう！　あ、一寸お待ち、マイアちやんは其の金の林檎を食べませんから私見て上げませう、尙だ美味い菓子があつたやうでしたから。』

斯う言ひつゝ幾つも衣兜を轉り反してゐる最中、一人の若い婦人が其處へ現れて、マイアと見知らぬ人とを打ち見ながら、何か合點が行つたやうに肯いて、糸繰棒を持つた儘で腰を下ろした。次に腰の曲つた祖母が出て來たが、これはマイアと同じ目付きの老婆で、婦人と同樣レオナルドを見てゐるうち、彼に見覺えがあるかの如く

不意に手で合圖をして、娘卽ち婦人に何事をか囁いた。すると婦人は思はず飛び上つて叫んだ。

『マイア！　マイア！　早くお出で！』

マイアは躊躇した。

『お出でつたら、此の馬鹿、お前厭やなのなら……』

少女は恐れて逃げて祖母に縋つた。すると祖母は孫の橙を引つ奪つて土塀の向ふの豚に放り投げたので、少女はワツと泣いたが祖母から何事をか耳語されて直ぐに泣くのを止めた。そして大きな目に一杯の恐怖を漂はせてレオナルドを凝視しながら怖々其處に坐つた。レオナルドは此の場の仕儀を全り悟つて踵を旋した。蓋し老婆は自分を魔法使と見て、孫娘に魔法を施す者と思つたのであつた。彼は悲しい微笑を口邊に浮かべながら、最早や其の要のない菓子を依然機械的に捜しつゝ、小さな女の子に無用の恐怖を與へた事を思つて心を痛めながら、敢て自分を殺さうとした人達——卽ち自分が述べた眞理をば狂人の妄語に過ぎないと解したあの學者達と面を合はせてゐる時よりも今の方が一層除け者にされた人に似てゐると感じた。自分が彼の仲間から遠く距つてゐる有樣は恰ど未だ暗くない空に輝きつゝあるあの一つ星に等しいと思つたのである。

家に歸つてから書齋に閉ぢ籠もつた。塵に塗れた科學上の諸機械や飽き〳〵する書籍を有する此の室は自分には宛ら牢獄のやうに陰鬱なものであるが、それでも蠟燭に火を點して、椅子に坐して、此の頃着手した研究——斜面路を歩行する人體の運動に關する法則の考究——に沈湎した。音樂と同樣、レオナルドに取つて數學は何時も慰安の力を與へるので、今宵もそれは期待したゞけの慰藉を齎したのであつた。そして其の算定が濟んでから

日記帳を取出して、左手で右から左に書きながら（さればこれを讀むには鏡に映さねばならない）科學の論爭のために得た感想を少し計り書き付けた——

アリストートルの弟子達、卽ち言語と書籍の人々は（斯く言ふ所以は蓋し私は彼等の如き學者ではないから）此のレオナルドを以て自分自身の題目を言說し得ない男だと考へてゐる。私が取扱ふ事柄は言語よりも經驗に依つて解說さるべきのに彼等はそれを想はないのである。實に經驗は名著を書いた人々の情人であつた。私も經驗をば私の情人としよう。あらゆる場合に於いて私は此の經驗に依つて踏み堪へるか或は倒れるかするのだ。

蠟燭は大方燃え盡して小さくなつて居る。徹夜をする折忠實な友となつて吳れる猫は此の時卓子の上に飛び上つて、ゴロ〳〵唸りながら主人に身體を擦り付けた。埃のかゝつた窓から見える一つ星は先刻にも增して更に遠く且つ更に到達し難いやうに思はれた。レオナルドはマイアの恐怖の目を思ひ出したが、併し悒鬱には打ち勝つてしまつた。成程自分は孤獨ではあるが、然かも勇敢に且つ沈靜を持してゐるのだ。と思ひながらも、自分には何とも分らないながら、恰ど凍結せる河の氷の下に溫い泉があるやうに、自分の心の不可思議な底には或る惱みがあつた。實際自分がマイアに對して罪を犯したかのやうに、殆ど悔恨に近いものがあつた。或る事が存するかのやうに、又何か知ら十が十とも自分を宥す事の出來ない

九

翌朝レオナルドは寫生帳、繪具箱、ブラシの類をアストロに持たせて、救世主の顏を描くため其の日一日を振り當てる積りで僧院へ行かんとする途すがら、中庭で馬丁のナスタシオを見たので足を止めて話し掛けた。何時か公から賜はつた灰色の牝馬を彼は忙がし氣に手入れをしてゐた。

『やあ！　ヂャニノ（此は愛馬の名）は今日は何うかな？』

『ヂャニノは少しも異狀はございませんが斑馬の方は跛を引いてゐます。』

レオナルドは心配氣に、『斑の方が？　何日からだ？』

『四日前からです』とナスタシオは素氣ない返答をして主人の方を見向きもせず、力を入れて續け樣に後ろの兩脚を梳つたので、馬は脚の位置を變へるに至つた。

併しレオナルドは斑の馬を見る事を望んで馬丁をして厩に案內させた。それから何分か經つてヂョーヴァンニは顏を洗ひに中庭の泉へ來て見ると、先生が殆ど女のやうに疳高い調子の鋭い高聲で物を言つてゐるのを耳にした。これは稀に先生が突如として劇しい憤怒に驅られて發する時の聲で、劇しい憤怒とは言ふもの、聊かたりとも危險を釀さない底のものであつた。

『さ、今直ぐ言へ、馬鹿野郎、此の呑んだくれの山猿、さ、誰が貴樣に馬醫者を呼べと吩付けたか其の返答をしろ！』

『だつて旦那、馬が病氣だといふのに醫者に診せずに打遣つて置けますか？』

『フン、結構なお醫者樣だ！　馬鹿ッ、貴樣能く考へて見ろ、あの臭い膏藥は……』

『いゝえ、あれは呪です、膏藥ぢやないんです。斯んな事柄は旦那は御承知ないからそんなに怒んなさるのです。』

『貴樣と貴樣の呪は一緒に惡魔に遣つてしまへ！　無學者の治療が何になる、身體の構造を知りもしない奴、解剖學の名を未だ聞きもしない奴の治療が何になる。』

『へ、へ、解剖學！』とナスタシオは遲々と輕蔑の目を擧げて主人を顧みながら言つた。

『此の頓馬！　貴樣最う私の用をしなくても好い。出て行け！』

馬丁は一筋の睫毛をさへ動かさなかつた。

『へン、手前の方から既んでの事にお去らばを極め込む積りだつたんです。だがね、旦那、手前の給金三月分といふものは旦那の方に貸しになつてゐますぜ。それから燕麥の一件ですが、あれは手前の過失ぢやないんです。マルコから麥の金をよこさないんだもの、何とも仕樣がありませんや。』

『それは一體何うしたのだ？　一度私が注文を出すと……』

ナスタシオは肩を聳やかした。そして元の場所に歸つてから再び牝馬の手入れに取り掛かつたが、自分の鬱憤をば物を言はぬ獸に洩らすかのやうに亂暴に當り散らした。

此の間ヂョーヴァンニは右の口論を興味ある事に感じて、粗いタオルで顏を洗ひながら一人でニコ〳〵してゐた。

アストロは思はぬ手間を取つたのにうんざりして、『先生、出掛けやうぢやありませんか？』

『待ちなさい。燕麥の事に就いてマルコに訊かなくちやならん。あの惡者の言葉が何れだけ眞實だか知つて置きたいから。』

と言つてレオナルドは家へ這入るし、ヂョーヴァンニは其の後に續いた。マルコは畫室にゐた。例に依つて例の如く偏に規則を守つて、數學的の精確を旨として描いてゐる樣は、恰ど重荷を轉がして山を登るやうで、汗を搔き〳〵、ぜい〳〵言つてゐた。屹と結んだ口、だらしない赤毛の頭髮、ムッチリ赤色に太りながらも目立たない其の指――それらは恰も《忍耐と勤勉とは一切の事物に克つ》と語つてゐるやうに見えた。

『マルコ君、君が馬の食ふ麥の金を渡さなかつたと言ふのは眞實ですか？』

『確に其の通りです。』

『何故です、君？』と言つたレオナルドの顏は我が家の用度を司るマルコの險しい顏に向つた時既に臆病になつてゐる。『マルコ君、兼てから氣を付けて燕麥を忘れないで下さいと言つてありましたがね。君は忘れたのですか？』

『忘れはしません、金がないのです。』

『そんな事だらうと思つた。何かと云ふと金が不足だと云ふ。それにしてもマルコ君、馬は麥を食はずに生きますか？』

マルコは怫然としてブラシを捨てた。ヂョーヴァンニは先生と弟子が位地を轉換した模樣を目睹してゐた。

『お聞きなさい、先生！　マルコ、此の家の會計は君が扱つて呉れ、そして私に其の心配をさせちや可けないと仰有つたのは先生でした。それだのに先生は何故そんな事を持ち出すのです？』

レオナルドは溫和な非難を口吻に示して言つた。『マルコ君！　君に三十フロリンを渡したのは漸つと此の前の週でした。』

『へッ、三十フロリン！　何うか其の三十フロリンの計算を願ひませうか。四フロリンがパチオリから借りてゐた分。それから何時になつてもスポンヂのやうに吸ひ取つて計りゐるあのガレオット・サクロボスコにくれた金が二フロリン。先生の解剖研究のために死骸を持ち出して來た奴に五フロリン出ました。先生の爬蟲類と魚を入れてある溫室の硝子やストーヴの復舊費が三フロリン、それにあの斑の惡魔に六ヅカットを支出しました……』

『何です、それは？　麒麟の事ですか？』

『然うです、麒麟です。我々は食ふ物がなくてもあの憎い畜生に食はせなきやならないのです。尤も食物を遣つたつて遣らなくたつて彼奴は死ぬに定まつてゐますが。』

『否、そんな事は意とするに足りません』とレオナルドは穩かに言つた。『麒麟が死ねば解剖に附します。あの種類の動物の頸椎骨は非常に珍らしいのです。』

『へえ頸椎骨！　ま、先生！　先生！　先生に若し馬や死體や麒麟や魚や、ありとあらゆる種類の動物に對するあんな嗜好がなければ、私達は大名のやうな生活が出來て、誰にも金を賴まなくて好いのです。氣紛れの好心よりも日々のパンの方が好いぢやないですか？』

『パン？　私はパンより以上の物を望んだ事がありますか？　然うだ、能く分つた。私の有つてゐる動物類は大した手數と費用を掛けて手に入れたのだが、あれが悉皆死ぬのを君は見たいのでせう。併しあれは私に取つては缺くべからざるものです。君の思つてゐる以上に缺くべからざるものです。君は何に對してゞも自分の勝手を振舞ひたいのだ。』

困り切つた先生の聲は顫へてゐた。マルコはムッチリした沈默を續けた。

『それは然うと私等は何うなるのだらう？』とレオナルドは語を繼いだ。『最早や燕麥の缺乏に迫つてゐる？今迄斯んな窮迫に遭つた事はないのに。』

『窮迫は毎々の事です。今後だつて絶えず然うでせう。窮迫以外に先生の期待なさるものがありますか？　滿一年間陛下からは一厘だつて此の家へ來ないのです。毎日々々大藏大臣のアンブロヂオ・フェルラリは明日だ、明日だと言つてゐますが、奴、私達を愚弄してゐるとしか思へません。』

『愚弄する！　ぢや宜しい、私を愚弄すれば何んな目に遭ふか思ひ知らして呉れる！　然うだ、私から陛下に訴へてやる！　あの下劣なアンブロヂオの奴、彼奴が忘れない程の憂き目を見せてやるのだ！　おゝ主よ、復活祭にはこの男に凶事があるやうに願ひまする！』

マルコは何だか判然しない容子をして見せたが、それは公の大藏大臣に憂き目を見せる先生の柄ではないとの意味らしかつた。間もなく彼の苦み切つた顏に深切と親愛の情が浮かび出て、慰めるやうな調子で斯う言ひ足した。

『否、先生、そんな事は構はないで置きなさい！　神様はお情深いから何うにかしてやつて行けない事もないでせう。それ程眞面目に燕麥の事を思つてゐらつしやるのなら其の金は私から出して置きます。』

蓋しマルコは自分の所有金――卽ち母のために貯へてゐる小金の事を思ひ出したのであつた。

『燕麥なぞは左程重要な問題ぢやない』と言ひながらレオナルドはガクリ椅子の中へ身體を埋めて目を蔽うた恰好は、恰ど荒い風に吹き當てられないための用心に出たやうであつた。『實は君に未だ言つてない事が一つあるのです。それは私が內證で借りた金があるので、來月迄に是非八十ヅカットの金が入用なのです。何だマルコ、そんな目付きをして私を見なくたつて好いぢやないか。』

『其の金は一體誰から借りたのです？』

『兩替屋のアルノルドから……』

『アルノルドから！　ま、先生、飛でもない事をなすつた！　何んな不信心者だつて、何んな高利貸だつて彼奴に比べればずつと善人なんです、先生はそれを御承知なかつたのですか？　金が要るなら要ると其の時直ぐ何故私に仰有いませんでした？』

レオナルドは俯首れた。

『金の要る事が出來たからぢやないか、そんなに怒らないで呉れ、マルコ！』と言つて更に悄らしく言ひ足した。『君、出納帳を見せて呉れませんか、あれを見れば多分何うにか工夫が附きさうだから。』

何の工夫も附くものでないと承知しながら、飽迄柔順に出るのが先生を動かす最上の策であると感付いて、マ

ルコは出納帳を持つて來た。レオナルドは眉を顰めて厭やな顏をした。そして常々見慣れ過ぎてゐる程の帳面であげながら、其の靑い紙の初めの方を開けて見守つた容子は宛ら人が口の明いてゐる傷口を覗き込む時に作るやうな顏形であつた。續いて二人は計算を始めたが、此の數學の大家が加へたり減いたりする際小兒に等しい錯りをしたのは不思議でもあり笑止でもあつた。時々一千ヅカットの勘定書を何處かに置き忘れてゐた事を急に思ひ出して箱や、小筥、埃だらけの紙束を搔き廻したが、そんな物は何處にも見付からなかつた。それは見付からなかつたが、自分の手で記して置いた下らない無用の覺え書が目に觸れた。例へばサライノの外套を調製した時の書附には次のやうに記してあつた――

銀色の錦	一五リーヴル　四ソルヂ
紺し緋天鵞絨	九同　〇同
打紐	〇同　九同
釦	〇同　一二同

これを見ると等しくレオナルドは顏を赤くして罵りながら、腹立たしく紙を引き裂いてテーブルの下に投り込んだ。

ヂョーヴァンニは此の大人物の顏に人間の弱點のあるのを見て低聲で獨語した――

『これが新ヘルメス・トリスメギスツスと新プロメシウスとを等分にした人なのか？　然うぢやない、神でもなければタイタンでもないのだ、矢張り我々と同じい唯の人間なのだ！　そして私は此の人を恐れてゐたのだ！　おゝ慈悲深いそして氣の毒な魂だ！』

十

それから二週間經つたがマルコの推察に違はず、レオナルドは金の事を頓と忘れてゐた。そして深い信頼の容子を顔に見せて、マルコ君、化石を一つ買ひたいから三フロリンを呉れ給へと強請つたので、マルコは拒む勇氣が挫けて、自分の貯の中から其の金を渡した。公の大藏大臣はレオナルドの懇請に耳を傾けずに今年分の俸給を未だ下げて呉れなかつた。殊に近頃イル・モロ公は佛蘭西と干戈を交へる積りで其の準備に宛てるため巨額の金を請求した事とて此の事は尚更都合が悪るいやうであつた。で、レオナルドは已むを得ず手當り次第に借りられる處から借りた、自分の弟子に對してさへ借りを拵へた。

スフォルツァ家の記念像を完成するための金も支出されなかつた。石膏像、鑄型、青銅溶解の受容器、爐等一切の準備が整つてゐるのに、レオナルドから青銅の見積り額を公に差出した時、公は驚いて謁見をすら拒絶した。

遂に窮乏の餘り十一月晦日にレオナルドは一書を裁して公の座右に呈した。其の書翰の文面は何等聯絡のない切れ〴〵のもので、恰ど人に物を頼む術を知らぬ男が狼狽へて吃りながらものを言つてゐるのに似通つてゐた。

陛下、陛下は一層重大なる事件に御軫念あらせ給ふ事を微臣は承知致し居り候へ共、然かも沈默は却て最も恩惠深き保護者の逆鱗に觸れん事を恐れ候て僭越ながら微臣の些少の窮乏と且つ今は活しむるに由なき技術の缺如とに陛下の御念慮を仰ぎたく候……微臣最後の俸給を拜受候て以來茲に二年を經過致し候……

陛下に奉仕致候人々の中には他に收入の途有之候故或は待ち得べく候共微臣と微臣の技術――否技術の如きは一層有益なるものゝために喜んで擲つべく候……

微臣の生命は一に陛下の御用の儘に御座候、微臣は常に速に御用命に應ずべく候。

記念像の事は茲に言上致さず候、蓋し微臣は時局が……存知居り候故……

生活費を得る必要のため業務を廢めて瑣々たる事に心勞致し候は微臣の悲しむ處に御座候。

過ぐる五十六ケ月の間六名の人數に僅々五十ヅカットを宛行ひたる始末に御座候……

微臣の力を何物に致すべきやを知らず候……

心を光榮に潛むべく候や或は單に日々のパンに潛むべく候や……

十一

十一月の或る夕のこと、其の日一日をレオナルドはガスパレ・ヴィスコンチと金貸しのアルノルドとに懇請したり、絞首吏と話を纏めたりして暮らしてしまつて、（此の絞首吏はレオナルドが研究用に供した二個の死體の代價を請求して、若し義務を果たさなければ、死體を買つたお前を宗教裁判所に告發してやると嚇したのである）非

常に疲勞を覺えながら意氣沮喪して歸宅した。そして臺所の火で着物を干して、アストロの手から仕事部屋の鍵を受取つて、其の部屋の方へ歩み行く中、其處の扉の中から聲がしたので思はず吃驚した。

『何だらう？　錠が下りてないのか知ら？　それとも泥棒か知ら？』

併し其の聲の主は弟子のヂョーヴァンニとチェサレである事を知つて、二人は大力自分の內證の紙類をいぢくり廻してゐるのだらうと思つた。そして將に扉を開け放さうとしたが、自分の姿を見るなり二人の周章てる模樣、又恐怖の目をパッと見開く容子なぞをありゝと思ひ浮かべて、それは止す事にした。そして二人に對して羞恥を感じながら、恰ど罪人のやうに爪先き歩きをして其處を去つて、間もなく書齋から叫んだ——

『アストロー　アストロー！　明りを持つて來て下さい！　皆は何處へ行つてゐます？　アンドレア！　マルコ！　ヂョーヴァンニ！　チェサレ！』

と同時に仕事部屋の聲は礒と止んで、硝子のやうな物が下に落ちて毀れる音、窓々を締める音が聞えた。レオナルドは未だ躊躇して斷然這入る事が出來なかつた。彼の心には憤怒の念よりも嫌厭の情があつたのである。

そしてレオナルドの疑念は錯つてはゐなかつた。初めヂョーヴァンニ、チェサレの二人は中庭の方の窓から這入つて先生の抽斗を搔き廻して、紙、圖畫、日記の類を開けて見たのであつた。ヂョーヴァンニは眞靑になつて鏡を持つて、チェサレは先生の逆に書いてある文字を讀んだ——

太陽を頌せよ。彼のエピキュラス、太陽の大さは肉眼で見える通りのものだと言つたエピキュラスを非難せずにはゐられない。ソクラテスは私を震駭せしめる、何故なら彼はあんなに夥しい太陽の光を貶して、太陽は石の

溶けた物だと言つたからである。私は太陽の尊崇を廢めて人間の尊崇を擇ぶ人達を周章狼狽せしめるに足る强い語を有したいと思ふ。

『他の處を讀まうか？』とチェサレは訊いた。

『終まで讀み給へ』とヂョーヴァンニが言つた。

チェサレは續けた——

神の代りに人間を崇拜する人は大なる誤謬に陷つてゐるのだ。蓋し人は縱ひ地球大の大さがあつた處で、尙ほ最小の星よりも小さく見えるのだから、そして宇宙上到底目に入らぬ一點だから。更に考へるに人類は墓の中で腐敗し朽廢するものだから……

『此奴あ可笑しい』とチェサレは口を挿んだ。『先生は太陽を尊む癖に、死を受けて然かも死に打ち勝つた彼基督を認めてゐないらしいぞ。』

それで彼は頁をかへした。『此處を讀まうか。』

此の日歐羅巴到る處多數の人民は亞細亞に於いて歿したる一男子の死を哭くだらう……

『君は分らないのだ、ヂョーヴァンニ。此の說明は僕がしよう。先生は耶蘇受難日の事を言つてゐるのだ。最つと讀まうか。』

おゝ、數學者、此の錯誤の上に汝等の燈火を翳せ！　身體の存在なくば精神の存在なし、肉、血、神經、舌、骨、筋のなき處豈聲あらんや、運動あらんや。

「これは僕には讀めない。それから次の數行は消してある。終りの方へ飛んぢまはうよ。」

精神に關する此の他の定義は高僧達に委ねる。彼等は上天の啓示によりて自然裡の秘密を知るからである。

『フン、斯んな文章が高僧の手に渡るのなら僕は寧ろレオナルド氏でありたくないな！　今一つ別の豫言があるのだ。』

勞力と貧困との苦行を捐て、宮殿の如き家屋に住し、且つ無形の富を犧牲にして有形の富を積み、以て神に仕へ得べしとなす輩の何ぞ夫れ夥しき事や。

『僕は斷言する、これは確に免罪符の事を言つてゐるのだ。先生すつかりサヴォナロォラにかぶれてゐるね。法王に對して石を一つ投げたんだぜ。』

千年前に死んだ人々は今生きてゐる者の喰物になつてゐる。

『これは素通りさせるかな。おつと然うぢやなかつた、一千年前に死んだ人達なら聖徒に相違あるまい、詰り坊主共は聖徒の名で金錢を集めてゐるのだ。好い謎ぢやないか！』

彼等は未だ耳にせざる人々を崇拜し、未だ目に見ざる人々の前に燈明を捧ぐるに至らん。

『卽ち聖徒の御影像なんだ。』

婦人は男子に對して自己の情、自己の秘密、恥づべき行爲を打ち明ける。

『懺悔だ！　君は何う思ふ、ヂョーヴァンニ？　先生は不思議な人ぢやないか？　併し何の謎にも眞劍の毒惡がありやしない。詰り冗談に過ぎないのだ――神明侮辱をおもちやにしてゐるんだね。』

虛僞の奇蹟を賣り物にして愚民を欺く者が多い、彼等は自己の詐欺の面を剝ぐ者を罰するのである。

『これは火の審判さ。無鐵砲なサヴォナロォラは此の犧牲に供せられたのだ。』

そして手帳を下に置いて相手を見た。

『さ、これで充分ぢやないか？　それとも此の上尙證據を欲しいのか？』

ヂョーヴァンニは首を振つた。

『可けない、チェサレ、それだけでは不足だ。先生が明白に述べてゐる箇所を見たいな。』

『明白だつて？　明白を求めるのは野暮だ。これが先生の癖さ。先生は毎時も二重行爲をやつてゐるのだ――自己を匿して女のやうに伴つてゐるのだ。謎は先生の天性だらうぢやないか。先生も自分で自分が分らないんだぜ。詰り先生は自分自身の最大なる謎さ。』

『チェサレの言は正しい』とヂョーヴァンニは心で思つた。『斯んな嘲罵よりも公然冒瀆を敢てする方が好いぢやないか――恰ど主の傷口の中へ指を突つ込んでゐるあの不信心者のトマスの微笑のやうだ。』

更にチェサレは赤チョークで描いてある繪を見せた。此の繪は機械や計算表の中に不用心に押し込んであつた物で、聖母が聖子基督と共に沙漠にゐる圖であつた。聖母は石上に坐して指で沙の上に三角形や圓を描いてゐる――卽ち主の母は一切知識の根本たる幾何學を聖子に敎へてゐるのであつた。

ヂョーヴァンニは長い間此の奇妙な畫を眺めてから、それに書いてある文字を讀み解くため鏡に映して見た。そしてチェサレが其の初めの方の文字（永遠の師なる必然）と讀んだ途端、レオナルドの聲が聞えたのであつた――

『アストロ！　明りを持つてお出で！　アンドレア！　マルコ！　ジョーヴァンニ！　チェサレ！』

ジョーヴァンニは青くなつた。鏡が手から落ちて幾つにも毀れた。

『緣起が惡るいな』とチェサレは微笑して言つた。

そして恰ど仕事の眞最中に見付かつた泥棒と同樣、二人はあたふた…元の場所に紙類を納つて、鏡の缺片を積み重ねて、窓を明けて棚を踏臺にして、水管と葡萄の枝に摑まつて中庭に飛び下りた。運惡るくチェサレは摑み損なつたゝめ下に墜ちて片足を挫いた。

十二

其の夜レオナルドは常の如き慰藉を數學の中に見出せなかつた。室内を歩んだり、腰を掛けて見たり、又は畫を描いてそれを側の方へ捨てたりした。心は何となく不安で、是非決定を要する或る事があるにも拘らずそれが決し兼ねるのであつた。彼の心は始終同じ一つの事に戻つて來る——それは卽ちサヴォナロォラの許へ逃げて行つたジョーヴァンニに歸つて來て、暫くは元の通り平靜に復して製作を續けて腰を落ち附けてゐたのが、彼の痛ましい火の審判を見て以來、殊に豫言者サヴォナロォラの死刑期日が近いて來たといふ報知がミランに達して以來、彼は再び懷疑と悔恨に責められてゐる事であつた。ジョーヴァンニが如何に懊惱して、再び出奔の必要を感じながらも去りとて此宅を去る覺悟になれない理由、並びに彼の性質は餘り底が深いため其の中に幾多の矛盾をなす事を感知しながら、然かも同時に太だ弱きに失するため其の矛盾を克服し能はざる事がレオナルドには分つてゐた。そ

れから其の性質の中にある葛藤が如何に恐るべきものであるかを先生は了解してゐた。で、時々レオナルドは思つた、あの弟子を救うためには私の手で彼れを追ひ出さなきやならん——と。

彼は唇に苦笑を浮かべて斯う考へた。

『實際だ、私……私一人で……ジョーヴァンニを破滅さしてゐるのだ！　あの非難——私の目を見る者は不幸に遭ふといふ非難は眞實だ！　何ういふ風にして彼れを助けようか知ら？』

レオナルドは起つて暗いそして急な階段を昇つて扉を叩いた。室内から返答が來なかつたがそれに關せず扉を明けて中へ這入つた。マドンナの前に點れてゐる小やかな燈明は狹い室の暗黑を僅に破つてゐた。屋根の上にパラ〳〵雨が降り灑いで、秋風は悲し氣に吼えてゐる。白い色の壁に黑ずんだ受難像の懸かつてゐるのが見える。ジョーヴァンニは着物を着た儘で枕の中に顏を埋めて、恰ど病に惱める小兒のやうに落着きのない姿で寢込んでゐた。

『最う寢ましたか？』とレオナルドは訊ねながら首を差伸べた。

するとジョーヴァンニは微かな聲を立てゝ跳ね起きた。そして小さなマイアに於いて見たと同じい恐怖の目で瞻守つて手で何物かを防ぐやうな仕方をした。

『おゝジョーヴァンニ！　ジョーヴァンニ！　何うしました？　誰でもないのです、私です！』

ジョーヴァンニは片手でそろ〳〵と目を擦りながら漸く心付いて來た。

『あゝ先生ですか！　私は矢張り惡ろしい夢を見てゐるのだと思つてゐました。併し本統にあなたですか？』

と言つた彼は容易に自分の目を信じないものゝやうに眉を蹙めてゐる。

先生は寢臺の側に坐して青年の額に手を當てた。

『おや熱がある。何故私に然う言ひませんでした？』

ヂョーヴァンニは顏を背けたかつたが、思ひ直して再びレオナルドの顏を眺めながら、手を合せて歎願した——

『私を追ひ出して下さい！　先生、私をお宅から追ひ出して下さい！　自分から出て行く勇氣がないのです。私は先生に對して罪を犯してゐます……私は卑しい叛逆者です。』

これが答へとしてレオナルドはヂョーヴァンニを抱へて胸に引き寄せた。

『何を言つてゐます？　私は君の懊惱を見てゐないと思ひますか？　私に何か惡い事をしたと思ふのなら私はそれを宥して上げます、恐らく私は何日か君に宥して下さいと賴む事がありませうから！』

ヂョーヴァンニは驚きの餘り眠い目でレオナルドを凝と見たが、突然師の胸に顏を埋めて啜り泣きしながら身體を打ち震はせて、低い聲で、

『私は已むを得ず又々先生の許をお暇しますけれど、先生、先生、これは親愛の情がなくなつたからだとお取りにならないやうに願ひます！　此の私は自分で自分が何んなになるのか些つとも分らないのです。時々自分で氣狂ひにならないか知らと心配する事があります。私は神に見捨てられた人間です！　おゝ先生！　親愛の情がなくなつたからだなぞと決して〳〵そんな事をお考へになつては可けません。正直を申しますに世界の何人よりも私が一番多く先生を愛してゐるのです！　父に等しいベネッデトに增して私は先生を愛してゐるのです！　唯

今の私のやうに先生を愛する者は今後とても決してゐない筈です！』

レオナルドは小兒を和めるやうにヂョーヴァンニを和め賺した。

『最う宜しい！　最う宜しい！　私は君の愛情に信を措かぬ者だと思つてゐるのですか？　そんな事をチェサレが匂はしたのですか？　だが君は何故チェサレの言ふ事を氣に掛けるのです？　チェサレは怜悧な男ですよ。誰も皆チェサレは私を憎んでゐると思つてゐますが彼れも矢張り大に私を愛してゐるのです。唯、チェサレの力に及ばない事柄が世の中にあるのですよ。』

弟子の心は鎭靖して涙を出さなくなつた。そして身體を起して物を探るやうな目付きでレオナルドを見ながら首を振つた。

『いゝえ、チェサレではありません。私自身でした。否、然うぢやない、私でもない、あの人でした。』

『誰です、あの人とは？』

ヂョーヴァンニは再び戰慄してレオナルドに寄り添うた。

『可けません！　可けません！　斷じてあの人の事は話さずに置きませう。』

『お聽きなさい、ヂョーヴァンニ』と言つたレオナルドの言葉は醫者が病兒に對する場合のやうに慰藉の中に峻嚴を含んで粗暴に近い調子であつた。『私が見ますに君の心には重荷があります。君は一々明ら樣に私に打明けなくちや可けません。分りましたか、一々私に話すのです。然うしてこそ初めて私は君を助ける事が出來るのです。』更に一寸間を置いて、『今言つたあの人とは誰だか聞かして下さい。』

ヂョーヴァンニはさも恐いものゝやうに四邊をぐるりと見廻してから、低い恐怖の聲で囁いた――

『先生の幻です。』

『私の幻？　何です、それは？　夢にでもそれを見たのですか？』

『いゝえ、實際に見たのです。』

これはヂョーヴァンニは譫言を言つてゐるのだ、と暫らくの間レオナルドは思つた程であつた。

『先生、あなたは昨夜まで三晩續けて丁度今夜のやうに此處へ入らつしやいませんでしたか？』

『いゝえ來はしない。何故私にそんな事を訊くのです？　君は其の覺えがないのですか？』

『覺えてゐますとも！　先生、確に然うです、矢張りあの人です。』

『併し何うした事からそんな考へを有つやうになりました？　何んな事が出來しました。』

ヂョーヴァンニが話たがつてゐる事を見て取つて、彼は努めて話の緒口を切らせようとした。蓋し斯くして彼は慰安を得るであらうと考へたからである。

『其の話は斯うなのです。今夜先生が此處へ入らしつたやうに昨晩まで三晩續けて、然かも丁度此の時刻にあの人が來たのです。先生が其處に然うしてゐらつしやるやうに此の寢臺の端に坐つて、言葉と云ひ、動作と云ひ、先生と一分一厘の相違もありませんでした。顏は先生そつくりでしたが併し恰ど鏡に映つてゐるやうに見えました、それに先生のやうに左ぎつちよでなかつたものですから私は直ぐ心の中でこれは多分先生ではあるまいと思ひました。勿論あの人は私の心の中を知つてはゐましたが、空恍けて些つともそんな樣子を見せませんでした。

詰り雙方共に知らない振りをしてゐたのです。唯、歸る時にくるりと私の方を振り向いて、『ヂョーヴァンニ、君は私に似た人を見た事がありませんか？　若しそんな事があれば君は又其の人に逢ひます、少しも恐れるに及びません』と言ひました。これを聞いて私はすつかり呑み込めたのです。

『そして君は未だにそれが實際にあつた事だと信じてゐますか？』

『何うして信じないでゐられませう、唯今先生を見てゐるやうにあの人を見てゐたのですもの。全く其の通りなのです、そして私と言葉を交しました！』

『何と言ひました？』

ヂョーヴァンニは手で顏を蔽うて頓には答へなかつた。

併し遂に自分の言葉の意味を否むやうな語調で口を切つた。『それが善い事ではないのです。實に恐しい事を言つたのでした。斯んな事を話しました――世界に存在する物は機械ばかりだ、機械の外には何もないのだ……そして其の機械は何んな物かと云へばあの蜘蛛、ぐる〳〵廻轉するあの血だらけな脚を有つてゐる恐ろしい蜘蛛に似てゐる。そして其の蜘蛛はあの人が……否、あの人ぢやない……先生、あなたが發明なすつたのです。』

『はゝ、何の蜘蛛だらう？　あ、然うか、分りました。では君は見ましたね、私が描いた圖を、あの戰車の車輪に大鎌の附いてゐる圖を？』

『そしてあの人が言ふのです、人間の所謂神なるものは永遠の力だ、恐ろしい蜘蛛を動かす力だ、あの血だらけの脚も此の永遠の力に依つて廻轉するのだ。そして此の神、卽ち永遠の力は眞理と非眞理、善と惡、生命と死

と云つたやうなそんな事には一向無頓着だ。そして神に祈つたところで靈驗があるものぢやない、何故なら此の神は數學と同樣頑として心を動かさないからだ。二と二は決して〳〵五にはならない。』

『分つた。それで分つた。君は無用な苦しみをしてゐるのだ。そして其の理由は私に分ります。』

『いゝえ、先生は未だすつかり御存じではないのです。あの人の言葉に依れば基督は犬死をしたのです、勝つて墓から出たのではありません、死を打ち負かしたものではありません、基督の身體は矢張り腐つた儘で墓の中に横はつてゐるのです。斯う言つたのを聞いて私は泣いたものですから、可哀さうに思つて大方慰める積りでせう私に斯う言ひました。《泣くには及ばない。一體基督なるものがないのです、愛ならばあります、偉大なる知識の娘の偉大なる愛ならばあります。一切を知る人が一切を愛するのです。》何うです、先生、あの人は先生の言葉を其の儘踏襲したのでした！　それから又言ひました。《愛は厖弱、驚駭、無知から來ると古くから言つてゐるけれど併し私は君に言つて置きます、愛は力と眞理と知慧から來るのです、何故なら、善惡を知の樹の果を食へさらば汝等神の如くならんと言つた蛇は嘘を吐いたのではなかつたからです。》で私は此奴惡魔の許から來たのだなと知つたのです。そして彼を詛ひました。すると去りましたが併し又來るからと言ひ殘して行つたのです。』

病氣が言はせる譫言をレオナルドは非常に面白く聞いてゐたので、最早やこれを譫言とは思へない程であつた。ヂョーヴァンニの凝視は今は殆ど平靜に復したが併し恐ろしく譏刺的になつて、私の魂の底の底へ屆いてゐるのだとレオナルドは思つた。

『そして最も恐ろしかつたのは』とヂョーヴァンニは徐ろにレオナルドから離れて、鋭い目で先生の顏を正面に

見据ゑながら語を續けた。『最も恐ろしかつたのはあの人が然う言つた時に微笑した事です。然うです、微笑したのです！　あなたが今私を見て微笑してゐらつしやるやうに……あなたが！』

と言ふと同時に彼の顏は急に蠟のやうに靑ざめ、目もギラッとなつて、顏を蹙めながらレオナルドを押し遣つた。そして恐怖の聲で荒々しく叫んだ。

『貴、貴樣は又か。貴樣は私を瞞してゐるのだな！　きり〳〵出て失せろ！　私の後ろに失せちまへ、此の惡人奴が！』

これを聞いてレオナルドは椅子から立ち上つて、威壓的の目をヂョーヴァンニに据ゑた。

『ヂョーヴァンニ、實際君は此宅を出る方が宜しい。君は聖書に、恐怖る人は愛に完きこと能はずとあるのを覺えてゐませう。君は果して私を完全に愛するのなら何の恐怖もない筈です、君の唯今の事が悉く迷ひであり狂氣である事が分る筈です。私は人が思つてゐるやうな人間でない事も、私に幻なんぞゐない事も、それからレオナルドを非基督教徒だと言る人々に比して恐らく一層眞實に救世主基督を信じてゐる事も皆んな君に分る筈です。では左樣なら、ヂョーヴァンニ。』

彼の聲は名狀し難い苦痛を帶びて震へてゐたが併し怨みの籠つた聲ではなかつた。レオナルドは室を出ようと立ち上りながら、私の言葉に傷りはなかつたか知らと自分に訊ねて見た。そして縱ひ此の弟子を救ふものは嘘を除いて他に何物もないとしても、それでも自分は斷じて嘘を吐く事が出來ないと思つたのであつた。

其の時不意にヂョーヴァンニは身を投じてレオナルドの脚下に跪いた。

『先生、宥して下さい。これが狂氣のせゐだといふ事は私分つてゐますから！　斯んな恐ろしい考へは攘ひ除けますから！　何うでも宥して下さい、先生。此宅に置いて下さい！』

レオナルドは弟子を眺めた。其の目に深切が輝いてゐた。そして俛首いて額に接吻した。

『ではヂョーヴァンニ、其の約束を忘れちやなりませんぞ！』と言つてから更に靜かに言ひ足した。『さ、下へ行きませう、此處は酷く寒い。君が全快するまで此の部屋にゐさせたくありません。唯今私は大急ぎで仕事をしかけてゐるのですが、何うです君は手を貸して呉れませんか。』

十三

そしてヂョーヴァンニをば書齋の隣りにある寢室に導いて火を焚き付けた。すると火はパチ〳〵燃え上つて物皆の上に氣持好い明るさを擴げたので、そこでヂョーヴァンニに繪を描く木の板を調製するやうにと命じた。蓋し此の仕事をさせて病氣を鎭めてやりたいと欲したからで、果して案に違はずヂョーヴァンニは漸次仕事に熱中するやうになつた。

凡そ世の中の畫板の調製ぐらゐ珍らしいそして大切な業がないものゝやうに、此の弟子は一心不亂に先生の手助けをして、蟲食ひを禦ぐため木の板をば砒素汞と猛汞との重硫酸鹽並びに酒精に浸した後、凹みや罅痕のある箇處には雪花石膏、糸杉脂、乳香の類を詰めて、平らな板で其の面を擦つて平滑にした。レオナルドが手傳つてゐるため仕事は例に依つて小兒が遊戯をする時のやうに譯もなく捗つた。そして先生は仕事をしながらブラシ

の話をして其の製法を敎へた、即ち下等のブラシは豚の毛に鉛を嵌めて作るし、上等の物は鷲鳥の羽根に栗鼠の毛を入れて作るのであつた。他に尙だワニスの事、これから用ゐようといふ乾燥器の事、ヴェニスから來る青綠、酸化鐵の話などをして聞かせた。室內には愉快な、辛辣な、そして如何にも實際の業務に適はしい匂ひだと感ぜしめる香氣がプン〳〵漂うてゐた。ヂョーヴァンニは懸命に力を入れて亞麻仁油で畫板を磨いたので、身體中が熱つて熱の氣は消散してしまつた。そこで一寸息休めをしようと仕事の手を止めて先生の顏を見た時、先生は斯う言つて急き立てた。

『さ、早く、早く！　板が冷めたくなると油が中へ浸まないから！』

そこでヂョーヴァンニは背を曲げ口を結んで、兩足を踏張りながら一層力を入れて機嫌好く板を擦つた。

『何うです、氣分は？』

『好いんです！』とニコリ笑つて弟子は答へた。

他の弟子も此の暖い部屋へ集まつて來た。外は風が吼え雨が降つてゐるため、室內は一段と居心地好く且つ暖かに覺えた。サライノは寒さに震へながらも心を浮き〳〵させて這入つて來た。一ツ目入道アストロ、ヤコボやマルコも來た。併しチェサレのみは例によつて此の睦まじい群に加はらなかつた。

やがて板を乾かすため側の方へ片付けてから、レオナルドは透明な繪具の油の製法を說明して、土燒きの皿を持つて來た。皿の中にある白い胡桃の油を一面に蔽うてゐるのは琥珀色せる脂肪で、油は燈心のやうな長い紐を傳はつてポタリ〳〵硝子の器に落ちてゐた。

『御覽、御覽！　實に透明ぢやないか！　併し私の油は幾ら濾しても濁るのだ』とマルコが言つた。

『君は胡桃の皮を剝きますか？　皮を剝かなければ油は何うしても黒味を有ちますな』とレオナルドが言つた。

『然うですか。それでは先生、あの胡桃の薄い皮のために世界第一の名畫が危く代なしになるところでした！　何うです諸君、私は殆ど數字のやうに嚴密に先生に教はる通りにやるものだから諸君は私を馬鹿にするけれど、これは何うです、これは？』

弟子達は油の製造法を見ながら互に笑つたり、話したり、戲れたりした。夜は更けたが誰一人眠がる者はなかつた。そして家計係のマルコが制止するのも構はず薪をドシ〳〵火の中へ投げた。一同の陽氣さ加減は名狀すべからざるものであつた。

『さ、皆で話をしようぢやありませんか』とアンドレアは提議して自分から始めた。『一人の坊さんがゐました。復活祭の前の土曜日のこと、神前の水を取つて特別な一幅の畫圖に振つ注けたのです。畫家は驚いて何故そんな事をなさると言ふと、坊さんは濟ましたもので、善事を施せば百倍の應報到ると書いてありますと答へました。やがて坊さんが其の家を出ようとする時畫家は二階の窓から桶の水を浴びせました。《やあ御坊、あなたは私の一等好い畫を汚して善根を施しなさつたから私は其の百倍の報いをしたのです！》。』

話は幾つも續いた。そして誰にも增して一等喜んだのはレオナルドであつた。彼は頭を振りながら小兒のやうに笑つて目の涙を拭いた。からく〳〵と笑ふ其の聲は不思議に弱々しいので、背の高い、がつしりした體格とは不

釣合なものであつた。

此の上は何か食はなくちや眠れないと相談一決したのは夜中頃であつた。マルコが食物の分量を減らして夕飯を不足勝ちに宛行つたゝめこれは尙更の事であつた。アストロは食料室へ行つて殘りの食物を根こそぎ持つて來た。乾酪、阿列布油、パン、腐りかけたハムなぞを持つて來た。併し酒は悉目なかつた。

『樽は搖ぶつて見たかい？』

『上下左右に搖ぶつたけれど唯の一雫だつてありやしない。』

『おいマルコ、マルコ！　何うしようか？　酒なくて此の良夜を奈何せんだ。』

『金のないのに酒が買へるものか』とマルコが言つた。

『金はあります、ですから酒もあります』と言ひつゝヤコボは金貨を一枚投り出した。

と見たレオナルドはヤコボを目掛けて指を動かしながら、『此の惡魔の倅奴が、其の金は貴樣何うしたのだ？　きつと今度も又泥棒をしたのだらう。さ、此處へ來い、貴樣の其の耳を引つ擊いてやるから。』

『いゝえ先生、私神樣に誓ひます、泥棒したんぢやないんです、賭博で勝つたんです。若しかこれが嘘なら舌を切つて地獄へ追ひ遣られても構ひません。』

『まあ宜しい、盜んでも盜まなくても好いから酒を持つて來て呉れ。』

ヤコボは趁つて近くにある（金鷲）へ行つた。此處の客は多く瑞西の傭兵連で、店は終夜開いてゐることゝて白鐵の酒瓶を幾本か買つて歸つて來た。酒を得て人々は益々陽氣になつた。此の小さな酒取りが瓶を高く捧げたと

き沸々たる泡は赤い酒の中でブク〳〵閃いた。俺は金を出して是の者に振舞つてゐるのだ――彼は斯んな誇りで一杯になつてゐるのでそれは〳〵惡戯をする、冗談口を利いてトン〳〵飛び跳ねる、果ては音に聞えた酒豪の嘎れ聲を眞似て（袈裟なし坊主）の歌を唄つた――

頭巾、衣を惡魔に呉れて、オッホッホ、
兜巾、直綴添へてやろ、
偖つても、艶な比丘尼さま、
方丈樣のお蔑み、オッホッホ、
わしと二人で酒踊り、
ハッハッハ、オッホッホ。

尋いでバッカス祭の神々しい齋唱の歌を謠つた。これは拉典語で書いてあつた、祭禮の折學生が歌ふものであつた。

此の上天の祭禮に、
酒に水交る輩は、

永劫未來に至るまで、
水の中にぞ溺れなむ、
さて其の後は地獄にて、
火に炙らるゝうたてさよ。

弟子一同は先生の健康、畫室の譽れ、他日有福たらん事の願ひ――それらのために祝杯を擧げた。ヂョーヴァンニは乞食共のするやうな此の酒宴、硬きこと石の如き乾酪と饐えたパンを食ひ、ヤコボの盜み酒を飲む此の酒宴に於いてほど未だ曾て自ら好んで飽食した事はなかつた。

やがてレオナルドは莞爾として、

『諸君、聞くが如くんばフランシス上人は憂鬱を以て罪惡の最大なるものとして、神の喜悅を得んとする人は宜しく愉快たるべしと說教したさうです。かるが故に諸君、私等も上人の識見と神に對する永遠の悅びとのために飲まうぢやありませんか。』

此の思ひ掛けない言葉を聞いて弟子達は吃驚したが、獨りヂョーヴァンニは然うではなかつた。彼には此の語の趣旨が分つてゐた。

『えゝと先生、（愉快）に關するお話をなさるのは非常に善いです』とアストロは首を振り〳〵言つた。『併しですな墓の蟲けら見たやうに地上を這ひ廻る限り我々は何うして愉快になれませう！　人は何なり勝手に自分達の

欲する物のために祝杯を擧げるが宜しい、併し我がアストロ君は翼のため又飛行機のために飲むのです。あゝあ悪魔、我々に障礙を與へる重力、機械學の法則を貴樣持つて行つちまへ！』

『併し機械學がなくなれば君は遠距離の飛行が出來なくなりますが』とレオナルドは笑ひながら言つた。

尋いで宴は散じた。レオナルドは冷めたい二階へジョーヴァンニを歸したくなかつたので、爐の火が未だ僅か計り赤々と燃えてゐるを幸ひ、成るたけ其の方へ寄せるやうにして自分も手傳つて卽席の寢牀を作らせた。

十四

先生は（最後の聖餐）の基督の顏を大方描き上げたとチェサレから聞いて、ジョーヴァンニは幾度かこれを見せて下さいと乞うたが、其の都度レオナルドは未だ可けないと言つては延ばしてゐた。

併し到頭或る朝ジョーヴァンニは先生に連れられて、件の壁畫のある僧院の食堂へ行つた。見れば十六年間何も描かずに空けてあつた場所に基督がゐる。方形の窓を後ろにして雅各、約翰の間に坐せる基督が描き上つてゐる。窓は明いて夕暮の靜かな空模樣と青いシオンの峰々は其の背景になつてゐた。

それから二三日してジョーヴァンニは先生の吩咐で貴重な數學の書物を鍊金士ガレオットへ屆けに行つた事があつた。歸りはとつぷり日が暮れて、晝の間は强い風が吹いて雪融けがしてゐたのに、今は空氣に霜を帶びてそよとの音もない。道の上の轍や池の面に早や氷が張つてゐる。其處らにある落葉松には毀れて主のゐない鳥の巢が二つ三つあるが、低い雲が紫色せる其の梢の邊に垂れて動かずにゐるやうに見えた。暗闇はひた〳〵と押し寄せ

て來る。太陽の沒したあなたの地平線上には黃金、銅の筋が模糊として長く地に曳いてゐるし、カンタラナ川の水は未だ氷を結ばずに陰氣に且つ鐵のやうに黑く淀んで深さが測り知られぬやうであつた。

ジョーヴァンニは自分にそんな考へがあると認める事も出來ず、又實際のところこれは何うにかして亡くしたいものと大に焦りながらも、先生が描いた主基督の顏が自分には二樣の意味に見えて、それを心の中に比べながら惑はずにはゐられなかつた。目を瞑ると二つの顏は宛ら生けるがやうに前に浮び出る。其の一つの方は自分の兄弟とも見紛ふ顏で、人間に通じた弱點が滿ちてをり、血の如き汗を流しながら神に祈つて子供の如くに奇蹟を求めた基督その儘の顏であるし、他の方のは沈靜にして聰慧に、自分とは緣の遠い恐ろしい人のやうであつた。

そして此の二つの顏に名狀し難い相異はあるものゝ併し互の間に類似點があるのだと思つた。

何が何やら分らなくなつて再び精神錯亂に陷つたやうになつた。黑いカンタラナの水の上に出てゐる石に腰かけて、がつかりして俯向いて兩手の中に顏を埋めてしまつた。

其の時自分を嘲る聲がして肩に手を掛けた者がある。

『おい、君は此處で何をしてゐる？　冥土のアケロン川の亡者にそつくりぢやないか？』

振り向いて見るとこれはチェサレであつた。痩せてヒョロ長い身體をば灰色の長い外套で包んで、痩せた馬面が冬の薄暗がりの中に靑白く浮んでゐる容は緣起の惡い幽靈のやうであつた。ジョーヴァンニは立ち上つて共に步み始めた。枯葉は足の下でサラ〳〵と音がする。

『僕等が紙を搔き廻したのが先生に知れたかい？』とチェサレが訊ねた。

『然うだ、知れてゐる。』

『別に怒らなかつた？　然うだと思つたよ』とチェサレは意地悪る氣に笑つた。『勿論永久の御赦免さ！』

二人は沈默した。烏が一羽嗄れ聲を出して堀割を横に飛んで行つた。

ヂョーヴァンニは高い聲で『チェサレ、君は基督の顏を見たかい、あの最後の聖餐の基督だよ。』

『うん、見た。』

『そして――あの基督を君は何う思ひます？』

『君こそ何う思つてゐるのだ？』とチェサレは急に友の方を振向いた。

『口では言ひ難いが私の考へは……』

『打明けて話し給へ。君は滿足出來んのだね、あの顏に？』

『否、そんな積りぢやないのだ。併しあれは多分基督ではなからうと思ふが。』

『基督でない？　では誰だい？』

ヂョーヴァンニはそれには答へずに目を地上に垂れた。歩調は無意識の間に緩んでゐる。終に彼は口を開いて言つた。

『少年の基督を色チョークで描いてある畫ね、君はあれを見ましたか？』

『見たとも。鳶色の髪で、唇の緩りした、額の低い、あれは正しく猶太の少年さ、バルッコ爺の倅なんだ。君はあの方が好いかね？』

『好いつて云ふのぢやないがあの二つの肖像は殆ど似てゐないと思つてゐるのだ。』

『似てないつて？　だつて君、同じ顏ぢやないか。十五歳だけ多いか少いかの違ひさ！　併し君の言葉にも一理はある。多分二人とも同じ基督だらうが、其の本人と本人の幻ほどの似寄りがあるだけだ。』

『え、本人と本人の幻！』とヂョーヴァンニは戰慄して歩を停めつゝ『チェサレ、君は何を言ふのだ？　本人と本人の幻つて何の事です？』

『僕は然う言つたつて何故そんなに驚くのだい？　君は僕の說に不賛成かね？』

彼等は歩き出した。

『チェサレ！』突如として我れ知らずヂョーヴァンニは叫んだ。『私の言つた意味が分らない？　ね、君、先生が最後の聖餐の中に描いた全能者、全知者は果してあの基督だらうか？　橄欖山で石の投げられる程の距離を隔てて血の滴りのやうに流しながら跪き苦しんで神に奇蹟を求めたあの人間らしい基督だらうか？《我此の世に成就すべき爲めに來れる其の事をあらしむる勿れ、我の必らず來るべしと知れる其の事をあらしむる勿れ。父よ此の杯を我より取り給へ。》何うですチェサレ、一切の事は此の祈の中に包含されてゐるのだ！　これがなければ基督がないのだ。ソロモンの智慧全部と交換しろと言つたつて私は決して此の祈を讓りはしないのだ！　若し基督が右の祈願をしなかつたら人間ではないのだ、我々と同樣苦しみもしなければ死にもしないのだ！』

『君の意味は分つた』とチェサレは緩やかに言つた。『最後の聖餐の基督は確に未だ其ゲッセマネの祈をしなかつたのだ。』

四方は最早や暗くなつた。ヂョーヴァンニはチェサレの顔が明瞭見えないけれど變にキラ〳〵光つてゐるやうだと思つてゐる間に、突然彼は歩を停めて手を上の方に擧げながら低い嚴肅な調子で言つた。

『先生の描いた基督が果してゲッセマネの園で望みない奇蹟を祈り求めた弱い基督でないとすれば何ものだらう？　それを君は知りたいだらうね？　では宜しい、言つて聞かさう。何時かレオナルドさんが機械學の法則の話をした時に（おゝ爾の神聖なる裁判、爾はこれ力の源よ！）と言つた美しい文句を君は覺えてゐるだらう。あれなんだ、ヂョーヴァンニ、レオナルドさんの基督なるものはあの力の源なんだ、あらゆる運動の本原であり中心でありながら自分自身では動かないあの原動力なんだ。あの基督は畢竟永遠的の必然さ、神聖なる裁判さ、卽ち父なる神の意志なのだ。（正義き父よ、世界は未だ汝を知らず、されど我は汝を知る、我は人々に汝の名を告げたり）曰、（我を愛し給ふ神の愛は汝等にもあらん、我又汝等に爾くあらん。）ね、君、分つたかい？　愛は知識から生れたのさ。（大なる愛は大なる知識の子なり）さ。そして主の此の語を了解してゐるのは人間多しと雖も唯レオナルドさんだけなのだ。了解してゐるからこれを基督に化身したんだね。一切を知るレオナルドさんは從つて一切を愛するのだ。』

チェサレは默した。そして長い間二人は口を噤んで冬の薄暗がりの深い靜けさの中を歩んだ。遂にヂョーヴァンニは斯う言つた。

『チェサレ、四年前に君と私は此の道を一緒に歩いて最後の聖餐に就いて議論をした事があつたつけ。あれを君は覺えてゐますか？　あの時君は先生を侮蔑して基督の顔は何時になつたつて描き上るもんかと言つたし、私

は又君に反對したのだつた。それが今はあべこべで、君は私を駁して先生を辯護しました。本統にチェサレ、僕は夢にも思はなかつたよ——君がだね、丁度今のやうに先生のために辯護をする日が來ようとは夢にも……』

と言ひながら友を見ようとしたが、チェサレは顔を背けてしまつた。

『チェサレ、君も矢張り先生を愛してゐる事が分つたから嬉しいよ。然うだ、君は先生を愛するのだ、憎まう憎まうと思ひながら愛するのだ、恐らく私以上に先生を愛してゐるのだね。』

『未だ何か其の他に考へた事があるかい？』とチェサレは何事をか感動した青白い顔を徐ろに友の方へ向けて答へた。『實際は喜んでレオナルドさんを憎みたいのだが最早や憎まないで愛せざるを得ないのだ。それと云ふのも先人の未だ成さなかつた事をあの壁畫に於いて先生が成したからだ。恐らく先生自身でも僕程好くは——先生には不倶戴天の敵たる僕程好くは分つてはゐない大事業を成したからだ。』そして無理に笑つて見せて、『人の心といふものは實に妙なものだ！　一層のこと腹の底を皆んな君に言つちまはうか？　僕はね、君が唯今持ち出した四年前のあの時分に比べると寧ろ今日の方が先生を愛する事少いのだ。』

『何故だ、チェサレ？』

『これは多分僕自身の個性を尊重するからだらうよ。僕は最も低い人間中、最も低い者でありたい——僕は全くそれなんだ、ヂョーヴァンニ。先生の身體の肢體となり、先生の足趾となつて甘んずるよりも其の方が僕に取つて好いのだ！　マルコは繪具を量る匙や鼻の比例に滿足を見出すのだから彼は彼してゐるのが好いさ。僕は然うぢやない。僕はレオナルドさんがあの基督の顔を構成せしめた本質を討究したいのだ！　成程先生は僕達見たや

うな取るに足らぬ雛子のために恰ど鷲が巣で然うするやうに一生懸命になつて飛ぶ事を教へるだらうが、併しそれは何故かと云へば慈悲深いからだ、僕達を可哀相だと思ふからだ。目の明かない狗が庭にゐるのを見て可哀相に思ふ、跛の馬を見て可哀相に思ふ、斷末魔の搖搦を熟視するために死刑罪人を可哀相に思ふ――我々に對しても然う云つた筆法なのだ。詰り先生は太陽のやうにありとあらゆる物を照すのだね。だけれども其處だて、ヂョーヴァンニ、君考へて見給へ、人には夫々好みつてえ奴があるだらう。先生は蟲が路の上にゐるのを見ると、フランシス上人流に其奴を抓み上げて青い木の枝に載つけてやるが、僕の見るところ君は正しくあの蟲たらん事を望んでゐるのだ。兎に角僕は今直き先生のために壓し潰されるのだ！』

『ではチェサレ、君はそんなに思つてゐるのなら何故此宅を出ないの？』

『僕よりも君は何うだ、何故君は先生の家を出ないのだ？　おい、ヂョーヴァンニ、君は宛であの蛾なんだぜ――翅が兩とも蠟燭の燄で燃えたのに矢張り其の燄の周圍をぐるぐる翔んで歩いて其處から離れないぢやないか。ところで僕だがね、僕も若しかしたら蠟燭の燄に燒かれたのかも知れない……が併し僕には多分一つの希望がある筈だ。』

『何んな希望？』

『愚にも付かん希望さ、所謂狂人の夢なんだ！　それにも拘らず僕は折々此の希望に執着するのだ。そして其の希望といふのは斯うだ――他日或る人物が崛起する、先生に等しくして然かも類の違ふ人物が崛起する。ペルチノでもない、ボルゴニョーネでもない、ボッチチェルリでもない、大マンテーニャでもない――實際レオナルド

十五

さんはこれら過去の巨匠を凌いでゐるからな。僕が言ふ未識の人は斯んな過去の人ではないのだ、將來のために取つて置いてあるのだ。あゝ僕は此の巨大なる新人の光榮に接したい！　レオナルドさんの顏を眺めて、僕のやうな無用な蟲けらでもあなたを棄てゝ此の人に就く事が出來ます、あなたの鼻柱が折れたのでこれで滿足出來ましたといふ心を見せてやりたい。だつてヂョーヴァンニ、あの人はルシファーのやうに高慢なんだぜ、あんなに小羊のやうに溫順で且つ遍く慈善を施すくせに仲々氣位が高いのだからな。』

と言つて突然言葉を切つてしまつた。友の手はヂョーヴァンニの目に顫へてゐるやうに映つた。

『おいヂョーヴァンニ』と言つたチェサレの聲は變つてゐた。『僕は先生を愛してゐると君に告げた者は誰だい？　豈もや君が然うと推量したのではなからうし。』

『先生が自分で私に言つたのだ。』

『え、先生が？　では先生は知つてるんだね……』

再び彼は急に默つた。二人は言ふべき事も既に言ひ盡したので今は互に自分の考へ、自分の哀愁の裡に沒頭した。そして四辻に來て袂を分つた。

ヂョーヴァンニは俯向いて地面を見ながら川沿ひの狹い小路を機械的に歩んだ。川の水は暗く星影の映りがなかつた。彼はそれと氣付かずに『本人と其の幻のやうに！　本人と其の幻！』と繰返して言つてゐた。

千四百九十九年三月の初旬、レオナルドは毫も豫期してゐなかつたのに二年間の俸給を受け取つた。これは人人の噂に依ればイル・モロに對してヴェニスの大統領、佛蘭西王、並びに羅馬法王の三名が同盟を結んだとの報がミランに達したからで、公は此の警報に恐れをなして、佛蘭西軍勢が我がロンバルヂー地方に現れるや否や直ちに走つて獨逸皇帝の許に投ぜんとの目的から、從つて自分の不在中臣民の忠誠を確保せんため租稅を輕減したり、方々の未拂ひの分を返濟したり、知人等に吝まず寶物を贈つたりしたのであつた。俸給下附の事あつて少し後に、レオナルドの保護者を以て任ずる公は新に此の畫家に恩惠の印を寄せた。卽ちヴェルチェルリナ門の附近にあるサン・ヴィットレ僧院の葡萄畑約八十坪を賜はつた。これは恩賜狀に依れば、《ミラン公ルドヴィコ・マリア・スフォルツァはフロレンス人にして最も有名なる畫家レオナルド・ダ・ヴィンチに賜う》たものであつた。

レオナルドは御禮を述べるため宮城へ行つたが、政務繁忙の故を以て謁見を許されたのは夜に近い頃であつた。此の日一日中イル・モロは諸大臣や會計官と退屈な話を交へたり、軍用品の會計書を檢閲したり、且つ欺瞞、不誠實てふ蜘蛛網の古い結び目を解いて更に新らしい結び目を拵へたりしてゐた。公は自分が其の網の主たる蜘蛛であつた時分は大なる滿足を得たのであるが、今は形勢一變して自分は蠅の地位にゐるのであつた。

用務を片付けてから公は城濠の上にあるブラマンテ亭へ行つた。夜の靜寂は折々喇叭の音、哨兵の誰何・吊橋の鎖の音のために破られた。公が亭に這入ると直ぐ扈從のリッチアルデットは壁から突き出てゐる鐵燭臺に大蠟燭を挿し込んで、金の大きな平鉢に少しばかりパンを盛つてそれを公の手に渡した。其の時蠟燭の火が點々として窓から映つたため、それに引き寄せられて白鳥の群は濠の水の黑い鏡の如き上を馳せて來たので、公は少しづゝ

パンを投げてやつた。此の白鳥は亡きベアトリチェの妹イサベルラ・デステがマンツァから公に贈つたもので、マンツァを流るゝミンチォ川の葦生じ楊柳垂るゝ岸邊は此の美しい鳥を多く出すを以て名高い土地であつた。公は晝の間の政務や種々煩はしい事を終へてから此處に來て白鳥に餌を與へるのが何よりの氣散じであつた。此の鳥を見るにつけ思ひ出されるのは自分が未だ幼少の時分水草生ふるヴィヂェヴァノ池の滸にゐた頃の事であつた。そして薄暗い夕暮の城濠にゐるこれらの鳥は嚴つい砲眼壁、高い塔、砲彈、爆裂彈の間にあつて、星が映るため漸くそれと分る水の面を音もなく泳ぐのであるが、然かも水の上に霧が降りてそれが月光のため銀色に光るので、其の中を滑かに行き交ふ白鳥は宛ら幽靈のやうに見えた。公は神秘と魅力とが此の雪白の鳥に滿ちてゐるのだと思つた。

そして首を外に出して窓に倚り掛りながら尙も此の娯しみに氣を取られてゐたゝめ、此の時小さな扉が軋つて一人の侍從が側に來たのであるが、其の軋り音が耳に這入らぬと共に侍從の姿が目に見えもしなかつた。併し其の侍從が一枚の紙を恭しく公の手に渡すに及んで公は初めてそれと知つたのであつた。

『何か、これは？』

『ボルゴンヂオ・ボッタ殿から軍用品、彈丸、硝藥の計算書が陛下に屆いたのでございます。陛下を煩はし奉るのは恐縮の至りでありますが何分にも明旦昧爽に警護兵がモルタラに向つて出發致しますので——と斯樣にボッタ殿は申してをりまする。』

イル・モロは腹立たし氣に紙を手に取つて皺くちやにしてから側に投げ捨てた。

『晩餐の後には政務を扱はないとあれ程度々予が言つたではないか？　實に堪らん！　此の調子で行けば遠からぬ中に夜寢られない事になるだらう！』

侍從は依然俯向いた儘で後ろの方へ退つた。そして退りながら低い聲で（レオナルド樣が）と言つたが、幸ひ公がレオナルドの事を思つてゐたから好かつたものゝ左もなければ別段耳に止める必要がない程低い聲であつた。

『レオナルド？　何故予の前に連れて來なかつたか？　此處へ通せ。』

そして再び白鳥に餌を與へながら獨語した。

『レオナルドなら予の心を苦めないだらうて。』

そしてレオナルドが室に這入つて來た時イル・モロ公は寵姫に呈すると同じ微笑を以て迎へた。レオナルドは拜跪せんとしたが、先づ〳〵と公は抑へて額に接吻した。

『や、久しく逢はなかつた。能く來て呉れた。別段變りもないかな？』

『先づ陛下に御禮を申し上げねばなりませぬ……』

『澤山、澤山、御禮どころぢやないのだ。實は最つと何とかしたかつたが……まあ〳〵時日を假して貰はう、其の間には相應した報酬を差し上げるから。』

そして兩人は潛水機、水上步行靴、飛行機の翼の話をしたが、レオナルドが偶々國政、築城、マルテサナ堀割、大騎馬像の鑄込みなどの事に話頭を轉じた時公は厭やな顏をして努めてこれらの題目を避けた。そして突然何事

か思ひ出したものゝ如く公は自分の前に人がゐる事を忘れて、無言のまゝ牀を見詰めて虛氣症に罹つたやうになつた。そこでレオナルドは最早や退出しても好からうと思つてお暇を申し上げた。公は無心に首肯いたが、併しレオナルドが扉のところ迄步んで行つた時慌てゝ呼び戻して畫家の肩に自分の兩手を掛けながら悲氣な面持して凝と其の顏を見守つた。

『これでお訣れだ、レオナルド。唯今斯うして二人切りで面と面と向つてゐるが、二度と再びこれが出來るか何うかは分らないからな。』

『では陛下は私等をお見捨てなさいまするか？』

イル・モロは重苦しい溜息をして、語を止めて答へなかつた。

『予と其方は十六年間一つにゐたのだ』と遂に口を切つた。『十六年の間に予は唯の一度も其方を嫌忌したことはなかつたし、其方も又多分予を然うしなかつた事と思ふ。譯の分らぬ奴らには何とでも言はして置くが好い、後世になつてレオナルドに關して語る場合に、レオナルドの友人であつたイル・モロに對して一言の頌辭ぐらゐは呈して呉れるだらう。』

レオナルドは溫情を浴びせ掛ける事を好まなかつたが兼て入用の場合に應ずるため取つて置いた宮廷語を以てこれに答へた。

『陛下、出來るものならば今一つ生命を有ちまして陛下に御奉公致したうございます。』

『レオナルド、他日其方は予の事を思つて泣くだらうと思ふが……』

そして辛くも涙を抑へ留めてレオナルドを抱いて唇に接吻した。

『さ、これで歸つて宜しい、途中無事！』

斯う言つてレオナルドを歸してから再び久しい間ブラマンテ亭に殘つてゐた。ポタリ〳〵大蠟燭から遲く滴り落つる蠟の雫の外には何一つ亭の靜寂を破る音がなかつた。公は或は白鳥を眺めたり或は奇異な事を思つたりしてゐた。自分の暗い生涯、罪惡にすら汚れた生涯を、レオナルドが横切つて行つたのは恰どこれら雪白の鳥が砲門壁、塔、彈藥庫の下にある城濠の黑い水を横切つて通過したのと同じであると思つた。レオナルドは白鳥と等しく役に立たぬ者ではあるが併し嬉々として淸淨潔白な男であると思つた。

十六

レオナルドは公の許を去つたとき時刻は遲かつたが、それにも關はず弟子ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオの容體を訊ねるため聖フランシス僧院へ行つた。ヂョーヴァンニは重い腦膜炎を病んで此の僧院に臥してゐるのである。

千四百九十八年十二月にヂョーヴァンニは舊師ベネデットを訪ねた時、丁度ドミニカン派のバオロ師も此處に來てゐた。師はノロレンスから來たのでサヴォナロラに就いて二人に次ぎのやうに語つて聞かせた。

死刑の期日は五月九日の朝、其の場所はシニョーリア廣場と定められた。正に此の廣場はサヴォナロラ師が虛榮品を焚き火の審判を行つたところ、それが今は長い壇の一端に薪を積み重ねて薪の上に絞首臺を設けてあつた。絞首臺といふのは頑丈な丸太を一本地中に挿し込んでそれに一本の橫木を渡してあつて、橫木からは各々三條づ

つの絞首繩と鐵鎖がぶら下つてゐた。卽ち宛然として十字架の觀があるので大工達は何とかしてこれが形を變へんものと樣々に苦心したが其の甲斐は更になかつた。火の審判の時と同樣、廣場といはず、露臺といはず、窓、屋根の嫌ひなく人でギッシリ詰まつてゐた。死刑を宣告されたヂロラモ・サヴォナロラ、ドメニコ・ダ・ペスキア、シルヴェストロ・マルフィの三僧は、ヴェッキオ宮內の牢を出て件の壇に沿うて歩して法王の使節なるパガリョッチ僧正の前に居並んだ。僧正は椅子から起つてサヴォナロラの片手を執つた。サヴォナロラは瞬きもせず使節の顏を凝と見詰めたのに彼は敢て眺めかへす事も出來ず、震へ聲で僧職褫奪文を宣して躊躇ひ勝ちに《法王は戰爭の敎會、勝利の敎會より汝を除く》と終りの文句を言つた。

ヂロラモはこれに答へて《戰爭の敎會は宜しい、勝利の敎會より除くは可けない、それは汝の權力外の事ぢや！》と答へた。

三人の僧は衣を脫ぎ下着のみを着けて更に前に進んで今度は法王委員がゐる監督席の前に立つた。委員等は三人を異端と宣告し更に分離派の者であると宣告した、三人は更にフロレンス共和國八人會の前に進んだ。八名の大官は嚴然として《人民の名に依つて汝等三名を死刑に處す》と宣告した。此處へ歩いて來る道でシルヴェストロは蹌踉として殆く轉びさうになつたし、ドメニコ、サヴォナロラも共によろけたのが人々の目に見えたが、後に至つてこれは舊神聖軍の少年が惡戲のためと分つた。卽ち壇の板の下に隱れて、數本の釘を上の方へ突き出して置いて死に行く人の裸足を傷けたのであつた。

第一に絞首臺に曳かれたのは薄馬鹿のシルヴェストロであつた。例に依つて彼はぼんやりした顏付きをして目

の前に起り來る事を宛も意識しないものゝやうに段を上つたが、絞首吏に輪繩を首に嵌められた時目を天に擧げて《主よ、主の御手に私の魂を捧げまする》と大聲で叫んで、刑吏の手を待たずに泰然自若、ビクともせず梯子からヒラリ足を外した。ドメニコ師は自分の順番が早く來れば好いと頻りに待ち遠しがつてゐたが、此の時合圖を得て直ちに絞首臺に躍り上つた、宛も神に召されて極樂へ行くものゝ如く恍然たる微笑を湛へて。

兩僧の死骸は横木の兩端に吊り下つてゐた。そして横木の中央はサヴォナロォラの分であつた。師は絞首臺に近いた時足を停めて下の群衆を見渡した。群衆は一齊に沈默した。其の沈默——恰どサンタ・マリア・デル・フィオレの大伽藍で信徒達が師の說教の始まるのを今か〳〵と心待ちに待つてゐた時のやうに深きものであつた。然るに此の時ヂロラモ師は一語をも發しなかつた。やがて絞首繩が首に嵌つた時一つの聲が聞えて《奇蹟を行れ、おい預言者、奇蹟を行れ！》と叫んだ——これが嘲笑の聲であるかそれとも悶々たる信仰の狂聲であるかは何人にも分らなかつた。然かも此の時既に絞首吏が此の殉敎者をば梯子から引き放した後であつた。

其の時一人の老職工が慌しく十字を切つて、サヴォナロォラが虛榮品や禁制物に火を掛けた時言つたと同一の文句《父と子と聖靈との御名に於いて》と叫んで、薪を目掛けて燃えてゐる松明を投げ入れた。此の男は數日間薪塚の見張りをしてゐた者で其の謙虛な顏には隱遁を欲する熱心が滿ちてゐた。

燄はパチ〳〵空中に飛んだが强い風が吹いて絞首臺の反對の方向へこれを追ひやつた。すると急に恐怖を感じた群衆は囂々と騷ぎ出して彼方此方に押し合ひへし合ひ踏みつ蹂りつ《三人の身體は火に燒けないのだ、見ろ、奇蹟だ、奇蹟だ！》と大聲を揚げて叫んだ。併し其の風も凪ぎて燄は高く眞直に昇つてヂロラモ師の死骸の周圍

を舐めた。そして師の手を縛してあつた繩は火に燒けて切れたゝめ兩手はダラリと垂れて火の中でビク〳〵動いた。多くの人々はこれを師が自分達に最後の祝福をして呉れたものだと見たのであつた。

火は燃え盡きて三人の僧は黑焦の骨と鐵鎖に附着して顫動する黑色の肉塊とに化した。彼の信徒は前方に押し進んで師の遺骸を拾ひ集めようとしたが軍隊はこれを追ひ散らして屍灰をば車に積み入れた。蓋しヴェッキオ橋の上から河中に捨てるためであつた。然かも其の途中で信徒は首尾好く幾度か屍灰を手に摑んで奪ひ取つたし且つ又師の心臟と思はるゝ肉塊を分捕した——

バォロ師は以上の話を終つてから聖き屍灰を入れてある小さな袋を二人に見せた。老ベネデットは袋を涙で濡らしながら再三再四これに接吻した。それから兩師は晩禱を行うため相携へて室を出て行つたが、やがて歸つて來て見ると、驚くべしヂョーヴァンニは磔殺像の前で卒倒してゐた。氷のやうに冷たい手が聢と握つてゐたのは聖灰の小筥であつた。

そして生死の間を彷ふこと三月、ベネデット師は晝夜共に彼の側を離れなかつた。彼の譫言は長い間續いたので、これを聞く老僧は戰慄したのであつた。サヴォナロォラ、レォナルド、聖母の事なぞを口走つた。其の聖母といふのは沙漠の沙の上に指で圖を描いて聖子基督に幾何の圖形と永遠的必然の法則とを敎へてゐた。

『これ基督や、あなたは何のために祈るのですか？』と病人は名狀すべからざる憂愁を帶びて度々繰り返した。

『世の中に安心もなければ奇蹟もありません、あなたはそれを知りませんか？　杯はあなたからは離れないのです、恰ど二點を連ねる最小距離が必ず直線であると同樣に杯はあなたから離れないのです。』

また主基督の兩つの顏が屢々ヂョーヴァンニの夢に現れた。互に似た顏ではないが然かも人と其の幻とのやうに類似して、一つは人間らしい悲哀と弱點とに充ち滿ちて、懊惱しながら神に祈つて奇蹟を求めつゝある顏、他は全能、全知の顏であつた。一は肉にて成れる聖訓の顏、他は力の源の顏、そして共に融和すべからざる永遠の敵のやうに睨めくらをしてゐた。ヂョーヴァンニは此の兩個を凝視した時、神の小羊の顏——卽ち溫乎たる裡に悲哀を藏して長く懊惱せる顏は次第に朦朧となつて惡鬼の顏に變じた。能く見るとこれはレオナルドがサヴォナロラを嘲つて描いたあの惡鬼の顏であつた。そして此の顏は全能者の幻を擯斥してこれを呼ぶに反基督敎徒の名を以てした。

ベネデット師の慈愛ある看護は其の効空しからず幸ひにも養子の生命は助かつた。そして六月の始めに步行が適ふやうになつたので、深切な老僧が百方說諭し悃願したが、それをば耳にもかけずレオナルドの畫室に戻つた。

そして七月の末に佛蘭西のルヰ十二世の軍はオービニ元帥、リユクサンブルグのルヰ、並びにヂアン・ヂアコモ・トリヴルチオの三名に統率されてアルプスを橫斷し、突如としてロンバルヂの平野に馳せ下つた。

十の巻　靜水——一四九九年——一五〇〇年

水の波を支配する機械的法則は又光波音波をも支配する、そして投射角と反射角とは相等しい——レオナルド・ダ・ヴィンチ。

公は國と富と自由とを失つた。彼の事業は一つとして彼の手に依つて完成されないであらう——レオナルド・ダ・ヴィンチ。

一

公の金藏は橫に著く狹く縱に甚だ長い地下の一室で、櫥の大櫃が積み重ねてあつて、ロッケッタよりは戌亥に方る塔の小さやかな鐵の扉から這入るのであつた。此の扉は壁の間に箝まつてゐて、レオナルドの筆に成る繪(但し書き止してあるもの)を以てこれを飾つてあつた。時は千四百九十九年九月一日の夜、ミラン公國の大藏卿アンブロヂオ・フェルラリと國庫收入の檢査官ボルゴンヂオ・ボッタの兩名は各々下僚を督して金藏の櫥の箱からシャブルで掬ひ出した貨幣、眞珠、其の他の財物を皮の囊に詰めて、封じ目には公の御璽を捺してこれを下部に渡して騾に附けさせてゐた。既に二百四十の囊に封印を施して三十頭の騾に附けたのに、蠟の垂るゝ蠟燭の光は未だ

箱の中に銀塊が澤山這入つてゐる事を明かにした。此の間イル・モロは携帶に便なる寫字檯に向つてゐたが、檯に帳簿、計算帳の類が堆く載つてゐるにも拘らず、ぼんやり蠟燭の火を見詰めて、別段これら出納吏の仕事に注意を拂はうともしなかつた。公の軍勢の總大將ガレアッツォ・サンセヴェリノが敗走して佛蘭西軍の襲來は到底免れないといふ恐ろしい報道に接して以來、公の知覺は妙に遲鈍になつて、恰ど感覺閉失症に罹つてゐるやうに見えた。

やがてアンブロヂオ・フェルラリは公に《陛下は金銀の延板をもお望みでござりませうか？》と訊ねた。公は顏を顰めて此の問ひに注意を向けようとしたが、反つて顏を背けて、五月蠅いとばかり手を振つて、再び蠟燭の方に目を注いだ。大藏卿の問ひは再び繰り返されたが、公は今度は注意する氣振りさへ見えなかつた。何とも返答がないため人々は公一人を後に殘して金藏を出て行つた。

それから數分の後、老侍從が來てミラン城の新司令官ベルナルヂノ・コルテの入來を通じたので、公は起ち上つて額を撫でながら此處へ通せと命じた。

高家の裔に信用を措かずに微賤の間から人物を登庸して最首を最尾に貶し最尾を最首に擧げるのが公の好むところであつた。右のベルナルヂノは素とこれ馬丁の子、幼少の折から宮廷に仕官して大宮人の衣を着してゐた者で、公はこれを擢いてミランの最高の官職を幾つも兼攝させてゐた。そして今は彼の能力、彼の忠誠に信賴する最後の證として、公の最後の要塞たるミラン城の防禦を彼の手に委ねたのであつた。

公は慇懃に新總督に應接して椅子に掛けさせてから、彼の前に城の圖面を擴げて、城とミラン市との間に協定

してある種々の合圖を說明した。例へば晝間に庭園用の彎曲刀（夜間ならば篝をあげる松明）を城の主塔から示せばそれが卽時救助を要するとの意味、白の敷布がボナ塔から垂れるのが城內に謀叛の企てありといふ印、椅子を繩で吊るしたのが火藥缺乏、女の下袴は酒の缺乏、ズボンはパンの缺乏、土燒きの壺は醫者の入用を意味してゐた。

右の暗號はイル・モロ自身の發明に係るもので、何か知ら此の中に今の公に取つては隨一の望み——無事安泰の望みが繫つてゐるかのやうに子供らしい滿足をこれに有してゐた。

『忘れずにゐて呉れ、ベルナルヂノ』と公は話を結んだ。『兼てから斯んな事があるものとすつかり見通してゐたのだ。金も火藥も食物も銃器も十二分にあるし、三千の傭兵には既に俸給も拂つてある。さ、これで此の城は其方の掌中にあるのだ。實際は充分三年間の包圍に堪へられるやうに出來てゐるのだが、予は三年とは言はん、唯の三月で好いから三月の間だけ何うでもして支へてゐて呉れ。で、若し三月の末に救ひに來なかつたら其の時こそ何なりとこれが最良の計だと思ふ事を行つて宜しい。これで一切の事は分つた筈だ。さよなら、神のお守りを受けるやうに！』と言つて對手を抱いて恩顧の意を表した。

ミラン城の新總督が退出してから公は扈從に疊牀を敷かせ、祈禱を捧げて横になつて見たが、何うしても眠れないので蠟燭に火を點じた。そして囊の中から一束の紙を出してベルリンチオニの苦手なるアントニオ・カンメルリ・ダ・ピストイアなる者の賦した一首の詩を選り出した。蓋し彼ベルリンチオニは佛蘭西軍近づくと聞くや否や保護者を見捨てゝ行方を晦ましたのである。

此の詩はルドヴィコとルキ十二世との戰爭を翼ある蛇と牡鷄との喧嘩に喩へたのであつた。

伊太利の君主ルドヴィコよ、汝が運命を膽に銘ぜん、
他人の無爲に學ぶこそ、宜しと我等思ふなれ、
實に語るも堪へ難や、あはれもの皆失せ去りぬ、
運命の神の笑みし時、あゝ我れ國の君たりし。
近頃まではルドヴィコに、世界は唯の莊園よ、
世界とそれの光榮は、己れが所爲と思ひしに、
無殘なるかな皇天は、彼の我慢の高くして、
僭越なるを見取りけん、あらゆる希望と謀略を、
忽ち破摧し盡したり、忽ち破摧し盡したり。

公の心は悒鬱に漬つてゐたが併し全然快々たるものではなく幾分は自己を以て殉教者となすの誇りがあつた。そして同じ詩人アントニオが先頃寄せた數篇の小曲の鄙俗なるものを思ひ浮かべた。

語りて言へ大なる君よ、世界は我れに與へられたりと。

時は眞夜中で燃え盡きんとする蠟燭の火はチラ〳〵搖れて暗くなつたが、公は依然薄暗い室内を歩んで樣々の心配事や盲目の運命の神が公平を失せる事、人民の忘恩などに就いて考へてゐた。

『予は人民に何んな惡事をした？　何故彼等は予を憎むのだらう？　やれ惡黨だの、やれ人殺しだのと蔑すけれど予の行爲は弟を殺したロムスル以上に出ないのだ。シーザー、アレキサンダー、其の他古代のあらゆる英雄の以上には出ないのだ。そして彼等は果して惡黨か、人殺しか？　オーガスタスやアントニーヌ以來未だ見られなかつた黃金時代を新に人民に與へるのが予の希望だつたのだ。最う暫らくの事で伊太利を予が統治して一統しようとしてゐたのだ、詩神アポロの月桂樹も、思惟の神パラスの橄欖樹も、爛漫たる花を開いて平和の時代も始まれば、ミューズの神々を崇拜する事も始まる筈だつた。凡そ君主の中で戰爭行爲に重きを置かずに、黃金的平和の結實や能才の保護に重きを置いた者は此の予が嚆矢ではなかつた？　ブラマンテ、バチォリ、カラドッソ、レオナルド其の他隨分少くはないのだ。やがて武器の響きを忘れる日が來ると、以上の巨匠の名が人々の腦裡に記憶されるのだ。スフォルツァの名と共に記憶されるのだ。北の蠻族が予の業を妨碍しなければ、新ペリクレースたる予の新雅典を何處まで隆盛ならしめるか分らないのに……でも何故？　神樣、何故此の事を許して下さゝぬ？』

と獨語して項低れながら先刻の詩、

實に語るも堪へ難や、あはれもの皆失せ去りぬ
運命の神の笑みし時、あゝ我れ國の君たりし

に就いて考へ込んでゐた。

蠟燭はパッと最後の光を發して天井の穹窿や金藏の扉に描いてあるマーキュリーの畫を照らしてから微かになつて消えてしまつた。公はリッチアルデットに目を覺まさせては氣の毒だと思つて探り足に寢臺の方へ行つて再び横になつた。そして此の度は直ぐに眠る事が出來た。

其の夜の夢に公はベアトリチェの前に跪いてゐた。蓋しベアトリチェは公がルクレチァと通ぜる事を嗅ぎ付けてそれを難りながら顏を眞向からピシャリ打つたのであつた。公は打れて痛くはあつたが、それよりも妃の甦つたのが嬉しいので、神妙に折檻を受けつゝ其の手にこれを執つて愛慕の念に逼つて啜り泣きした。併し其の時突然自分の前に立つたのはベアトリチェでなくてレオナルドが金藏の扉に描いたマーキュリであつた。マーキュリは公の髮を掴んで喝鳴つた。

『おゝ此の馬鹿者が！　此の盲人奴が！　貴樣は此の上何を望むのだ？　貴樣がこれ迄に犯した欺瞞は神の公平な罰を免れると思ふか？　人殺し奴！　惡黨奴！』

目が覺めたとき朝日は窓に照つてゐた。公卿、騎士、隊長、獨逸傭兵等、約三千人は馬に乘つて北の方卽ちアルプスに通ずる本街道で公の來るのを待つてゐた、これは公を護衛してマキシミリャンの宮廷に到るためであつた。

ルドヴィコは馬をグラチェ寺に寄せて亡きベアトリチェの墓に最後の祈りを捧げた。それから後刻、太陽高く空に

昇つた時、鹵簿は肅々として進行を始めた。コモ、ベルラッヂオ、ボルミオ、ボルヅァノ、ブリシナを經てチロール地方に至り、インスブルック市に到るべく。

二

時雨降る秋の時候とて道は泥濘多く行旅に二週日以上を費した。九月十八日、公は疲勞せる上に氣分惡く覺えて、其の夜を山の洞穴で過さんと決心した。洞穴は僅か二三の獵夫の假宿に過ぎない程手狹な處なので、これ以上便利な臥牀を見出すのは左迄難くはなかつたのに、態と此の荒涼じい場所を選んだ所以はマキシミリャンの使節を此處で迎へようといふ腹があつたからである。警衛の篝火は洞の鐘乳石や自ら出來上れる穹窿を照らしてゐた。夕餐は雉子の燒いたのであつた。イル・モロ公は齒痛のため頭を繃帶して疊椅子に坐し、火鉢の上に足を載せて、己が多大の不幸をば幾分滿足の念を以て回顧した。ルクレチァ・クリヴェルリは相變らず晴々しい顏を見せて依然として溫順に、そして此の高貴なる患者のために酒、胡椒、丁香、其の他利目ある香料を加へて痛止めの藥を調合してゐた。

『ですからオドアルド殿』とイル・モロは獨逸皇帝の使節に言つた。『ロンバルヂーの正當の君主が如何なる有樣で如何なる處にゐたか、あなたから皇帝陛下に言上して下され。』

公は鬱々として久しく沈默した揚句俄に多辯になる事があるが今は丁度それであつた。『狐には穴があり空の鳥には巢があるのに予は枕すべき處がないのだ。これコリオ』と傍にゐる史官を顧みて、『其方が年代記を編む場

合に此の事を脱してはならんぞ、エーニアスの友にしてトロイ人アングルスの末孫たる大スフォルツァの最後の君主が假の宿りをした此の場所の記述を脱してはならんぞ。』

『陛下、陛下の御不幸は新タキッスの筆を假るに値しまする』と獨逸の使臣は言つた。

其の時ルクレチァは鎭痛藥を勸めたので。公は語を止めて感歎の目で美人の顏を眺めた。ルクレチァの青白い克明な顏は薔薇色なせる燈火を受けて輝いて、黑髪は淸らかなる顏の上の方にする〳〵と滑かに卷き、額にはフェルロニエラの金剛石が一つ煌々と光つてゐた。そして彼の女は眞面目ながら然も無邪氣な目でまじ〳〵愛人を見た。唇には母らしい溫みある微笑が浮かんでゐる。

『可愛い奴！　此の女は決して予を賣らないのだ』と公は心の中で考へながら其の手から藥を受け取つた。そして再び史官の方を見て秀逸な警句を吐いた。『それから斯う書いて呉れ、眞正の友情は艱難の爐に於いて試驗せらるゝこと正に黃金が火中に於いて試驗せらるゝと同じ。』

童坊ヤナキは公の脚下に坐して其の膝頭をピシャリ打つた。

『え、お爺さん、お前さん何故そんなに陰氣臭くしてゐらつしやる？　そんな御不興は休戰ぢや！　お爺さんえ、死病なら兎も角、其の他の病なら何一つとして療法のないのはありませんぞ。ぢやに依つて、さ、さ、俺の言ふ事を肯かつしやれ、死んだ大名よりもピン〳〵生きてゐる驢馬の方が增しでござるて。へッ〳〵！　フッ〳〵！　これさ、見さつし、見さつし、俺達は馬の鞍を斯んなにどつさり有つとりまするぞ。』

『そしてそれが何うだと言ふのだ？』と公はガッカリ疲れを覺えながらも訊ねて見た。

『モロちやん、モロちやん、昔々あつたとさ……』

『宜しい、其の昔話を聞かして呉れ。』

『昔々ネープルスに王樣がござりましての、畫家のヂオットに吩咐けて國の圖面を壁に描かしたと思ひなされ。ところがあの慮外者奴、如何にも頑丈さうな驢馬を一匹描きました。背の鞍に付けたるは王室の御紋に笏に冠の三品、そして今一つ別の鞍を鼻で嗅いでゐるが、それにも紋章、笏、冠が載つけてあつたのぢや、これぢやてお爺さん、此の頃ミランの奴らは佛蘭西の鞍を鼻で嗅いでゐるが併し奴らの事は構はず打遣つて置きなされ、今直き其の鞍で背を擦り剝いて、ほッほ此奴めがと放り出すやうになるからなう。』

『昧者時に賢なりぢや』と此の朴念仁に寂しい笑ひを見せて公は言つた。『コリオ、史に記して置け……』

と未だ言ひ終らぬ中に馬の嘶き、蹄の音、人々の聲騷しく洞の外に聞えた。侍從のマリオロ・プステルラは顏色靑醒め焦立つて慌しく室へ這入つて來て祕書長カルコに何事をか囁いた。

『何か出來したのか？』と公は訊ねた。

誰一人これに答へなかつた。そして一樣に目を下に垂れた。

祕書は聲を震はせつゝ『陛下』と呼び掛けたが併し其のまゝ言ひ淀んだ。

『主よ、陛下を護らせ給へ』とルイギ・マルリァニは言つた。『御用意されませ、凶報が參りました、ミランから——』

『さ、言へ！　言へ！　是非言へ！』公は靑くなつて斯う連發しながら入口の方を見ると身體に泥が跳ね上つ

て旅で疲れた一人の男がゐたので、マルリアニを押し退けて足早に件の使者の方へ行つて其の手から書面を奪ひ取り、封を押し切つて颯と電光のやうに目を通すか通さぬに一聲呀と叫んで卒倒した。其の時早くマルリアニとプステルラは辛くも公を抱き留めて下に倒れるのを支へた。

サン・サチロ祭のあつた九月十七日、ミラン城の司令官ベルナルヂノ・ダ・コルテは君公に叛き、城門を開いて佛蘭西の元帥ヂアン・ヂアコモ・トリヴルチオを招き入れたのである。

イル・モロ公は策略上から氣絶の眞似をする事が巧みであつたが、今は種々と手を盡して漸つと息を復させたのであつた。公は再び正氣になつた時喟然として長歎して十字を描き低い聲で獨語した。

『ユダ以來ベルナルヂノのやうな謀叛人は未だゐないのだ。』

そして其の夜は一語をも發しなかつた。

數日の後公はインスブリュックに到着して皇帝の殊遇を受け宮城に起臥する事になつた。或る夜のこと、公は彼處此處部屋の中を歩いて土耳古の沙爾丹に派遣する密使に持參せしめる國書を口授しながら、それをカルコに書き留めさせてゐた。老秘書は顏面に注意力を漲らせ、スラ〳〵と早く筆を運ばせて君公の口から洩れ來る語を紙上に寫し取つた。

『陛下に對し朕の堅固且つ不變なる好意を呈し（と信書に書き付けさせた）朕が失ひたる領地を恢復せんがためオットマン帝國の强力なる統治者たる陛下の寛宏なる度量に訴へて救助を得候事と信じ候に依り三道より一名づゝ使節を派遣致し候、これ責めては一名たりとも安着して此の信書を陛下の膝下に捧呈せしむる爲に外ならず

候。彼の羅馬法王の不信にして兇暴なる……』

と言ひ掛けた時、落着きはらつた秘書は筆持つ手を止め、公の方を見上げて眉に八の字を寄せた。蓋し若しや自分は聞き違つたのではあるまいかと思つたのである。

『法王？』

『然うだ、法王だ。さ、續けて書いて呉れ。』

秘書は自分の仕事を再び眺めて、此の度は一段迅く滅茶苦茶に筆を走らせた。

『彼の法王の不信にして兇暴なる、佛蘭西王を使嗾してロンバルヂーを侵さしめ、以て彼我の間に干戈を交へしめ申し候。』

そして佛蘭西軍が勝利を得た次第を述べてから、

『此の不幸を受けたる朕は驚慌の餘り陛下の援助を待間假りにマキシミヤン帝の宮廷に身を避くるを以て賢き方法と判斷致し候』と公然事實を打明けて、更に、『人は悉く朕に叛き候ひしが就中ベルナルヂノ（と言つた公の聲は震うた）……ベルナルヂノ・ダ・コルテなる者は朕の胸に溫まりたる蛇、朕が眷顧寵遇を夥しく寄せたる奴隷ユダに等しき謀叛人……否、カルコ、基督教徒でない奴にユダの事を言つたつて無益だ、ユダ云々は消して呉れ。』

そして公は沙爾丹に慫慂して海陸並び進んでヴェニスを攻撃すれば容易に勝利を得て貴國永世の敵たる彼れ高慢なるヴェニスを全滅するに相違ないと保證した。

『願はくは陛下、陛下は御記憶下され度候、他の事業に於けると等しく此の戰爭に於いても朕の所有に係る一切の物は陛下の御隨意に任せ奉るべく候、陛下は全歐羅巴に於いて朕より以上に忠實なる同盟者を得られざるべく候。』

公は机の傍に來て今少し言葉を加へたい容子に見えたが、急に元氣を失くして手を打ち振りながらドカと椅子の上に腰を下ろした。カルコは氣を付けてインキの乾かぬ文字に沙を振り掛けてから不圖仰向いて見ると公は兩手で顏を蔽ひ、肩に波を打たせて啜り泣きしてゐた。

『主耶蘇、あなたは何故あつてお許しになりました？　何處に、あなたの永遠の正義は何處にあるのです？』

と公は唸つて、やがて蹙まつてゐる顏から手を外した。其の瞬間公の顏は弱々しい老婆のやうに見えた。

『バルトロメオ・カルコ、予が其方を信任してゐる事は其方にも分つてゐる筈だ。依つて其方の意見を打ち明けて予に聞かして呉れないか、予の遣り方は巧いか何うか聞かして呉れないか？』

『それは大土耳古へ使者を御派遣になる儀でございませうか？』

イル・モロ公は首肯いた。

老人は眉間に皺を寄せ、思案らしく唇を尖らせて一吹きプッと吹いた。

『成程狼と往來する者は狼と共に吼えねばなりませぬが、他の見地から此の事件を見ますると……詰り陛下の御諮問にお答へ致す事をお許し下さりますれば。私は……私はお待ちなさりませと申し上げたいので……』

『予は待つたのだぞ。今度こそミラン公は取るに足らぬ將棊の歩のやうに側の方へ押し遣られる者でない事を

見せなくちやならん。カルコ、予は常に正義と始終してゐたのに此の不公平な非難を受けたのだ。斯うなつては大土耳古は言ふに及ばず、縱し人は惡魔に愁訴したところで誰が何と言ふものか？』

秘書は諭すやうに、『併し不信心者が入寇致しますると若しや基督教の教會に大危險を釀す事になりは致しますまいか。』

『斷じてない、バルトロメオ！　それは予も考へて見たのだ。我々の神聖な教會に危害を與へる位なら予は千度の死でも甘んじて受けるのだが、まあ予の言ふ事を聽くが好い、其方は予の計畫を未だ充分に呑み込んではゐないのだ。』

と言つた時彼の唇に昔ながらの强慾な微笑が浮んだ。『予は奴等に羹を煮てやる、二度と再びあの惡黨共に神の世界を窺窺させないやうに幾つも網を絡ましてやる！　併しあの大土耳古だが……なあに、大土耳古が何だ、予の手の中へ收めれば唯の道具に過ぎないのだ……時機が來ればぽんと放り投げるさ。そして邪惡なマホメット教を剿絶してイェルサレムにある主の御墓をば不信心な犬共の不潔な管轄から奪つてしまふのだ。』

カルコは愼み深く目を下に向けて何の答へをもなさなかつた。

そして『これは宜くないが』と彼は心中で思つてゐた。『これでは夢も同樣だ、これでは政略も何もあつた譯ではない。陛下は餘り極度に走り過ぎて居らつしやる、結果の如何は頓とお考へには上つてゐないて。』

其の夜イル・モロは神と大土耳古とに懸けてゐる一縷の希望に勵まされて、兼てから氣に入りの繪の前で長い間祈りを捧げた、其の繪は卽ちレオナルドがベルガミニ伯爵夫人チェチリアの容貌と微笑とを移して聖母を描いた

ものであつた。

三

ミラン城の投降に先つたこと十日、佛蘭西の元帥トリヴルチオはミラン府に這入つた。歡迎の鐘は鳴り渡り、市民は歡呼の聲を揚げた。そしてルヰ王の入府は十月六日と定まつたので市民はこれが奉迎の準備に着手した。五十年前アンブロジアナ共和國と云つた頃自由を表現する爲めに造つた天使の巨像二箇を、王の行列に使用するため大伽藍の寶藏から取り出した。併し久しい間使用しなかつた事とて金箔を置ける其の翅を動かす撥條は强ばつて利かなくなつてゐたので、二箇ともに宮廷機械師レオナルド・ダ・ヴンィチの許に送つて修覆を乞ふことにした。

秋の某の日、夜が明けずに未だ暗い時レオナルドは机に向つて坐して精々と計算と幾何學の圖形とに着手してゐた。此の頃空中飛行學の研究を再び始めて別に飛行機を一臺製造してゐる最中なので、骨組みは既に出來上つて牀から天井に掛けて室内に擴がつてゐた。これは以前のやうに蝙蝠に似たものでなく大きい燕の形に出來て、一枚だけ完成してゐる翼を見ると、鋭い輪廓を取つて形纖細に、形狀と云ひ組織と云ひ共に美しい。そして此の翼の蔭でアストロは前ミラン共和國が作つた兩天使の木像を修覆してゐた。レオナルドは此の度の飛行機を出來るだけ精緻の鳥類の體制に模して見ようと決心したが、これは蓋し飛行機の模型に宛てゐるため自然は鳥を準備したからであつた。そして詳細に機械學の法則を考察すれば飛行の問題は自ら解釋が付くものと舊に依つて期待

してゐたが、然も知り得る限りは知悉したやうに思ひながら、何か知ら理解力の及ばない物があつて、且つ其の物は多分自分が通曉せる法則の範圍外に存するやうな氣がした。初め飛行機の實驗を試みた時と同樣、自分は微妙な分離線——自然が生んだ物と人間の手が作る物との區別をなし、生物體の構造と無生物の機械とを相分つ其分離線に違反して仕事をしてゐる事を發見して、自分は不可能、不合理を目的としてゐるのだと考へ始めた。

其の途端アストロは、『有難い仕事は出來上つたぞ！』と叫んで天使の木像の撥條を捲いた。

天使の重い翅は動いて、其の結果空氣が一搖り搖れたゝめ大飛燕の精巧な翼は動いてパタ〳〵と音を發した。それを見た鍛工アストロは名狀し難い愛着の情を示した。

そして天使を側に押し遣つて、『斯んな下らない化物のために私は時間を費したのだ！　先生、今後あなたは何とでも勝手に仰有るが宜しい、私は燕を仕上げる迄は決して此の室から一歩も踏み出しません！　何うか先生、尾の圖面を下さいませんか。』

『尾は未だ出來てはゐない。尙だ計算が要るのです。』

『だつて先生が約束なすつてから今日で三日になります。』

『それは已むを得ませんな。燕の尾は言はゞ舵です。些少の錯りがあればそれを以て全部が駄目になるのだから。』

『兎に角此の事に就いては先生は最も好く御存じだと思ひます。私はこれから今一枚の翼に着手します。』

『最つと待つ方が好い、屹度改良を要する點があるに相違ない。』

と聞いてアストロは深い注意を拂つて籐の骨組みを持ち上げ、牛の腱を網の目のやうに織つたのを被せてから殘る隈なく檢めて、興奮して戰慄しながら重たい聲で叫んだ――

『先生、怒つては可けません、まあ私の言ふことを聞いて下さい。例令先生が計算をなさつた結果、今度の機械も亦役に立たないといふ結論に達しましても、先生、此の私は誓ひます、斷じて飛行すると誓ひます。然うです、實に愚い先生の機械學が何うであらうと私は斷じて飛行します。これ以上待つ事は出來ません、何故と申しますに……』

と言ひ掛けたがそれなり突然默り込んだ。レオナルドは形の整はない、だゞつ廣い、そして强情つ張りな顏を凝と眺めた。其の顏には意義のない、そして一切の物を吸收せる唯一つの思想が印刻されてゐた。

『先生』とアストロは稍靜かに言つた。『私らは飛行するのかしないのか、何うか判然それを言つて下さいませんか。』

レオナルドは事實を赤裸々に語り聞かす心になれなかつた。

『實驗しない間は判然した事は分らないが、兎に角飛行は出來るものと思つてゐます。』

『其の一言で澤山！　それ以上訊くには及びません』と機械職工は手を拍つて言つた。『先生が飛行すると仰有れば既に飛行したも同樣ですから。』

そして忽然大笑した。

『一體何が可笑しいのです？』とレオナルドは訊ねた。

『御免なさい、先生！　毎時も私は先生の邪魔をして可けない。併し先生、此のミランの憐れむべき市民、佛蘭西の軍兵、イル・モロの事、佛蘭西王なぞの事を考へると非常に氣の毒になつて思はず知らず噴飯するのです。憐れな腹ン這ひの小蟲、憐れな飛ぶ蟋蟀！　始終同じ地劃に住んで、其の地面に足を繫縛されてゐる癖に、互に戰爭したり噬み合つたりして、それで以て一ぱしの大事を仕遂げた料簡でゐるのだから堪りません！　で、若し生きた人間が飛行するのを見たら何んなにか凝視して垂涎することでせう。多分自分で自分の目を信じはしますまい。定めし《神が二人ゐる》と言ふことでせう。アストロが神樣になる！　おゝ先生、世界はすつかり變化するかも分りません。戰爭や法律は亡くなると思ひます、主人、奴僕も然うでせう。何んな風に變るか兎ても我々には考へが付きません！　天使から成る唱歌隊のやうに天空へひら〳〵飛翔しますと人は皆ホザナ！　と言ふでせう。おゝ先生、レオナルド先生、實際然うなりませうか？』

彼は譫言を言ふ人のやうに物狂はしく右の言葉を發したのであつた。

『實に憐れむべき馬鹿者だ！』とレオナルドは心の中で考へた。『まあ何とした盲信だらう何が出來るものか！何うして此の男に眞相が話されよう？　そんな事をすれば氣狂ひになるかも知れない。』

其のとき表の戸をドン〳〵大きな音で叩くのが聞えた。それに次いで騷々しい人の聲、そして書齋の扉を打つ音がした。

『斯んなに早くから何奴が來たのだ？』とアストロは呶鳴つた。『畜生、痕瘡にでも罹つちまへ！　一體貴樣は何者だ？　決して貴樣を先生に逢はせはせんぞ。先生はミランを出て行つて此處にはゐられないのだ。』

『私ぢや、アストロ。數學家ルカ・バリオリぢや！　開けて吳れ！さ、開けて吳れ！　何うか開けて吳れ！』

アストロは扉を開けて僧を室に入れた。老人の顏は恐怖のため靑ざめてゐる。レオナルドは何事ですと忙がはし氣に訊ねた。

『レオナルドさん、私ならば別條なし――否、別條はありますがそれは後程お話し致すとして、偖て私は唯宮城から來たのぢやが……おゝレオナルドさん、ガスコンの弓兵が……あれは疑ひもなく佛蘭西ぢや……此の目で見たのぢやから……ガスコンの弓兵はあんたの作つた騎馬像を毀してゐるのぢや。さ、駈足で行つて見ませう、駈足で！』

レオナルドの顏色も靑くなつたが併し老僧を制止して、『お靜かに！　駈足で行つたところで何になります？』

『これはしたり、あんたの傑作が現に破壞されるのに、此處で手を束ねて坐つとるといふ法がありますかい？　トレムーユ殿に宛ての添書を私は持つてゐまするで、是非あんたと二人で歎願せねばなりませぬ……』

『それは最早や間に合はないでせう。』

『否、否、時間ならば大丈夫、園の墻の緣を傳つて走つて行けば宜いのぢやから。さ、何は兎もあれ大急ぎ！』

老僧に引つ張られるやうにしてレオナルドは宮城の方へ出掛けた。途すがらルカは自分の不幸を訴へたが、其の話に依れば酒に醉つた槍兵の一隊がサン・シンプリチアノ寺の僧房を襲うて打ち毀しを始めた。そしてルカの部屋にあつた水晶の幾何模型をば魔術に使用する道具に相違ないと思つて一つも殘らず粉齏して原子に歸せしめた。

『可哀ぞうではないかな、水晶の器具に何の科があります。模型は奴らに聊も害惡をなさなかつたのに』と僧は悲しんだ。

兩人は宮城の廣場の前まで來たとき未だ年若き佛蘭西の伊達男が數多の從者を引き連れて吊橋の上にゐるのが見えた。

『おゝジル殿がゐらつしやる！』とルカは滿悅して叫んだ。そして此の人々の事をレオナルドに說明して威權赫々たる重要人物で《鶴馴らし》の稱號を有し、佛蘭西王の鷺、鵲、鸚鵡、鵜なぞに歌を唄はせ、人語を發せしめ踊り並びに其の他の藝を仕込むのが彼の職掌であつた。そして噂に依れば《ジル氏の笛に連れて踊る二本足の動物は啻に鶴》ばかりではないとの事。疾くからルカは自分が著した《神聖なる比例に就いて》、《算術總論》の兩書を美裝して此の人に獻じようと思つてゐたのであつた。

レオナルドは言つた。『ルカさん、此の好機を逸しては可けないでせう。ジル氏の側へ行きなさい。私の事は何うにかして處置を付けますから。』

『いゝえ宜しい、宜しい。』とルカは聊か羞恥の體。『私は待つてゐても宜しい……否それよりも今直ぐ一走りに行つて、ジル殿はこれから何處へ行かつしやるか訊いて、直ぐ其の足であんたに同道して歸りませう。さ、あんたはトレムーユ殿の方へ行きなされ。』

そして動作輕快なる老僧は茶色の衣の裾を絡げ、木履をカラ〳〵履いて、《鶴馴らし》の後を追掛けた。レオナルドは唯一人吊橋を渡つて宮城の內庭に這入つた。

四

朝霧が立つて警衛の篝火は早や消えてゐた。大砲、彈丸、天幕裝備品、厩舍秣糧、屑物の類は庭に堆く、運搬に便なる小屋、料理の炙串、カルタ臺に用ゐる空樽、酒の大樽、それから食料品が塚を成して其周圍にあつた。種々の國語は入り混つて哄笑、怒罵、口論で非常に騷々しく、冒瀆、醉叫、醉歌が聞えて來るが、時々士官が其處を通る事があるので、其の都度急に森閑となつた。折々大鼓が鳴り、眞鍮の喇叭を吹いて、ライン並びにスワビアの槍兵隊に合圖を與へた。それからウリ、ウンテルワルデンの自由州から來てゐる傭兵は城壁の間からアルプスの角笛を吹いた。

人の群り、物品の群り、レオナルドは其の間を通り抜け、廣場の中央に出て見ると、渾熟せる技術を數年の間傾倒して勞作した幸福なる像は未だ其の儘になつてゐた。彼れロンバルヂーの征服者、偉大なるフランチェスコ・アッテンドロ・スフォルツァ公は依然たる禿頭を光らせ、依然羅馬皇帝の面影を留めて、其の容貌に獅子の殘忍と狐の狡猾とを表はし、雄々しい軍馬に跨つてゐる。そして軍馬は跳躍して敵の一兵を蹄の下に踏まへてゐた。

各國の弓兵は大きな群を作つて騎馬像を圍み、各自の國語で首を振り手を振つて仕形話をしてゐた。レオナルドは佛蘭西と獨逸の弓兵の間に激しい爭ひが起つてゐると推測した。卽ち彼等は大杯を四たび傾けてから、五十歩の距離に於て大スフォルツァの頰にある黑子を射當てる事にした。そして歩を量つて籤を引き、先手に射る者を定めて酒を注いだ。獨逸の弓兵は波々と注いだ杯を一杯、一杯、又一杯、更に一杯を物の見事に飲み干してから

狙ひを定め弓を絞つて兵と射たが、不幸、矢はスフォツルァ公の頰を掠め左の耳尖を殺ぎ取つたゞけであつた。今度は佛蘭西兵の番で、やをら彼は弩を肩に荷うたが、丁度其の途端見物人は動搖めいて道を避け、一人の騎馬武者を警護せる綺羅びやかな從者の行列のために通路を作つた。騎馬の將軍は件の弓兵を意に止めずに通り過ぎた。

『彼は誰ですか?』とレオナルドは訊ねた。

『あれがトレムーユ殿ぢや。』

『トレムーユとは好都合だ、丁度間に合つた。是非あの人を追掛けて願はなくちや』とレオナルドは心の中で思つた。

併し心に然う思ひながらも無爲と意志の麻痺とに抑壓されて只管凝として其處に立つてゐた、縱しや危險は生命の上に逼り來るとも一本の指をさへ動かしたくはなくて。僧ルカ・パチオリのやうに大官の後を追つて其の裾を引くために群衆の間を衝き進むのかと思ふと先づ嫌惡の念、羞恥の情を覺えた。其の時佛蘭西兵は矢を放つた。矢は空中を唸つて狙ひ過たずフランチェスコの頰の黑子をグザと貫いた。

『ビゴールー　ビゴールー!　モン・ジョア!サン・ドニ!(モン・ジョア云々は合戰の際に發する叫聲である)と佛蘭西方の軍兵は叫びながら帽子を高く振つて、佛蘭西萬歲と唱へた。喧々囂々たる人の群は再び騎馬像を取り卷いて、多數の國語の駄舌は又々始まつた。そして競技を新に取極めて矢の數々は空中を鳴り渡つて偉大なる公を傷けた。レオナルドは身じろぎさへ出來なかつた。恐ろしい夢の中で一つ場所に根が生えて立ち竦んでゐるやう

に、又此の事柄が到底人智を以て考へ盡せないものゝやうに、彼は自分の生涯中最良の六年を費して製作した藝術品――恐らくフィヂアス、プラキシテレスに續く此の彫刻家が技術を傾けて製作した最も偉大なる記念像――が――徐々に毀れ行くのを眺めてゐた。彈丸、矢、石礫は雨霰のやうに飛んだ、脆い粘土は塊片となつて崩れたり、濛々たる砂煙りとなつて毀れたりした。骨組みは露に見えて來た巨人像は鐵の一大骸骨となつた。雲間の後ろから太陽の光が流れ出た。後に殘つたのは首なしのスフォルツァ公、馬の軀幹、笏の缺片、臺座にある（此の神を見よ）の銘――これだけに過ぎなかつた。すると丁度其の時佛蘭西軍の指揮官にして老元帥たるヂアン・ヂアコモ・トリヴルチオが馬に乘つて其處へ通り合はせた。將軍は巨人像の場所に目を止めて非常に驚いたらしく、馬を停めてから手を目に翳して日光を遮つて再び眺めた。

『一體これは何うしたのぢや？』と將軍は從者を顧みて訊ねた。

『閣下、コックバーン大尉は部下の弓兵に許可を與へまして……』と一中尉は答へた。

『スフォルツァの記念像ぢや！　レオナルド・ダ・ヴィンチが作つたのぢや！　それがガスコンの弓兵の的になつたのか』元帥は叫びながら群る兵士を目掛けて突進した。兵士は像を毀す事に夢中になつてゐるため元帥の憤怒が分らなかつた。老將軍は佛蘭西兵の襟首を掴んで地上に投げ付けて荒々しく罵つた。そして激怒の餘り顏色はすつかり紫色になつた。

『閣下！』と件の兵士は膝を動かして藻掻きながら恐れ戰いて口籠つた。『閣下、我々は知りませんので……大尉コックバーン殿が仰有つたので……』

『貴樣のコックバーンは地獄に墮ちろ！　貴樣等は一人も剩さず絞殺して呉れる！』

そして劍を拔いて斬りに掛かるところをレオナルドはムンヅと手首を押へた。眞鍮の欄は曲つた。

トリヴルチオは其の手を引き放さうと焦りつゝ非常に驚いて睨んだ。

『何者だ？』と元帥は立腹の體で叫んだ。

レオナルドは答へた――

『レオナルド・ダ・ヴィンチ。』

『して何故あつて貴樣は敢て……』と老將軍は尙もブリ〳〵して呶鳴つたが、見ればすつきりした目で自分の顏を凝と見据ゑてゐるので、言はうと思つた事を止めて言葉を變へた。

『え？　君がレオナルドか？　何うか此の手を緩めて呉れ――君のために劍の欄は潰れたぞ。』

『閣下、私から願ひます、此の憐れむべき愚人共を宥して下さい。』

元帥は再び驚いてレオナルドを見詰めたが、やがて莞爾として首を振りながら言つた。

『ハテ稀代な人ぢや！　それは又何故ぢや？　何故君は奴等のために懇願なさる？』

『閣下は兵士を殘らず絞殺なさつたところでそれが私に何の利益がありませう？　自分で自分が何をしたのか彼等には分らないのです。』

老將軍は思案した後晴々しい顏をした。そして小さな聰い目は善性を以て輝いた。

『レオナルド君、私に分らぬ事が一つあるのぢやが。君は何うして此處を動かずに凝と見てゐる事が出事た？

何故私に訴へなかつた？　私でなくともトレムーユに訴へなかつた？　確かトレムーユは一時間ばかり前に此處を通つた筈だが――』

レオナルドは俯向いて顏を赧らめた。『時間が間に合ひませんでした。私は……』と吃つて、『私はトレムーユ閣下を知りませんから。』

『それは運が惡るかつた』と老元帥は言ひながら破壞された像をまじ〳〵眺めてゐたがやがて深い熱心を籠めて叫んだ。『君の巨人像のために私の部下の精兵を百名附して置けば好かつた。』

レオナルドは家への歸り途ブラマンテ亭の下に懸かつてゐる橋を渡つた。亭は自分がイル・モロに會つた最後の場所であつた。見れば扈從、馬丁は公が深く愛でゝゐた白鳥を狩り立てゝゐた。憐れな鳥は濠を逃げ去る事が出事ないので羽搏きして苦悶の聲を發した。柔毛、雪白の羽毛は點々として水上に漂ひ、血みどろな白い屍は此處彼處黑い水の面に浮いてゐた。新に傷いた一羽は斷末魔の搐搦に悶へて優美な頸を長く伸ばしながら鋭い聲で鳴いて、弱くなつた翼をバタ〳〵動かした。それは恰も其の甲斐がないのに今を最後の力を絞つて飛び去らうとしてゐるかのやうに見受けられた。レオナルドは目を背けて急いで去つた。

五

ルヰ第十二世は豫定の日に違はず十月六日はロンバルヂーの首府ミランに乘り込んだ。鹵簿を見物するため大勢の人は集まつた。そして新に修覆したミラン共和國の二天使が金の翅を動かしたとき人々は喝采した。

騎馬像破壞の事があつて以來レオナルドは飛行機に手を觸れなかつた。併しアストロは相變らず努めて時々一つしかない目に怨みを籠めてレオナルドの方を顧みた。熱心の火、希望の火が其の目に眞赤に燃えてゐた。

或る朝老僧パチオリは佛蘭西王の傳言を齎して駈け込んだ。傳言の趣は宮城に出頭すべしとの事であつた。新飛行機に錯誤のあるのを未だアストロに打ち明けないので、若しや自分の留守中此の熱心な鍛工は委細構はず實驗に取り掛かつて首の骨を折るやうな事があつては大變だと案じて何となくストロの側を離れたくはなかつたが、それにも拘らず强ひて出て行く事にして間もなくロッケッタ殿の廣間に通つた。此の廣間でルヰ十二世はミランの官吏並びに主立ちたる市民に接見してゐた。

レオナルドは注意して新王を見た。其の一體の容子の何處にも王らしい點は認められなかつた。身體は瘦せて弱々し氣に見え、肩幅狹く、胸部は窪んで不思議にも顏の皺が目に付いた。そして其の顏は疑ひもなく每時も苦痛に責められてゐるため、顯貴、優雅の容を表してはゐなかつた。彼の德操は高々見積つて町人型くらゐのところであつた。

玉座の一の階に年若い二十位の人が立つてゐた。質素なる黑衣を着て、帽子の穴にある數粒の眞珠と聖ミカエル勳章の金鎖とを除けば他に一つも裝飾は帶びてゐなかつた。顏は蒼白にして麻色の髮は長く、青黑い目に優しみはあるが然かも奇妙に爛々として注意深い事を示してゐた。

『ルカさん、あの若い貴族は誰です？』とレオナルドは囁いた。

『法王貌下の御子息です、あれがヴァレチノア公のケーザル・ボルヂア殿ぢや。』

此の年若い人が罪の數々を犯したといふ取沙汰をレオナルドは知らない譯ではなかつた。公が羅馬教會の（大旗手）てふ稱號を得てボルヂア家に於ける最優の地位を我が手に收めたい餘り、僧正の紫衣をば敝履の如くに捨てゝ之に換へ、且つ肉親の兄を殺したといふ風聞は殆ど疑ふべくもなかつた。啻にこれに止らず、兄を殺した眞の原因は右の野心の外に今一つ妹のルクレチアを我が物にせんとして兄弟の間に途方もない競爭が起つたからであるとさへ傳へられた。

『少くとも其の事實だけは有り得べからざる事だ』とレオナルドは公の沈靜なる顏と明るい溫柔な目を見ながら心の中で考へてゐた。

ケーザル公はレオナルドの凝視が自分を穿鑿してゐるのに多分氣付いたらしく、レオナルドを指しながら秘書に何事かを訊ねてゐた。秘書は恭しい面持ちをして低い聲で答へたので、それを聞いた公は今度は却て自分から熱心にレオナルドを眺めて唇の邊に美しい微笑を湛へた。

『否、然うぢやない、不可能ではないのだ』とレオナルドは自分の粗率しい判斷を心の中で駁した。『あの顏では何な事でも仕兼ねまいて。恐らく噂以上の惡事をやつてゐるかも知れない。』

ミランの委員總代は冗々しい書狀を讀み上げたのち玉座に近づいて件の紙を王に渡さうとしたが王は偶然それを取り落した。するとケーザル・ボルヂアは逸早く總代に先んじて器用に俯向いて卷物を拾ひ上げて王の手に渡した。

『彼奴は機會ある毎に逸しないのだ』とレオナルドの近くにゐる人は唸つた。

『全くだ』と他の人が相槌を打つた。『法王の息子だけに奉公の術は心得たものだ。大方朝になつたらルヰ王に着物を着せるだらうて。そしてシャツを溫める位はするんだぜ。いやさ、ルヰの厩に水を振つかけて掃除するだらうよ。實際そんな事を仕兼ねない奴だ。』

レオナルドも公の仕打ちは餘り追從に過ぎると思つたが、それは卑屈といふよりも寧ろ猛獸の愛撫のやうに恐ろしく見えた。併しレオナルドはこれ以上見物してゐる事は出來なかつた。バチオリはレオナルドを伴つて前の方へ出て王に引き合はせ、（最も洪大）、（最も優秀）、（最も强勇）と云つたやうな最上級を交へた短句で手短かに王に言上した。するとルヰは直ぐに（最後の聖餐）の話を持ち出して使徒の容貌を稱揚して熱心に畫中の天井の遠近法を說き出した。ルカは確かに王から此の大美術家に何か官職を賜はるに相違ないと思つてゐたのに不幸にも此の時一人の扈從が佛蘭西から來た書面を携へて這入つて來た。書面は愛妃ブルターニュのアンヌが女子を分娩したといふ報知であつた。王の注意は全く此の方に奪はれた。廷臣達は慶賀の辭を述べるため群つて來てレオナルドとバチオリは後ろの方へ押し遣られた。バチオリは友を再び前に出さうとしたがレオナルドはそれを拒んで直ちに宮城を辭した。

そして吊橋へ差し掛かつた時ボルヂア公の秘書アガピトが追つ掛けて來て、君公の命令に依りレオナルドを技師長に任ずる旨を言ひ渡した。此の職はイル・モロ公に抱へられてゐた時に奉じてゐたものであつた。

レオナルドは二三日考慮してから兎角の應へを致しますからと言ひ殘して家路を指して歸つた。

間もなく一群の人のゐるのが目に止つたので、何か凶事が起つたのではあるまいかと蟲が知らせるやうでスタ

スタ足を早めて行つた。此の心配は見事に當つてゐた。弟子のヂョーヴァンニ、マルコ、サライノ、チエサレは昇床がないため新飛行機の毀れた翼の上にアストロを載せてゐたのであつた。アストロの着物は血に染み且つ裂けて顔は死其の物のやうに白かつた。レオナルドには直ちに想像が付いた。此の鍛工は多大の決心と多大の自信とを以て飛行機の試驗に着手して、機を肩に宛行つて空中を飛んで墮落した。そして片方の翼が木の枝に引つ懸かつたから好かつたものゝ然もなければ死を免れないのであつた。レオナルドは弟子達に手傳つて憐れな不幸人を家に運び入れた。そして自分の手で寢臺に載せ病人の上に俯向いて傷を檢査した。アストロは正氣に復つた。そして哀願の目で主人を見上げながら小さな聲で言つた。

『おゝ先生、宥して下さい！』

六

ルヰ第十二世は公主の出産祝ひとして盛大なる饗宴を張ると共に感謝の供養を嚴肅に伽藍で擧行した。ミランは靜謐として市民は悉く平穩幸福を樂しんでゐた。そこで王は新に附庸したる臣民に固く忠節を誓はしめ、元帥トリヴルチオを總督に任命して、十一月の初旬佛蘭西に歸つた。

然かも靜穩の狀態はペテンに過ぎなかつた。トリヴルチオの殘虐と貪婪とは間もなく多大の嫌惡を招いた。放逐されたルドヴィコ公の味方は活氣付いて叛亂を勸める書翰を夥しく配布して人民を煽動した。非難し嘲侮してイル・モロを逐ひ出したミランの民は、直ちに公を以て君主中最も善良なる人、最も賢明なる人であると揚言

した。

一月の末に一群の人々はチチネエセ門の側にある稅務署を破壞し、其の翌日はパヴィアの附近に一揆が起つた。この一揆の原因は一人の百姓娘のためであつた。佛蘭西の兵士が此の娘の純潔を汚さうとしたので娘は箒の柄で兵士を打つた。すると兵士は嚇かしのため手斧を振り廻はした。娘は金切聲を揚げた。娘の親仁は棒切れを持つて飛んで來たが兵士のために殺された。其處へ集まつて來た大勢の者共は兵士に折り重なつて苦もなく殺してしまつた。すると佛蘭西の軍隊は村民をおびき出し且つ村を掠奪した。

此の暴行の報がミランに達したとき恰も火藥の上に火の子が一つ落ちたやうな作用を呈した。市民は廣場、往來、市場に流れ出て、《佛蘭西王を追ひ出せ！　トリヴルチオを追ひ出せ！　毛唐の奴を打ち殺せ！　イル・モロ萬歳！》と叫んだ。

小勢な佛蘭西軍はミラン三萬人の攻擊に抗する事が出來なかつた。目下伽藍の鐘樓に當てゝある塔の上にトリヴルチオは砲列を布いたが市民に發砲するに先つて今一度成る事なら和睦を講じたいと思つた。併し却て散々な目に遭つて市民殿の中に追ひ込められ既んでの事に殺されるところを、折好く瑞西傭兵が仲に這入つて命拾ひをしたのであつた。尋いで焚毀、掠奪が始まつて、市民に捕はれた外國人、並びに外國人の肩を持つ者は凡て責苦を受け且つ虐殺された。二月一日、トリヴルチオは大尉デスペとコデカラとに城を預けて自分は遁逃した。同じ日の夜、イル・モロは獨逸から歸つてコモ市の盛んなる歡迎を受けた。ミラン市は救世主のやうに尊んで擧げてイル・モロ公の歸來を待つてゐた。

一揆騒動の最終の日は砲撃のためあらゆる街路の方面は破壊されてゐたが、其の最中にレオナルドは住處を家の下の廣い窖に移した。そして極めて居心地好い部屋を工夫して繪畫、原稿、科學器械等、價値ある物は凡て此處に置く事にした。

レオナルドはケーザル・ボルヂア公に奉公する決心をして、遅くも千五百年の夏迄にはローマニャに行つて公に仕へようと思つた。そして其の前に騒亂が終る迄ミラン附近にあるヴァプリオの別莊に閑居してゐる友人ヂロラモ・メルチを訪れる事にした。二月二日卽ち奉獻節の日に僧ルカが來て宮城の浸水を報じた。それはトリヴルチオに從屬してゐたミラン人ルイギ・ダ・ボルトなる者が叛徒に投じて城の濠に注ぐ水門を悉く開いたゝめ水は附近の地を浸してロッケッタ宮の壁に屆き且つ武器庫、食品貯藏庫の方へ溢流してルイギの目的通り佛蘭西軍は殆ど降伏せざるの止むを得ざるに至つた。洪水は更に堀割から溢れてグラチエ寺に近いヴェルチェルリナ門から郊外の低地一帶に汎濫した。ルカは最後の聖餐が甚だ氣遣はしい狀態にある旨を述べて、兩人が出掛けて行つて何うなつてゐるか見ようと提議した。

レオナルドは態と平氣を裝つて唯今非常に忙がしいから行く事は出來ません。それにあの壁畫の位置は高いから水害を免れるでせうと答へたが、然かもパチオリが家を辭するや否や大急ぎでグラチエ寺の食堂へ行つた。煉瓦を敷き詰めてある牀には水溜りが未だ其の儘になつてゐて、沼氣と淀み水の惡臭が室一杯に匂うてゐた。水は四分の一キュビトだけ上りましたと一人の法師が語つた。

當時壁畫といへば凡て水彩で描くのが習慣となつてゐたが、獨りレオナルドはこれと異つてゐた。水彩に依る

壁畫は急速に仕上げる必要があるので、從つて斯くの如き方法はレオナルドの天才とは緣遠いものであつた。

《毫も疑惑しない畫家は成功を得ること尠い》と始終言つてゐる通り、彼は自己の疑惑、自己の逡巡、自己の實驗、修正、極端なる遲筆に適應する材料は獨り油のみであると考へた。經驗を積める大家達はレオナルドに說いてグラチエ寺は沼に臨んで從つて壁には濕氣があるから油繪具を用ゐても駄目であると諭したけれども其の忠告の甲斐はなかつた。實驗と、新しき道と、新しき工夫とを愛する念慮は彼を驅つてあらゆる警めに聽かざらしめた。卽ち特殊の方法を用ゐて繪具を混じて、壁をば先づワニス土を塗つて其の上に油土を被せ、更に漆喰と土瀝青と石膏とを以て塗り固めたのであつた。

件の法師と分れてからレオナルドは未だ水に漬つてゐる食堂の牀を渡つて、ずつと壁の側に寄つて畫を檢めた。透明な、そして雅致ある色は、害を受けるどころか汚れすら附着してゐないやうに見えたが、念のため蟲眼鏡を當てゝ畫面を隅から隅まで探つて見た。すると驚くべし左の隅、卽ちテーブル掛けが聖バルトロメオの足の眞際で廣い褶を作つて、ブラ下がつてゐるところに、小さな罅の這入つてゐるのが目に見えた。啻にこれのみならず色は旣に褪せ始めて白天鵞絨に似た一點が見えるか見えないくらゐ薄く生じてゐるが、これは黴になる初まりと見受けられた。急に畫家の顏は眞青になつたが、再び氣を鎭め微細に注意を拂つて檢査を續けて行くうち程なく事の仔細が分つて來た。卽ち土はワニスを加へた下塗りが濕氣を受けて膨脹したゝめ繪を描いてある漆喰塗りが浮いて、其の浮き上つた中に殆ど目に這入らない程微細な罅が出來て、そして壁の煉瓦の氣孔から汗を搔くやうに噴き出す鹽分が此の罅を通つて表面に出て來るのであつた。あゝ《最後の聖餐》の運命は定まつた。四十

年や五十年の間畫面の色は變らずにゐて筆者たる自分は生命のあるうちに其の褪色を見る事は決してあるまいが、それにしても早晩此の大傑作は滅びて歸復しない事は炳として明かである。レオナルドは凝と其處に立つた儘、自分の描いた基督の顏を眺めた。そして自分の第一の傑作たる此の顏が如何に自分に取つて親しみがあるかを此の時初めて知つたのであつた。

最後の聖餐の滅亡、騎馬像の破壞——彼が自分を當代の人々に繫ぎ且つ友人(恐らくは未だ生れてゐない友人)に繫ぐべき最後の絲は奪はれてしまつた。疾くの昔から彼の魂は孤獨であつたのに、それが今は以前に增して深くなつた。沙塵となつて壞れ去つた巨人像の粘土は天の風伯のおもちやとなり、基督の顏には澤山の黴が生えて輪廓が薄くなり色が汚れて褪せてゐる。今迄の生涯を形つてゐた一切のものは影のやうに消えかゝつてゐる。

何人にも一言の挨拶さへせずに僧院を出て歸路に就き、寂しい我が家に歸つて地下の窖に降りた。其の時アストロの臥してゐる室を通つたので一寸足を留めて病人の額に當てる繃帶を拵へてゐたヂョーヴァンニに訊ねた。

『又熱が出たのか？』

『然うです、譫言を言ひまして。』

レオナルドは繃帶を掛けるのを見てゐた。そして憐れにも失敗したアストロの熱心な唇から洩れる聯絡のない口早な譫言を數分の間聞いた。

『まだ〳〵高くなれ、眞直に太陽へ届かなくちや——翼に火が附かない限り太陽の側へ行かなくちや！　ほゝう此の小僧、貴樣は何者だ？　貴樣の名は何と言ふのだ？　何、機械學だと？　畜生、無禮な名前を吐かしやがる！　俺は未だ機械學なぞと名乘る奴を見た事がないんだぞ！　貴樣は一體何を嘲つてるんだ？　え、おい、それが冗談の積りかい？　ヘン、最う澤山だい、冗談なんか止しやがれ、俺は貴樣と何も關係はないのだ。おゝ！　俺を飛行させろ！　飛行させて呉れつたら！此の上我慢はならん！　否、待て〳〵、一寸息を入れさせて呉れ！おゝ……死んじまふのだ、地獄に墮ちるんだ！』

其の顏に苦悶が浮かんで恐怖の叫びが唇から洩れる。彼は深淵の中へ落ちるのだと思つてゐるらしい。併しこれが濟んでから再び口早に譫言した。

『いや、いや、俺を嘲つちや可けない！　過失は飽まで俺にあるのだ。先生は未だ準備が整つてゐないと言つたのだ。然う〳〵先生は然う言つたのだ。それに俺は先生に背いたのだ！　先生に背いたのだ！　叱ッ！　叱ッ！おゝ然うだ、俺は彼奴を知つてるぞ、一等小さい癖に一等重い惡魔——彼奴は機械學といふ惡魔なんだ！』

レオナルドはアストロの寢臺の上に首を差し伸べて凝視せざるを得なかつた。そして此の男も私のために滅ぼされたのだと竊かに思つた。

そしてアストロは氣が靜まつて漸次平穩の狀態になり間もなく熟睡した。そこでレオナルドは自分の部屋に退いて多忙な計算に取り掛かつた。其今の研究は風と氣流の法則に關するもので、飛行の問題に資する目的からこれを波と潮流の法則に比較してゐるのであつた。

『少し計り間を距てゝ池の中へ同じ大さの石を二つ投げると水面に二つの圓が生じて擴がるのだ』とレオナル

ドは獨語した。『すると二つの圓が相會する時に一方が一方の圓の中へ這入つて二等分するだらうか、それとも接觸點で屈折するだらうか？　私が實驗した立場から此の問題を答へる事が出來る――兩つの圓は互に交錯する併し交錯はするが各中心點は依然明瞭に石の落ちた點に止まつて決して混亂しないのだ。』

自然が簡單に此の機械上の問題を解釋した事を思うて彼は甚だ熱心になつた。

『何といふ美妙なことだらう！　まあ實に美しい！』

そしてレオナルドは一つの計算をしたが、其の計算の結果は彼の確信に下の事實を附加した。曰く、數學に關する諸般の科學は、理性の本然的必然に基礎を有する諸くの法則を包容して機械學の自然的必然を是認すると。

時間は知らぬ間に過ぎ去つて夕暮となつた。レオナルドは夕飯後弟子と談話を交へて寛いだのち再び仕事に取り掛かつた。明るいそして鋭敏な心は何となく自分が或る大發見の淵に臨んでゐるやうに思はせた。

『風が畑を吹いてライ麥の上に波を揚げる模樣を見るに波は後から〳〵と續いて、其のために莖は曲がるのだ、併し幾ら曲つてもちやんと地面に着いてゐて動きはしない。これと同じく水の上に波が立つても水其のものは動かないのだ。石を投げると漣が立つ、又風に搖られて漣が立つ、併し其の漣は水の運動ではないのだ。寧ろ水の皺といふ方が當つてゐる。其の證據には段々擴がる漣の圓の中へ藁を一本投げると、藁は浮いたり沈んだりするだけで決して其の位置を變へないから。』

藁の實驗に聯想して、嘗て同じ試驗を音波研究の際に應用した事を思ひ出した。彼は默考した――

『鐘を鳴らすと其の附近にある鐘に微かな震動と低い共振が生ずる。琵琶の音は其の側にある琵琶から同じ音

を喚び起すに相違ない。そして絃の上に一筋の藁を置いて其の絃を鳴らすと藁は絃の振動を示すのだ。』

研究に沈潛せるレオナルドの心は非常に活潑になつて來た。即ち振搖する二本の藁と藁の間（即ち波の表面に振搖するものと振搖する絃の上で振搖するものと）に未だ發見されない知識の大世界、即ち或る聯絡のある事を認めて、或る考へが電光石火のやうに迅く心の中をスッと横に閃いた。

『以上兩つの場合を考へるに機械的法則は孰れも同一だ！　水中に石を投じて其の表面に浮ぶ波のやうに音波も矢張り空中に擴まつて他の音波と交錯するけれども互に混同せずに中心は依然として舊の點を保持してゐる。音波はそれで好いとして偖て光線は何うか？　かの反響なるものは音の複出であると同じく鏡面の反射は光線の照り返しに外ならない、即ち物理上の力があらはす現象に就いて見るに其の現象中に存する機械的法則は唯一つしかないのだ、詰り唯一つの意志あるのみだ、そしてこの意志が即ち爾の裁判なのだ。おゝ力の源なる哉！

投射角と反射角は必ず相等しい！』

顏は靑醒め兩眼は熱心を以てキラ〳〵燃えて再び力の源云々の事を考へ始めた。そして此の度は以前よりも更に正確に自分は今前人が未だ覗かなかつた深淵を探らうとしてゐるのだと感じた。若し此の發見を實驗の俎に載せて果して其の確實たる事が分れば疑ひもなくこれはアルキメデース以來最大なる機械學上の發見であると思つた。今から二月前にヴァスコ・ヂ・ガーマが喜望峰を回航して印度に通ずる新航路を發見したといふ報知に接したとき坐ろに羨望の念を生じたが、併し今度は自分の方がガーマ、コロンブスに優る大發見を遂げんとしてゐるのだ。自分は彼等以上に神秘なる擴がりを認めたのだ。彼等は新らしい天と新らしい土を見出したが自分のは決

してそれに劣らないのだ！

併し壁を貫いて病人の呻めきと譫言とは耳を襲うて來る。レオナルドは其の聲に耳を傾けた。自分の機械學のこと、巨人像が意味のない破壞に遭つたこと、壁畫の滅亡の避け難いこと、そしてアストロの愚かにも恐ろしい墜落のことなどを思ひ出して自分の心に訊いて見た——

『此の度の發見も私が從來なした一切の物のやうに全然滅びるのだらうか、意氣地なくムザ〳〵と滅びるのだらうか？　そして私は何時になつても今のやうに孤獨だらうか？　斯うして地下の暗黑の中に生きながら葬られてゐるやうに何時までも一人ぼつちだらうか？　飛行機の翼を夢想した此の私が……！』

そして暫らく間を措いてから、

『何だつて構ふものか！　暗黑、沈默、忘却があるのみだ。誰一人私が何をしたか知らないのだ！　それを知つてゐるのは私、此の私ばかりだ！』

そして制し切れぬ誇り、捨つる能はざる勝利の感じ、力の感じは魂の中に充溢して自分が翹望した翼が既に地球の上の方へ自分を揚げてゐるやうに思はれた。

地下室は急に狹苦しくなつて兎もすれば窒息するやうに覺えた。大空と廣々とした田園を見渡したい念は耐へ切れなくなつた。そこで家を飛び出して大伽藍の方へと足を急がした。

八

此の夜月照つて空は澄み渡り大氣の溫かなるを感じた。氣味惡い火事の餘は未だ眞赤に空を焦がして濛々たる煙は渦を卷いて高く昇つてゐた。

市街の中心へ近くに從つて人々は益々增加した。激昂して物凄く、懸念に驅られてゐる群衆の顏は月の光に青く輝き、松明の閃光に映じて赤く光つた。そして昔のミラン民政國が用ゐた赤色十字架のある白旗、並びに夷狄たる佛蘭西人と戰うため吾れ先きにと執つた提灯竿、弩、拳銃、棍棒、戟、草掻把、杖の類を、月の光り、松明の閃めきは弄んでゐた。人々は蟻のやうに群つて、警鐘は鳴り、銃聲が轟いた。佛蘭西軍は城から市街に向けて發砲して、市街壁の石をば一つも剩さず打ち圮すと傲語した。併し其の大砲の殷々たる音よりも高く、鐘の聲よりも大きいのは市民の間斷なき叫びであつた。

『佛蘭西人を殺つ付けろ！　毛唐を殺つ付けろ！　王の奴を引き摺り下ろせ！　イル・モロ萬歲！』

レオナルドに取つて此の光景は恐ろしくて狂夢の印象に等しかつた。東の門の附近でピカルヂ產の十六歲の鼓手が絞殺されたが、これが執行役に當つたのは金工マスカレルロであつた。彼は少年の首に繩を懸け、其の頭を輕く叩いてさも嚴肅さうに口汚なく罵つた——

『父と子と聖靈の御名に於いて此の神の僕、此の佛蘭西人、サルタマッキアに麻繩の頸飾の騎士といふ稱號を與へる！』

『アーメン！』と群衆は返した。

小鼓手は危險身に迫つてゐる事を知らずに半分は笑ひながら將さに泣き出さんとする小兒のやうに目をパチク

りさせて後退りした。そして首を扭らせて繩の輪を緩めようとしたが不意に昏睡狀態から覺めたやうに眞青に戰慄せる美しい顏を群衆の方に向けて歎願しようとした。併し自分の聲は咆哮、嘲笑の裡に葬られたので歎願をば斷念して、罪のない、謙讓な犧牲の寄る邊ない容子をして、母か乃至は姉に貰つて首の周りの青い紐を附けてゐた小さな十字架に接吻した。マスカレルロは其の時彼を踏臺から突き飛ばして嘲笑した。

『しつかりしろ、頸飾の騎士先生！　何うして佛蘭西のガヤル踊りをするのか俺らに踊つて見せろ！』

そして衆人哄笑の裡に少年の體は恐らく戰慄して宛ら斷末魔の痙攣のやうになつたので、それが恰ど踊つてゐるやうに見えた。

レオナルドは尙ほ歩を續けた。すると間もなく襤褸々々の着物を着た一人の女が半ば毀れた茅屋の前で跪いて道行く人々に痩せた手を差し伸べて絶間なく叫んでゐるのが見えた。

『お助け！　お助け！　何うぞ助けて下さいまし！』

靴屋のコルボロは走つて來て、何事が起つてこんなに苦しんでゐるのかと訊いた。

『私の赤ん坊が、私の赤ん坊が！　赤ん坊は寢てゐました、小つちやな牀の中で可愛らしく寢んねしてゐました、それが床から落ちたのです。多分尙だ生きてゐますから何うぞ助けて下さいまし！　お〻助けて下さい！　たすけて……！』

其の瞬間、一箇の砲彈がズドンと鳴つて空中を飛び來つて丁度茅屋の屋根に中つた。梁は割れ、沙塵は柱を成して高く揚り、屋根は落ち、壁は碎けて、件の女は永遠に沈默してしまつた。

レオナルドは更に歩を進めて間もなく市民殿に達した。見れば大學生がオシイ廊臺の前に立つて群衆に演說を試みてゐた。彼は具さに古のミラン人の光榮を說き、此の際暴君は凡て剿絕して宜しく自由平等の時代を建設するを要すると勸告したが、併し聽衆は此の說得に從ひさうもなかつた。

『市民諸君！』と叫びながら大學生は一挺のナイフを振り廻はした。此のナイフは平時にあつては鵝ペンを削つて字が書けるやうになし、或は腸詰を刻み、時としては樹皮に戀人の名を彫り付けたりするのであるが、今はこれを復讐の女神（ネメシスの七首）と名けてゐた。『市民諸君！　一死以て自由のために盡すべき時は來ましたぞ！　我々の手は暴君の血で洗はねばなりません。彼暴君の胸にネメシスの七首を突き刺さねばなりません。共和國萬歲！』

と忽ち聽衆の中から幾つかの聲が叫んだ。

『馬鹿野郎！　貴樣の酒は何な葡萄を絞つて造つたのか知つてるぞ！　貴樣が我々に與へようといふ其の自由が何な物だか知つてるぞ！　此の間諜奴！　謀叛人！　佛蘭西の犬！　貴樣も貴樣の共和國も皆んな惡魔に吳れつちまへ！　イル・モロ萬歲！　公に刄向ふ奴は皆んなくたばつちまへ！』

併し辯士はこれにひるまず演說を續けた。そしてシセロ、タキツスを引用して自說を强めたが。暴徒はそれッとばかり學生の腰掛けを倒して學生を引き摺り下ろし袋叩きにして叫んだ——

『これが貴樣の言つた自由に對する罰だ！　貴樣の共和國の罰だ！　愚民を煽動して正當な君主に背かせようとした罰はこれだ！』

レオナルドは暫しアレンゴの廣場に立ち、巍々たる伽藍に向つて感歎の眸を放つた――大理石造の尖塔、高塔は林のやうに立ち並んで、月の光りに青く照り、搖々する松明の火に緋の如く輝き、この二重の光りに一種怪奇な風致を添へた。殊に大僧正邸の前には非常な人集りで立錐の地もなかつたが、其の群衆の恰度眞中に方つて唸る聲、恐ろしく吼えるやうな聲が聞えた。

『何うしたのでせう、あれは？』とレオナルドは一人の年老いた職工に訊ねた。溫順な、品威ある此の人の顏は恐怖のために白くなつてゐた。

『何事が起つたのか誰にだつて分るものですか？　奴らだつて何をのぞむのか、何をしてゐるのか薩張り分らないのです。ヤコボ・クロッタは麥粉に毒を入れて賣つた、奴は佛探に違ひないと罵つてゐるけれど、本統に、本統に、それは嘘の皮です。誰彼の差別なく出會ひ頭に直ぐ樣打つて掛かつて、言ひ譯したつて聽き入れないのです。實に恐ろしい、全く恐ろしい事だ。主耶蘇樣、何卒私等の憐れむべき罪人を惠んで下さいませ！』

丁度其の時玻璃工ゴルゴーリョは密集せる人の群から離れて、血塗れの首を棒の先に刺して高く擧げて見せた。すると市井の無賴少年ファルファンニッキオは其の周圍を小踊りしながら叫び且つ吼えた。

『謀叛人を追つ拂へ！　毛唐を追つ拂へ！　佛蘭西の惡魔野郎を殺つ付けろ！』

『おゝ主、何卒人々の狂暴から私等をお救ひ下され！』と老職工は低聲で唸て十字を切つた。喇叭、太鼓の音、砲彈の破裂、銃彈の爆裂、兵士の揚げる鯨波の聲――絶えずこれらは城内から聞えて來る。大射石砲（佛蘭西はこれを野呂間のマルゴといひ、獨逸はグレーテの馬鹿と稱してゐた）が發射された時は、大地も搖れてミラン全

市も粉齏され破滅するかとさへ疑はれた。偶々破裂彈が新市街の外に落ちて一軒の家に火が附いた。火の柱は月の光りの靜かに照る空を目懸けて上つて廣場に赤い光を搖ら〳〵さした。群衆は彼方此方に押し合ひへし合ひして、黑い影法師の如く將た生靈のやうに踏みつ踏まれつした。

レオナルドは深く考へに耽りながら其處に立つて凄まじい光景を眺め、一々仔細に注意してゐたが、紅蓮の火を見たり、群衆の聲、鐘の音、銃の音を聞いたりしてゐる間に、何時とはなく例の發見の方に考へが戻つてゐた。卽ち平穩に膨起する音波、光波を、想像力は描いて吳れて、恰ど石を水中に投じて表面に立つ漣と等しく、これらの波が外方に描く圓は互に交錯するけれども、然かも混同するでもなければ混亂するでもなく、舊の一點に於いて各々中心を保持してゐるのであり、そしてこれら整然たる波の諧調的演奏、並びに如上の波を支配せる機械的法則（これ投射角は反對角とを等しからしめるもの）、換言すれば波の造り主の不易なる命令、神聖なる裁判の法規は何時如何なる時と雖も人間の妨碍は決してこれに及ぼす能はざる事を思うて魂は大なる喜びに滿ちた。

そして彼の心の中では再び次ぎのやうな反響がしてゐた――

『おゝ爾力の源、爾の驚くべき裁判！　爾は如何なる力にもそが必然的結果の順序と性質とを缺如せしめなかつた！』

熱狂せる群衆の中にゐながら此の藝術家の魂は靜觀の永遠なる冷靜を保つてゐた、恰ど松明の搖らぐ光や祝融、戰火の上に方つて天の最上の光を放つて輝ける青い月光のやうに。

千五百年二月の或る朝、ルドヴィコ・スフォルツァ、卽ちイル・モロは新門から再びミランに這入つた。併し其の前夜レオナルドは友人メルチの別莊地ヴァプリオに向けて出立したのであつた。

九

ヂロラモ・メルチは嘗てスフォルツァ宮廷に奉仕してゐたが、千四百九十四年に若き妻を失つて以來、寂しい別莊に隱棲した。別莊はミランから數時間の距離にあつてアルプスの裾に位してゐた。彼は世俗の喧噪を遁れて哲人の生活を營み自ら手を下して園藝を樂しみ、音樂と秘密學の研鑽に身を委ねてゐた。或る者は噂して此の人は魔法の妙手であるだけ常に亡妻の靈を下界から招き寄せてゐるとさへ言ひ觸らした。數學僧ルカ・パチオリ、並びに錬金士サクロボスコは屢々メルチを訪ねて幾夜となく徹宵して、プラトーの觀念や天體の音樂を支配するといふピタゴラスの數の法則なぞに關する議論を鬪はしたが、併しメルチは就中レオナルドの訪問を喜んだ。マルテサナ堀割を作る工事のためレオナルドは度々此の附近に出張したゝめメルチへの訪問は自然頻繁であつた。

ヴァプリオ村はアッダ河の左岸に位して別莊の花園の緣を流れる堀割は、若干距離のあひだ此の河と平行して流れた。そして河の水路は丁度別莊のあたりで急流を作つて、飛瀑の轟々たる音は海波のやうに一日中耳に響いた。あらしのやうに奮迅して自由奔放な、そして容易に馴致されないアッダ河は、逶迤として嶮岨な黃色の兩岸の間に藍碧の水波を投げ付けるに反して、それと相並ぶ堀割には冷々として綠色せる同じ山水が眞直な水幅を滿々

と流れて、鏡の如く滑かに、平靜として水勢緩く、克く柔順に克く馴致されてゐた。此の二流——卽ち人間の知識と意思とを活かして自分が造つたマルテサナと其の姉に當る野蠻にして物凄く、自由に、奔激に、沸々として泡立てる見事なアッダと——此の二流の孰れがより美しいのだらうか？　レオナルドは夫々兩者に對して了解を有し、同情と同等の愛とを寄せてゐた。

別莊の園にある築山から眼界廣く見渡されるロンバルヂーの大平野は宛然として莞爾たる一大花園の觀を呈した。夏ならば野は靑々と繁つて乾草の匂ひは空中に漂ひ、小麥、玉蜀黍は伸びて葡萄樹の上を越し、麥の穗は梨、林檎、櫻、梅に接吻する筈であつた。コモの連岡は北に方つて黑く聳え、アルプスの第一支脈は更に其の上に重り、雷を戴ける山巔は金色なせる夕陽の中に最も高く燃えてゐた。

ルカもガレオット・サクロボスコも共にヴェルチェルリナの附近にある陋屋を佛蘭西軍に破壞されたので此の別莊に來てゐた。レオナルドは此の兩人から遠ざかつて自ら孤獨を選んだが、併し又一方に主人メルチの子息フランチェスコと遊ぶのを非常に好んだ、

此の小兒は女の子のやうに臆病で且つ羞恥む性とて初めのうちはレオナルドを深く恐れて敢て近寄らなかつたが、それが或る日偶然レオナルドの部屋へ舞ひ込んだ事があつた。丁度其のときレオナルドは色硝子を實驗して色彩を研究してゐたので、黃や靑、紫、綠等種々異つた色の硝子を目に當てゝやつた。稚いフランチェスコが平生見慣れてゐる物は珍らしい容を呈して色の異るに從つて世界は或は笑つたり或は顏を蹙めたりした。今一つレオナルドが發明した《黑カメラ》と稱する玩具は非常に小兒の注意を惹いた。これは白紙に映る物の形が動く

活動畫で、フランチェスコの目に水車がぐる〳〵廻轉したり、燕が教會堂のぐるりを飛翔したり、樵夫の灰色の驢馬が背中に柴を付けて泥濘の道を几張面に歩んだり、それから白楊樹が軟風に搖れてそよ〳〵と首を曲げたりした。これにも增して興味あるのは天候觀測器で、これは銅の環と、秤の桿のやうな棒と、二つの小さな球とから成つて、一つの球は蠟、今一つの棉紙を被せてあつた。それで空氣が濕氣を飽和してゐれば棉紙の球は重くなつて下の方へさがるため自然桿は傾いて銅の環の刻み目に觸れる、卽ち濕氣の多少は精密に測量できて、二日乃至三日間の天候は豫め知れるのであつた。小兒は手から此の器械を作つて其の變化の樣子を考へて天氣模樣が見事に中つたとき其の喜びは實に大したものであつた。彼は村の學校へ通つて附近の寺の老住職の敎へを受けたのであるが、紙の隅の折れた拉典文法や算術初步は大嫌ひな上に學問の進步はのろい方であつた。併しレオナルドの敎へは小兒に取つて新規なものとてお伽噺のやうに愉快に覺え、光學、音響學、動水を研究する諸器械は宛ら新らしい魔術の玩具のやうになつたし、それに此の畫家の談話を聞いて倦むを知らなかつた。大人と談ずるときレオナルドは、相手方の嘲笑、疑念を恐れてひたすら注意して口を利くのであるが、フランチェスコに對しては最も多く打ち解けて最も率直に話した。そして、自分は小兒に敎へると共に又子供から學ぶところがあつた。聖書の本文をもぢつて彼は獨語した。《汝改心して子供の如くなるに非れば知識の王國に入り難し。》

《星辰篇》を書いたのは正に此の頃であつた。彌生の誰彼時、未だ薄ら寒い空氣に春の浮動を感ずる頃、彼はフランチェスコを携へて屋根に上つて、星の流れを見、月面の斑點を寫しつゝ圓錐を倒まにして其の中に紙切れを一つ轉ろがして端の孔を小兒に覗かせた。フランチェスコは星の光りがなくなつて唯きら〳〵と圓いそして喩

やうもなく小さな球を見た。

『球はそんなに小さく見えるけれど本統は大きいのです。大概の星は地球より百倍も千倍も大きいのですが、と云つて地球も矢張り星のやうに綺麗だし、それに星を輕蔑できないやうに地球も決して輕蔑したものではありません。此の世界に行はれてゐる機械的法則は人間が賢いから發見したのですが、此の法則は同時に此の澤山な星をも支配してゐるのです。』

「星の先きには何があるの？」と小兒は低い聲で訊いた。

『矢張り星が澤山あるのです、私らの目に這入らない世界があるのです。』

『そして其の星の先きは？』

『矢張り星です。』

『其の星の果てには何があるの、一等々々果てには？』

『果てなんぞはありません。』

『果てなんぞはありません？』とフランチェスコは叫んだ。そしてレオナルドは自分が握つてゐる小兒の小さな手が顫へるのを覺えた。其の顏は靑くなつた。

『ではレオナルドさん、極樂は何處にあるの？』と少年は遲い口調で言つた。『天使樣、聖徒樣、聖母樣は何處にゐらつしやるの？　子の神樣とそれに聖靈と一緒にゐらつしやる父の神樣は何處にゐらしやるの？』

『神は到る處にゐる、天上界にゐると等しく沙の中にもゐる、宇宙の外にゐると等しく人の心の中にもゐる』

と答へたかつたが、小兒の單純な信念を援す事を恐れて默してゐた。

十

木の芽は萠え初めたので畫家と小兒は或は別莊の庭園に或は近くの森に屢々全一日を暮らして再び植物界に生命の復り來るのを見て歩いた。折々レオナルドは花や木を摘まみ取つて、人物の畫像に見るが如き潑剌たる類似、卽ち各モデルの有する唯一特自の形貌（此の同じ形貌には二度と再び接する事は出來ない）を摑まうとした。彼はフランチェスコに種々な事を敎へた——樹幹の輪は該樹木の年齡を示せるものであつて各年輪の厚さは其の年輪を生じた年の濕氣の量を示せること、並びに樹幹の髓は常に南側に偏してゐるが、これ蓋し太陽の熱は最も多く此の方角を射るに依ると說き聞かせた。それから春になれば樹液は樹身の內緣と外皮との間に集まつて、樹皮を厚くし且つ擴げて遂にはこれを破るに至ること、又枝に切れ目を入れると樹の生命力は其傷ついた部分に多量の養分を送るため樹皮は厚肥して創は癒えるけれども創痕は何時までも殘る、其の理由は營養液が餘り多きに過ぎ、溢れて瘤や結節を成すからであると敎へた。レオナルドが自然に就いて語るや常に乾燥無味、冷々たる態度を取つてひたすら科學的精密をのみ求め、決して熱するなく、正確に、綿密に、植物の生命に作用する春の活力をば巨細に涉つて解說すること機械の完成を語る時に異らず、時に抽象的數學に依つて松葉や水晶の面に存する驚くべき法則を闡明した。斯くの如く彼は冷々として好惡を設けなかつたが、然かもフランチェスコは聰慧にもレオナルドが一切の植物に對して等しく好愛を持する事を知つてゐた。卽ち大君主たる太陽に向つて大き

な手を擴げて歎願しつゝある枝を愛すると等しく又枯葉をも愛するのであつた。時々森の奧で莞爾として足を停めて、去年の枯葉は未だ枝に殘つてゐるのに其の下から綠の芽が噴き出て枯葉を逐ひ除けようとしてゐるのを眺めたり、又冬季の間知覺が遲鈍になつた蜜蜂が辛つとの事で雪割草の花の中へ潛り込むのを注視したりした。大なる靜寂の中に在つてフランチェスコは此の人の鐵の如き心臟が鼓動せる音を聞きおづ〳〵目を擧げて顏を見ると、木々の枝を斜に射れる太陽は彼の縮れ髮、長い髯、長い眉毛を照らして頭の周圍に暈輪を作り、宛ら牧野の神パンが刻々草の生長する音に耳を傾け、地下の春の囁き、甦る生の神秘力を聽いてゐるやうであつた。レオナルドに取つてあらゆる物は生きてゐた。人體に類似せる此の世界は一の巨大なる身體であり、從つて人類は矮小なる世界であつた。陸地を周れる水界の相似を露滴に於いて見、トレッツォの近くにあるアッダの飛瀑は諸川の瀑布、洄渡を研究するに等しき機會を與へたし、そして其の洄渡は婦人の毛髮のうね〳〵してゐるのに比較された。神秘なる類似に牽かるゝと共に夫々遠い世界から呼び交はすやうなる自然界の諧調の和樂に牽かれた。虹の起りを究めんとして同じプリズムの色を鳥の羽毛、寶石、瀦水の泡、曇りを帶べる古硝子に於いても見得べきことを知つたし、又窗硝子に結ぶ霜の繪模樣の中に生命ある葉と花とに似た形を認めて、自然はやがて訪れ來る春の幻を水晶のやうに白く凝れる世界の中で逸早く見せて呉れるのだと思つた。常々知識の新領土に引き寄せられるやうに感ずるけれど此の領土に足を踏み入れる者は自分ではなくて恐らく未來の世紀に屬する人々であらうと思つた。そして琥珀の物を吸ひ寄せる力に關して常に斯う言つてゐた——

『人の心は如何なる方法によつて神秘を考察するのか其の方法が私には分らない。未だ明白に知れない神秘力

は幾らもあるが、磁石の力、琥珀の力の如きは卽ちそれである。』

そして更に言ふ——

『可能力は數限りもなく世界に充滿してゐるけれども唯實驗が未だ其處まで及ばないのだ。』

或る日ベルガモのギドット・プレスチナリといふ詩人が此の別莊を訪ねたとき、レオナルドは其の詩を餘り賞めなかつたゝめ彼は怒つて詩と繪畫の優劣論を始めた。レオナルドは成るべく口數を利かぬやうにしてゐたが、憤怒せる詩人から自分の畫に對する攻擊を受けたので稍興味に驅られて冗談半分に斯う言つた——

『繪畫は神が作つた永遠の物——然うです、決して人間が發明した物ではありません——を複製する限り詩に優つてゐます。少くとも當代の詩人は餘り人間の發明物に躊躇し過ぎると思ひます。彼等は描寫せずに說明するのです、有りつたけの身上を持ち出してお互に品物の商ひをする。彼等は單に知識の屑を集めるだけです。云はば贓品買ひですな。』

ルカ、ガレオット、それにメルチすら聲を揚げて制したがレオナルドは熱心になつてゐるので更に大聲で續けた。

『目は耳よりも自然の知識を一層完全に與へるのです。目で見る者は耳で聞く物よりも更に疑ふ餘地が少い。畫は沈默せる詩、詩は目に見えざる畫、卽ち前者は後者よりも實證的科學に近邇してゐます。言語は次ぎ〳〵形象の連續を生ずるだけ、然かもそれは各個孤立してゐますが、繪畫に至つては然うではありません、あらゆる形式、あらゆる色が同時に現れて渾然と融和すること彼の音樂の一絃から發するあらゆる音階と異らないのです。

ですから繪畫なり音樂なりが有する複雜なる諧和はこれを詩に就いて見まするに兩者の以下に位してゐます。そして諧和が豐富になればなるだけ喜びの情——藝術の目的、藝術の魅力なる喜びの情も豐富になります。ギドット君、君は誰でも好いから色女を有つてゐる男子に訊いて見て御覽なさい、あなたはあなたの愛人の容貌を言語で說明するよりも一層のこと其の畫像を有つ方が好いと思ひませんか、假令其の言語は第一等の詩人から出るものであつても矢張り畫像の方が好くはないですかと斯う訊いて御覽なさい。』

これを聞いて人々は破顏一笑した。レオナルドは直ちに論を續けた——

『これは私が親しく知つてゐる話ですからお聞きなさい。或る時私は宗教畫の中に或る婦人の顏を描いた事がありました。するとフロレンスの某といふ青年が非常に此の畫を欲しがつて到頭自分の手に入れたものですから書面の宗教的な部分を悉く削り取つてしまひました。何故かなら自分の崇めてゐる女の顏に恐怖せず躊躇せず直ちに接吻したかつたからです。ところが覿面ですな、良心の聲が其の青年にありました、良心の聲は戀の欲念に打ち勝ちました、そして件の畫を手放して辛つと心の落着きが治つたのです。さ、此處です詩人諸君、諸君も又詞藻を以てこれと同じい猛烈な切望を男子から喚び起す事が出來ると考へますか？　一寸念のため申しますが、これは決して私の事を言ふのではありません、私は未だ〳〵此の域に達しないのですから——達しない事は自分に分つてゐるのですから——私は唯技倆が渾然として完成した畫家に就いて言ふのみですから其の積りで願ひます。其の畫家は最早や人ではないのです。彼は神聖な、永遠な美の冥思は懵然歡喜したり、巨大な、怪奇な、感傷的な、恐怖すべき形の研究に轉じたりして、一切のものを了知し且つあらゆる物に形體を與へます。彼は君

主です、神です。』

これに類する感想はレオナルドの手帳の中に澤山書き留めてあつて僧ルカはこれらの草稿を整理して世間に發表せん事を勸めると共に自ら其の編輯の任に當らうとさへ言つた。然かもレオナルドはこれを辭した。そして決して公にしないと決心の臍を固めた。レオナルドの書いた物は凡て一讀者に宛てる形式であつた。そして自分の文章が聯絡を缺ける事並びに同一の趣旨を屢々繰り返す事を辯護して日記の一册の卷頭に書き付けた——

『これを讀む人余を咎むる勿れ、題目は無數なるに余の記憶力は弱し、且つ余は長き時間を距て年を異にして記入するを以てなり。』

十一

三月の末つ方メルチの別莊へ不穩な報道が傳はつた。トレムーユを將とする佛蘭西軍はアルプスを横斷してロンバルヂーに馳せ下り再びミランを攻畧せんとするのに、イル・モロ公はあらゆる人々を疑ひ、迷信のため徒らに恐怖して敢て曠野に陣を布いて敵を邀へようともせず、日日《愚な女よりも周章狼狽》してゐた。

併し廣い世界から來た此の報道も別莊に對しては小さな聲が遠くの方でブン〳〵鳴いてゐる位にしか感じられなかつた。公や王の事は更々顧慮せずにレオナルドはフランチェスコを拉して、附近の岳陵、澗、森林を跋涉したり、折々はアッダの流れを溯つて松の密生せる山間に水源を尋ね、人夫を雇うて化石貝、化石植物を發掘させたりした。

或る日の夕暮、二人は朝から歩み續けて疲勞した身體をアッダの險岸に懸かれる一本の老樹の下に休ませた。一望窮りなき平野は脚下に擴がつて、白楊樹は路傍に長い列を作つてゐるのが見え、ベルガモの白い家々は夕陽に輝き、雪を頂ける山々の巔は空中に浮かんでゐるやう、空はすつきりと晴れ渡つてゐたが怪しや遙か地平線に接せる遠くの方、卽ちトレヴィリョ、ブリニャノ、カステル・ロッツォーネの邊と思はれる處に突如として一筋の明るい煙が見え始めた。

『何です、あれは？』とフランチェスコは訊ねた。

『さ、何でせう？　事に依つたら戰爭かも知れません。多分火事らしいが……氣のせゐか大砲が聞えるやうだ。大方ミランと佛蘭西の小競合でせう。』

蓋し此の種の不意の會戰は近頃屢々演ぜられた。二人は數分間默つて煙を眺めてゐたがやがて此の日に獲た發掘物に注意を轉じた。レオナルドは針のやうに鋭い大きな骨、卽ち原始の魚の鰭を取り上げて感慨した——

『今日見付けたあの大洞窟で此の魚が永刼の眠に入つて以來、王や國民は何んなにか夥しく《時》のために滅ぼされたらう！　そして此奴が一切人の目には觸れないで洞內に横はつて自分の骸骨で以て重い土壤を支へてゐた間に世界は何千年を閲したらう？　何れくらゐ變化が起つた事だらう？』

そして手を大きく擴げて脚下にある綠の野を抱くやうな恰好をして語を續けた——

『フランチェスコ、今あなたが眺めてゐる土地は昔は凡て大洋の海底だつたのです、其の大洋は今の歐羅巴、阿非利加、亞細亞の大部分を浸してゐたのです。其の時分アペナイン山脈の巔は大洋中の群島でした、從つて鳥

の囀る此の野には魚が泳いでゐたのです。』

レオナルドはそれなり口を緘して今一度遠くの方に靄ける煙と砲火の閃光とに眸を放つたが、これらは夕映のため薔薇色に染められて肅然として靜かな野の擴がりの中に在つて甚だ微々として殆ど目に這入らない程であつた。自分達の視界の內で唯今戰爭が始まつて殺し合ひを演じてゐるとは殆ど信じられなかつた。フランチェスコの心は脚下に見える戰火よりも堵に歸る鳥、人が忘却せる其の大洋の魚の方に忙しかつた。畫家も小兒も敢て口には出さなかつたが此の瞬間に胸には同じ思ひがあつた——

『勝利を得る者はロンバルヂーの人か佛蘭西人か、ルドヴィコか外國のルキか、此の國の人か外國人かそれは取るに足らない一瑣事だ。國、光榮、戰爭、政略の爭ひ、高御座の顚覆、國民の興起、凡そ人類に偉大の感を與へるもの、恐怖の念を起さすもの——これらは凡て彼方に見える小さな煙に等しい、あの煙は平和な薄明の中に溶けるのだ、大自然の不易な靜謐の中に融けるのだ。』

十二

レオナルドはフロレンスにゐた時分描き掛けて長い間其の儘にして放つて置いた畫があつたがそれを今ヴァプリオで仕上げたのである。唯見る巨巖峙ちて洞窟を圍み、聖母マリヤ其の中に坐して小兒の姿せる洗禮者ヨハネと聖子基督を各々片手に抱へて宛ら唯一の愛の緊密せる抱擁の中に人と神との結合を欲するかのやう、そしてヨハネは紅葉の手を合はせて恭しく基督の前に跪き、基督は指を二本高く上の方に擧げてヨハネを祝福してゐる。稚い裸體の救世主は裸の地に坐つて、ムッチリ肥えて窪みのある足を組み合はせ、沙の上につける太い片手の指の擴がれるのは未だ足の利かぬ事を示してゐるのに、圓滿なる智惠は早くも其の顏の幼い單純の中に入り交つてゐる。そして跪ける一人の天使は基督を抱き先觸れのヨハネを指してゐるが、傷い預兆をあり〳〵と浮かばせながら然かも一種不思議なそして溫かみの輝ける顏を此方に向けてしまつてゐる。巨巖の後ろは驟雨が催して其の中に太陽の靑白い光りを見るべく、藍色せる山々は空中に聳え立ち、峻峰は氣味惡るくも此の世のものとは思はれない。滑かなる岩石が鹽水の作用を受けて磨きを掛けたやうに光つてゐるのは素と海牀であつたのが今は干上れる事を示し、洞窟は深い影に鎖されて沸々と湧き上る泉は殆どそれと識別できないくらゐ、其の他水生植物の葉や紫の菖蒲の朦朧として靑白いのが此の窟の中に見えた。そして上に懸かれるアーチ形の黑雲石からは涓滴遲々として落ちるかと疑はれ、草の葉や下を這ふ雜草は何處までもじめ〳〵せる濕地と打ち濕める空氣の浸潤とのためグタリとしてゐるのに、單り聖母の顏のみは白石の如き美妙なる光輝を帶び、一道の光明が炫耀として燃えてゐた。天上の女王たる聖母は暗い薄光の中に坐しながら、地下の洞窟、そして自然界の最も幽秘なる場所（恐らくは古の牧神、幷に森の仙女が最後の隱れ家としたるところ）の中にゐながら、人の目に奕々と輝いて、神秘者中の神秘者、人にして神たる基督の生母として、萬物の母たる地球の胸臆深く閉ぢ籠もつてゐるのであつた。

實に此の畫は大畫家に兼ぬるに大學者たる人の作品たる事を證してゐた。明暗の動き、植物に宿る生命の法則、人體の解剖、服裝の知識、婦人のうね〳〵せる毛髮（此の髮の渦卷ける樣をレオナルドは瀾水の渦漩に見立てた

のである)、並びに自然哲學者が《恕すなき峻嚴》を以て探り、數學に等しき精密を以て量り、解剖學者が人體を解剖する如くに解剖する一切のもの――凡てこれらをレオナルドは新らしき創作品、生命ある美、沈默たる旋律の中に混じ且つ神の母たる聖處女を頌せる神秘なる聖歌の中に混じたのである。愛に等しき知識を以て彼は菖蒲の花瓣に脈を描き、嬰兒基督の肘に窪みを描き、黑雲石の岩石中に古代の洞窟を描き、幽秘なる泉の中に水の搖らめきを描き、天使の微笑に於いて無限の悲哀の戰きを描いた。レオナルドは一切を知つて一切を愛した。果然大なる愛は大なる知識の娘である。

十三

或る日、鍊金士ガレオット・サクロボスコは所謂《マーキュリーの棒》を實驗した事があつた。此の棒は桃金孃、巴旦杏、羅甘子、其の他《占星的》樹木の類の總稱であつて、これらは凡て金屬と近緣を有するものと見做され、岩石の間にある金銀銅の鑛脈を發見するに用ゐられた。ガレオットはメルチに伴はれて鑛物の豐富を以て知られるゝレッコ湖の東に行つた。そしてレオナルドは此の行に加はつたが、これは《マーキュリーの棒》の効驗を信ずるからではなく却つてこれをばガレオットの他のくさぐさのまやかし物と同樣嘲侮を加へたのであつた。

カンピオネの山麓に位するマンデルロ村の附近に鐵の廢坑があつた。數年前土が陷落して多數の坑夫は生き埋めになつたのであるが噂に依れば鑛坑の底に罅目が一つあつて其處から硫黃の氣が噴き出てゐるとのこと、そして坑內に石を投ずると石は何處までも下の方へ落ちて行つて坑の底に打ち當る音は聞えないからこれは疑ひもな

く底なし坑であるとの事であつた。レオナルドは右の口碑に好奇心を挑發されて一行の人達が忙はしく魔法棒を試驗してゐる間に鐵坑を探る事にした。百姓共は此の坑に惡魔がゐると信じてゐるので容易に案內者が見付からなかつたが漸つとの事で老人を一人雇つた。中央の竪坑に通ぜる洞坑の路は眞暗で非常に嶮しい且つ段が毀れて兎もすれば足は滑つた。案內の老人は先に立つて角燈を提げてのろ〳〵歩むし、レオナルドはフランチェスコと共に其の後に隨いた、蓋し小兒はレオナルドに同行を求めて止まなかつたので彼は已むを得ず連れて來たのであつた。段を降ること二百以上、然かも依然として降つて行つた。通路は益々狹く益々峻しくなり、地下濕潤の氣は鼻を打つて、ために窒息しさうになつた。レオナルドは鍬で坑壁を叩いて其の音響を聞いてから罅かして取つた岩の一片を檢査し、土の性質、並びに其の層、花崗石の脈中に閃々と輝く雲母なぞを檢査した。

其の時小兒は自分に獅嚙み附いてゐるのに氣附いたので、恐いのですかと微笑して訊いた。

『あなたと一緒なら些つとも恐くはないんです』とフランチェスコは言つたが、やがて臆するやうに、『あなたは他處へ行つちまふの？　お父樣が然う言つたが本統なの？』

『然うです。』

『何處へ行くの？』

『ロマーニャです、ヴァレンチノ公へ。』

『ロマーニャつて大分遠いのですか？』

『ロマーニャへ行くには幾日もかゝります。』

『幾日もかゝる？』と小兒は溜息した。『それではこれ切りあなたに會へませんね？』

『何故？　會はうと思へば直ぐあなたの家へ行きますから。』

少年は思案した。そしてレオナルドの首玉に嚙り附いて叫んだ――

『僕を一緒に連れて行つて下さい！　レオナルドさん、一緒に連れて行つて下さい！』

『駄目です、そんな事が出來るものですか？　彼方でも矢張り戰爭が始まつてゐるのです。』

『戰爭なんかは構やしない。あなたとゐるんなら何にも恐かないと言つたではありませんか。此の坑の中より最つと〳〵恐い處だつても些つとも恐かあないんだから。あなたの下男になつて着物にブラシを掛けたり、馬に枯草をやつたり、貝殼を探したりするから。それから木の葉を描いて上げます。ほら、あなたは何日かフランチェスコさんは葉を描くのが巧いと言つたでせう。大人のやうに何んな用でも足すから連れて行つて下さい。吩咐ける事は何でも屹度其の通りにするから。だからレオナルドさん、連れて行つて下さいな！』

『併しお父さんは何うです？　お父さんは諾と言ひますか？』

『お父樣に泣いて賴めば肯いて呉れますよ。若しか可けないと言つたら逃げ出すんです。ですから連れて行くと言つて下さい。ね、然う言つて下さい。レオナルドさん！』

『可けません、フランチェスコ、そんな馬鹿な事を言ふものではありません。あなたがそんな事を言つてもお父さんの許を出たくはないのです、ちやんと私は知つてゐます。お父さんは年を取つてゐらつしやる、あなたはお父さんが好きなのだ。』

『え、そりやお父樣は好きです。だけどもあなたも、レオナルドさん、あなたも好きです！　未だ小つちやな奴だとあなたは思つてらつしやるのでせうが幾ら小つちやいたつてちやんと皆んな知つてゐるんです。家のボーナ伯母さんはあなたを魔法使ひだと言ひました。學校のドン・ロレンゾ先生も矢張り然う言つて、レオナルドさんは惡人だ、レオナルドさんと一緒にゐるとあなたの魂が亡くなると言つて聞かせました。學校の先生があなたの事を斯んなに惡く言つたけれど、巧く言ひ返してやつたもんだから口惜しがつて僕を打ちさうにしたんです！』

そして突然小さな目に涙が一杯に溜まつて唇がへの字形になつた。

『分りました、分りました、あなたがそんなに言ふ譯が分りました。あなたは僕が厭やなのだ、そして僕は……』と言ひ掛けてワッと泣いた。

『お默り！　お默り！　そんなに泣いたりしちや見つともないからお默んなさい！　そして私の言ふ事をお聽きなさい。可いですか、フランチェスコ、最う何年か經つてあなたが大きくなつたら私の弟子にして上げる、そして始終私の側に置いて上げるから。』

小兒は目を仰向けた。長い睫毛は未だ涙に動いてゐる。

『だが本統ですか？　氣休めにそんな事を言つて、後になつたら忘れるのではないですか？』

『決して、フランチェスコ。誓つて置きますから。』

『誓ひなさる？　そして何時まで待つの？』

『八年か九年くらゐ、少くとも十五にならなければ可けません。』

『八年？』と小兒は嘆息して指を折つて數へてから、『其の時になると始終あなたと一緒にゐられるのね？』

『死なゝい限りは然うです。』

『八年と。ぢや好いです、あなたが然う言へば確かだから。』

そしてフランチェスコはニコ〳〵して特殊の美しい身振りをしてレオナルドに頬摺りした。

『レオナルドさん、何時だつたか僕、夢を見たんです——暗い中で矢張り斯んなに長い〳〵階段を降りて行きました、其の階段はこれとは違つて始まりも終りもなかつたのです。けども些つとも恐かありませんでした、誰だか連立つてゐる人があるからそれで恐かなかつたんです。あの僕のお母樣ね、未だ僕の目の明かない中に亡くなつたお母樣だらうとその時は思つてゐましたが、今初めて本統の事が分りました、あれはレオナルドさん、あなたでした。あなたと一緒にゐるとお母樣とゐるやうに嬉しいのです。』

レオナルドは名狀すべからざる溫情を含んで小兒を眺めた。清淨な目は輝いて美しい唇をば母に寄せるやうに距てなく持つて來た。そしてレオナルドは其の唇に接吻したとき小兒は自分に魂を吳れたのだと感じた。そして鼓動する小兒の小さな心臟を直と自分の心臟に押し附けて歩み確かに地下の夜の中へ降つて行つた。

十四

ヴァプリオへ歸つて見ると佛蘭西軍が接近して來ると言つて村は大騷ぎであつた。ルヰ王はミラン市が謀叛を企てたのに赫怒して同市府を殘る隈なく劫掠して宜しいと軍隊に令した。多數の市民は山の方へ逃げて來た。家

財を積める車、子供を連れて泣く〳〵歩む婦人、それらの行列は街道に涯もなく續いた。夜、別莊の最も高い窓から見ると依然ミランの方に火が見えた。ロンバルヂーの運命を決すべき一大血戰がノヴァラで始まる筈で、それが今か〳〵と日々待たれてゐた。

そして到頭ルカは戰爭終局の悲報を齎した。初め戰爭は四月十日と定まつてイル・モロ公は期に先ち兵を檢閲したとき瑞西の傭兵は進發を肯じなかつた。蓋し彼等は竊かに總督トリヴルチオに買はれたからであつた。公は涙を流して何うか自分の破滅になるやうな事をして吳れるな。忠義振りを見せて吳れゝば莫大なる額を報いるからとさへ悃願したけれど全然徒爾に終つて瑞西兵は心を飜さなかつた。

そこで公は姿を僧侶に變へて逃亡せんとしたが、瑞西兵シャッテンアルブなる者これを佛蘭西の士官に密告した。公は捕へられて元帥の前に曳かれた。元帥は賞として瑞西兵に銀子三十枚を與へた。

トレムーユは令を下して公を佛蘭西に護送させた。宮廷詩人の所謂《神が運命の車を廻轉させた以來の第一人者》たる彼イル・モロは唐丸籠に入れられて、其の籠は荷車の上に載つた。其の狀宛として罠にかゝつた猛獸のやうであつた。公は警護の兵に一つの賴みをした。それはダンテの神曲を囚はれの身の友としたいと乞うたのであつた。

メルチの別莊は日々危險に迫つた。佛蘭西兵はロメルリナを奪掠した。ヴェニス軍はマルテサナ堀割を破壞した。ヴァプリオの附近に强盜が出沒した。ヂェロラモ・メルチは逸早くフランチェスコと叔母ボーナとを伴つてキャヴェンナに避難する準備をしてゐた。

別莊の最後の夜が來た。レオナルドは當日得た感想を記して言ふ。

『尾は小さいが翼の大きな鳥が烈しく翼を動かした。そして翼の下に風を入れて高く飛ぶためにクルリと廻轉した。今日卽ち四月十四日、私はベルガモ街道にあるヴァブリオ敎會堂の上に若鷹を見て此の事を觀察した。』

そして何心なく其の紙の緣に附記した——

『イル・モロは彼の國、彼の財產、彼の自由を失つた。彼の事業の一として彼の手に依つて成就されたものはない。』

卽ちスフォルツァ家の滅亡も、前後十六年間仕へてゐた君公の破滅も、レオナルドに取つては猛鳥の飛翔よりも興味が少なかつた。

十一の卷　翼を有するやうになる——一五〇〇年

鳥の如き人が初めて飛行をなすとき、世界は驚駭に滿ち、あらゆる書物は彼の名譽を以て埋まり、彼が飛立つた其巢に永遠の光榮を齎す事であらう——レオナルド・ダ・ヴィンチ。

一

レオナルド・ダ・ヴィンチの故鄕はヴィンチと名くる小さな町であつた。町はタスカニーのアルバノ山の西麓にあつて、フロレンス、ピサの間に位し、エンポリから餘り遠くなかつた。故鄕にフランチェスコ・ダ・ヴィンチといふ叔父がゐたが、これは絹織業に從事して財產を作つた人で、ダ・ヴィンチ家中此の叔父ばかりはレオナルドに溫い心を有つてゐた。で、レオナルドはローマニャへ行く前に叔父を訪ねて出來得べくば墜落して未だ本復しないアストロを預かつて貰ひたいと思ひ立つた。蓋し藪醫者の調合藥を服用したり外科の試驗に供せられておもちやになるよりも靜臥して山氣を呼吸する方が病人のためになるからであつた。斯くてレオナルドはフロレンスに二三日滯留したのち、自分一人驢に乘つてヴィンチへと志した。卽ちフロレンスのプラト門を出て道をアルノの河岸に取り、エンポリで廣い本道を捨てゝ紆餘として狹い山徑を縫つて行つた。此の日はどんよりと曇つて肌

寒く、夕暮の太陽は堤の如き霧の中に沒したが、此の霧はやがて北風の吹き來る事を知らせるのであつた。左右の眺望は益々擴がつて、岡は次第に高くなり、勾配は未だ緩やかながら、岡の後ろに高山の屹立せる事を思はせた。地面は黑ずんだ綠色の草が疎らに生えて、褐色の土が鹿子形に縞を成せる畑、石垣、灰色の橄欖樹等、凡て色の調子は薄黑い中に白味を帶びて、北部地方の平穩と單純と貧弱とを示してゐた。此處彼處間を距てゝ一つ屋の敎會堂の側、或は窓を鎖せる農家の黃色い壁に接して、先が尖つてどゝ黑い絲杉が物靜かな連岡と澄み渡つて且つ微やかなほかしを成して居る空とを目掛けて突つ立つてゐたが、此の樹は早い頃フロレンス派が描いた畫の中に屢々見受けるのであつた。

山徑次第に峻險を益して空氣は新鮮且つ爽快になつた。サント・アウサノ、カリストリ、ルカルヂ、サン・ヂョーヴァンニを通り越すと、日は落ちて雲の絕えた靑空から一つ又一つ星が輝いた。案に違はず風は吹き始めて、トラモンタナと稱するアルプスの鋭い吹き下ろしが起つた。最早や低地の面影はすつかり亡くなつて、野が岡に變つたと同樣、今度は岡が山と變じた。そして徑が一曲り曲つたとき忽然ヴィンチの小邑が見えて來た。あゝ彼の町——石造の小さな家々は岩石に據り古城の黑い塔を周つてうじや〳〵群つてゐる。そして其の岩石の上に聳える小山は低いけれども峻しい姿であつた。

其の小山の麓に近い四辻に小さな祠があつたが、これはレオナルドが極く小さな子供の時分から見知り越しの物で、土細工の聖母像は靑硝子、白硝子の內に欽められ、像の前には常燈明が點れてゐた。此處を通り掛りに見ると一人の女が膝を垂れて跪き、兩手で顏を蔽うて悄然と祈つてゐた。地の薄い黑色の着物は雨に叩かれ風に

吹かれて汚れたる上にズタ〳〵に裂けて見るからに憐れな百姓女たる事が察せられた。

レオナルドは我れ知らず小聲で『カテリーナー』と叫んだ。カテリーナとは自分の母の名であつた。母も亦憐れな百姓の女房、たび〳〵此處へ祈りに來たのであつた。

細徑は山の急流を橫切つたのち雜草蔓れる庭園の壁と壁との間を右手に折れた。庭園はすつかり暗いため薔薇の花が顏に接吻して淸香を空中に發してゐるので漸く其の枝が園の外へ出てゐるのだと知つた。レオナルドは園の壁に通ずる古木戶の前で馬を下りて鐵の止め物を石で叩いた。此の家は素とレオナルドの祖父の所有であつたのが祖父から叔父フランチェスコの手に移つたもので、レオナルドは幼い頃を此の垣の中で暮らしたのであつた。それが今は誰一人自分の音訪れに答へて出る者がない。暫らくの間水車の水の激する音、老いた番犬の震ふやうな吠聲が聞えるのみであつた。

やがて一人の老人が出て來た。顏は皺くちやで腰は弓のやう、髮の白きこと銀の如く、手に角燈を携へてゐた。耳は甚だ遠きが上に老耄れてゐるため辛つとの事で此の人がレオナルドだと認めたのであつた。

これは四十年前自分の手の中に抱かれてゐた人だと到頭氣付いた時、老園丁ヂアン・バッチスタはそゝくさと角燈を下に置き、嬉し涙に咽んで身をかゞめながらレオナルドの手をば唇でモグ〳〵嚙むやうにして、

『おゝまあ、あんた、レオナルド樣！　あんたはまあ！』と啜り泣きした。犬の方では又慰め顏に老園丁に尾を振つて見せて、唯今の事柄は明瞭に私に分つてゐますと言ひたげな素振りをした。老人の言に依ればフランチェスコは兼て知り合ひの法師から胃痛の藥を貰うため唯今は其の方へ行つてゐて二日ばかり家を明けてゐるとの

こと、それでレオナルドは明日弟子のヂョーヴァンニがフロレンスから此處へアストロを逆れて來る手筈になつてゐるので主として其の理由から叔父の歸りを待つ事にした。

老園丁は客を家の中に入れて髪も顏容も美しい今年十六になる孫娘に命じて夕餐の支度をさせようとした時、レオナルドはそれを止めて、パンと自製の酒とそれに此の家の所有に係る泉から湧く鐵鑛泉と此の三品を求めて其の他の御馳走を辭退した。蓋し先祖代々約しい簡易生活を旨としてゐるので此宅の叔父も一廉の金持ちでありながら此の家風を墨守して苟くも贅澤な事は微塵たりとも近づけなかつたからである。

レオナルドはよく知つて居る室に通された、これは臺所と室間との兼帶部屋で、其處らに並べてある少許の椅子、長椅子、櫃の類は孰れも無器用な作り方、然かも大分年代を食つてゐる事は滑かな光澤の出てゐるのでそれと察せられた。戸棚には重い白鑞の食事皿が澤山に置いてあり。天井の梠から藥草がブラ下がつてゐるし、壁は白ペンキを塗つた計りで何の飾りもなく、牀には煉瓦が敷いてあつて無暗に大きな爐は煤で汚れてゐた。

以上はレオナルドが記憶してゐたと少しも異らなかつたが唯つた一つ目新らしい事があつた、卽ち昔は窓に桐油を張つてあつたのに今は稍黑味がゝつた綠色の厚い硝子を篏めてある事で、これは上天氣の際室內を薄暗くする用意であつた。それから二階にある寢室の窓は木造の鎧戸で鎖されてゐたが、しつくり締まらないため左迄寒氣は防げなかつた。

園丁は匂ひの高い杜松と山に生えるヒースを燃やして火を拵へてから土燒の吊ランプに火を點じた。ランプの形はエトルリアの墓にあるものに似てゐたが、獨りこれのみならず此のタスカニーの地の器物、習慣、言語は人

の記憶に留まらぬほど古い時代の面影を傳へてゐた。娘の子が酒とパンと萵苣のサラダとの夕餐を調へてゐる間に、レオナルドは二階に上つて部屋々々を見て歩いたが以前此處へ來た時と少しも變りはなく、四本脚の大寢臺は相變らず目に付いた、自分はよく此の中へ這入つて祖母に寢かされたもので、今は他の重代物と共に叔父の手に傳はつたのである。壁に懸かれる耶蘇受難像、聖母像、聖水の貝、ネッピアといふ名の干し草、草書の拉典語で走り書きに書いてある祈禱文書（此の書物は隨分古いため紙は甚だしく黃ばんでゐた）なぞは能く見覺えがあつた。

そして客間に歸つてから爐邊に坐して氣持ち好い橄欖樹の匂ひのする木杯で飲み始めたが、其の間にヂアンと孫娘は彼方へ行つて寢に就いたので自分だけ室內に殘る事になつた。卽ち擅に幼時の樂しい思ひ出に耽つた。

二

先づ父ピエロ・ダ・ヴィンチの事が頭に浮かんだ。父はフロレンス民主國の下に公證人を勸めてゐた人で齡正に七十、白髮の老人ながら未だ矍鑠たるもので、現にレオナルドは二三日前フロレンスのギベルリナ町にある父の宅にゐたのである。凡そ此のピエロくらゐ生活を（但し單調なそして厚かましい生活を）愛好した人は未だない と言つて好い程で、長子たるレオナルドに深い愛情を寄せてゐたが嫡子アントニオ、ヂュリアノの二人は父が此の庶子に溺愛する餘り家の財產を分けてやるやうな事があつては大變だと氣を揉んで、種々父子の仲を割く事に努めた。

卽ちレオナルドは生みの親の家にゐながら赤の他人のやうだと感ぜざるを得なかつた。就中腹違ひの弟アントニオはレオナルドを無神論者と思ひ込んでゐるため一倍僻みを見せた。蓋しアントニオは熱心且つ嚴格なサヴォナロォラの信徒卽ち稱して會菲人と云つた中の一人である上に羊毛商組合に屬して因習を尙び道德を念とし錢を愛する商人であつたからで、彼は屢々基督敎の信仰、懺悔の必要、當代哲學者の異端に何く事などをレオナルドに語つて聞かせて、自分が編輯した(魂を救ふ法)なる書を吳れた。レオナルドはそれをポケットに入れて置いたが、今叔父の家の煖爐の前で坐しながらこれを引き出して見た。骨を折つて小さな字で書いてある此の小本は成程商人の手仕事に適はしいもので、

本書はフロレンス人たる余卽ちアントニオ・ヂ・セル・ピエトロ・ダ・ヴィンチの編輯に係る懺悔の書にして義姉ナンナに贈りたるもの、凡そ犯したる罪を懺悔せんとする人々に有用なる書なり

と記してあつた。

弟の此の册子を見ながら彼は自分が幼少の頃强ひられた傳襲と町人氣質から成る敬神の念が此處にもプン〳〵匂うてゐるなと思つた。此敬神の念は實に代々親讓りの家寶であつた。レオナルドの生れる一世紀前にゐた當家の人々は矢張り父ピエロに似て細心深慮、努めて吝嗇を行ひ、敬虔なる僕としてフロレンス民主國の下に住んでゐたのである。先祖の名の初めて書き物に見えたのは千三百三十九年で、公證人ミケレ・ダ・ヴィンチなる人の事

が記されてあつた。其のミケレをレオナルドは今尙ほはつきり記憶してゐる祖父のアントニオのやうな人であつたらうと想像してゐた。祖父は子息に敎訓するに何等高きを望まぬやう、又名譽、榮聞、文武の公職、法外な富、法外な學問を望まぬやうにと說き聞かせた。

そして(低きに處るは最も安全なり)とは彼の不易の金言であつた。石橋を叩いて渡るやうな此の金言を祖父が口にする時の眞面目さ、泰然自若たる容子をレオナルドは思ひ出した。

三十年振りで此の祖父が有つてゐた家の屋根の下に坐して風の唸りを聞き煖爐に燃える薪を見詰めながら、自分の生涯は長い間(蟻蜘蛛)政略の軋轢であつたと共に又豐かに咲き綻べる花であつたと考へた。(此の花は弟アントニオに依れば寧ろ節制のコンパスを以て測り鐵の鋏を以てこれを剪むべきであつた。)

三

翌る朝老園丁が目覺めぬうちにレオナルドは家を出て憐れにも小さなヴィンチの町を通つて隣村アンキアーノに達する險しい道を登つて行つた。昨日と同じく太陽は色が失せて冬らしく寒く、雲なき冷めたい空の藍色は遙か地平線に漂へるほんやりした紫色の中に溶けて、トラモンタナ卽ちアルプス風は强く北の方から吹いて、ヒューヒュー鳴る一本調子の音を耳の端で唸つた。植物も依然無色に近く且つ貧相で、痩せた小半圓形の葡萄畑、疎らに生えて活氣に乏しい草は罌粟の搖れに混ざつてゐた。そして到る處沙塵にまみれて灰色なせる橄欖樹があつて、其の幹は非常に古いので瘤が出來て黑ずんで曲りくねりしてゐた。そしてアンキアーノ村に這入つたときレ

オナルドは思はず足を停めた。何故なら見ようと思つて來た場所が見當らないからで、卽ち斜曲城と並びに此の城の塔（斜曲城には數多の塔があつたが其の頃これ一つのみが殘つてゐたのである）の中にあつた一軒の酒店とは共に跡形もなく消え失せて其の廢墟には今は葡萄畠が拓かれ滑かな白壁の家が一軒建つてゐたからで、そして一人の農夫が葡萄の樹の間に溝を掘つてゐたが、其の說明に依ると件の酒店の主人が死んでから地所をばオルビニャーノから來た羊飼ひが買ひ取つて、城址を取り拂つて葡萄畠と橄欖の林とに切り拓いたのであつた。

レオナルドが其の小さな酒店を見に來たのには相當の理由がある、彼は實に此の酒店で生れたからで。

五十年前の頃アンキアーノ村の此の酒店は非常に繁昌した。店は往來から少しく引き下がつて酒旗は樂し氣に風に飜り、近村の人達はサン・ミニアト又はフチェッキオに開かるゝ市に行く道すがら凡て此所で會合する事にしてゐた。其の村民は羚羊を狩る獵夫、馬子、收稅吏、其の他これらの人と一座になるのを、さして嫌はない氣質の人達であつた。酒屋の女中は十六になる孤兒で、ヴィンチ町の田舍乙女、其の名をカテリーナと云ふのであつた。

偖て千四百五十一年の春の一日、フロレンスの公證人ピエロ・ヂ・セル・アントニオ・ダ・ヴィンチなる者此のアンキアーノ村へ招かれて、或る油搾器械の六分の一に當る借地契約證書を作成した事があつた。そして其の用が滯りなく濟んだので百姓達は斜曲城の古塔にある酒屋へ此の公證人を請待したところ、素よりピエロは常に慇懃にこれらの賤民に接してゐた事とて一議に及ばず右の請待を受け納れた。其の時酒宴の席に出たのはカテリーナであつた。そして未だ年若い公證人は後に白狀した通り一目見て此の女中に參つたのであつた。それからはフロ

レンスに歸る事を延ばすため鶉狩といふ口實を設けて繁々酒店に通うてカテリーナを攻めたてた。ピエロは當年取つて二十四歲、容貌の秀麗に加ふるに膂力強く、幾分めかし屋の風さへあつて、夙に女たらしとして聽名を馳せ、剩へ戀をする男になくて叶はぬ辯舌、自信ある辯舌があつた。始めカテリーナは狐疑して聖母に祈つて冥助を求めたが、それでも到頭兜を脫いでしまつた。そして鶉がニエヴォレの谷を飛び去つた頃、身持ちになつてゐた。

父アントニオは子息のピエロが村の居酒屋の女中と乳繰つてゐる次第を直きに知つてこは一大事とピエロをフロレンスへ引き寄せ、大急ぎに急いでヂョーヴァンニ・アマドリの娘アルビエラを嫁として押し付けてしまつた。アルビエラはさして若くもなければ又美人でもなかつたが唯持參金だけは夥あつた。父は又アッカタブリーゲ・ヂ・ピエロ・デル・ヴァッカといふ百姓にカテリーナを娶らせたが、此の百姓は醉つ拂ふとカテリーナを死ぬ程打擲するといふ噂が立つた。ピエロの父の處置にカテリーナは一言も爭はずに言ふなりになつたが內心の悲歎の遣る瀨なきに遂に熱病を發して牀に就いた。そして生みの子レオナルドに乳を哺る事が出來ないためアルバノ山から山羊を連れて來て其の乳を呑ませてゐた。一方ピエロはカテリーナの子を家へ引き取つて養育したいと父に乞うたが、これは當時にあつては手かけの子供のある事を格別恥としなかつたからで、それのみならず庶子は往々嫡子と同じ資格を以て敎育を受け時としては却て嫡子よりも愛好される事さへあつたのである。斯くしてレオナルドは德を持する事嚴に神に仕へて敬虔なるヴィンチ家に引き取られて祖母レナ・ヂ・ピエロ・ダ・バッカレートの愛護に託さるゝに至つた。

母カテリーナをレオナルドは恰ど夢の中で見たやうに覺えてゐたが就中あの微笑――瞬間的ながら神秘に滿ちて纖美に、且つ溫乎たるうちに慳のある微笑こそは最も深くレオナルドの記憶に留まつてゐた。そして其の微笑は美しい中にも愁ひを含んだ顏（それを非道く峻い顏だと思ふ人がないではなかつたが）に常に現はれる表情と不思議にも反對してゐた。嘗てレオナルドは地球に於ける太古の女神シベリーの古いそして小さな靑銅像の顏に其の微笑を見た事があつた。そしてそれは實にヴィンチ家の若い農婦、卽ち自分の生母の特徵として記憶してゐるものと同じ美妙な微笑であつた。

レオナルドは心の中で思つた――

『粗服を着てゐる山の女の方が何れ程盛裝の美人に優るか知れない！』

カテリーナを知つてゐる人達はレオナルドは母に似て、すらりとした長い腕、金髮、微笑は確かに母から承けたのだと言つてゐた。父のピエロからは巖疊な體格と生活の醍醐味ともいふべき健康とを承け、また彼レオナルドが有する殆ど女性に近い魅嬌の力は母から承けたのであつた。父の家で養育されたけれど全然母のカテリーナから遠ざかつてゐた譯ではなかつた。蓋し母の家は祖父の別莊の近くにあつたので、丁度晝頃アッカタブリーグが牛を連れて外へ出て行つてゐる時分に葡萄畠の間を通つて塀に搔き上つて母のところへ走つて行くと、手に絲繰棒を持つて闕の上に立つて我が子を待つてゐた母は、それと見るなり兩手を擴げて抱かうとするので、レオナルドは行きなり其の手の中へ飛び込むと、目や唇や髮に無暗と接吻するのであつた。それから夜は又アッカタブリーグが居酒屋で賭博をして大酒を飲んでゐるので、レオナルドは竊と寢臺を拔け出して、窓から無花果の樹に下

りて母の家へ走つた。そして自分に樂しかつたのは露を宿せる草葉の冷めたき、蚊喰鳥の啼き聲、足に怪我をさせた蕁蔴や石礫、遠くに輝く星で、若しや祖母が目を覺まして自分が家の中にゐない事を見付けはすまいかといふ心配さへ甘い氣分を與へて吳れた。

併し祖母のレーナも此の孫を愛して甘やかしてゐたのでレオナルドには祖母の記憶が明かに殘つてゐた。濃い鳶色の着物を着て、白い頸卷を附け、老いて皺のある顏は黑いけれど併し深切が籠もつてゐた。それから寢んねこ歌、古代タスカニーの製法に倣つて自分に食べさせるために燒いた饅頭から食慾を誘ふやうに發する匂ひなぞも記憶にあつた。併し祖父アントニオとは餘り好い和合が出來なかつた。初めの間祖父は自ら孫に敎へてゐたが、レオナルドは學問の方に氣が向かなかつたので、丁度七歲のときサンタ・ペトロニルラ禮拜堂の學校へ入學する事になつた。入學はしたものゝ矢張り拉典の文法は好きではなかつた。一體彼は生徒としては懶け者で、町の後ろの崎嶇たる谷間を迂路ついた揚句は其處で仰のけに寢轉んで鶴の飛ぶのを凝と眺めて羨望の餘り心を苦めたり、或は蕾を開いて見たり、色鮮かな花瓣や、花粉で蔽はれて蜜の濕ひある雄蕊を見て驚駭に打たれたりした。祖父は折々家にゐない事があるので、其時小さなナルドは一日中山へ遊びに行つて山羊の足跡を便りにするか又は嶮崖の端を傳ふかしてアルバノ山の絕巔に通ずる道を歩んだ。此の山の巔に立つて眺めると牧場、田圃、小林、森林の無限の廣袤が望まれるし、フチェッキオに散在する沼、プラト、ピストイア、フロレンスの諸邑、アルプスの雪峰、並びに晴天の際は地中海の霧深い紺碧が見えるのであつた。そして到頭家に歸つて自分の姿を見ると身體は一面に埃だらけ、日に燒けて手は引つ掻かれ着物は裂けてゐるが、祖母は可愛孫のさも嬉し氣な樣を見ては

叱る心にもなれず祖父アントニオに告口をするでもなかつた。父も叔父のフランチェスコもフロレンスにゐるためレオナルドの顏を見る事は稀で、從つてレオナルドは一人ぼつちの月日を送つてゐた。彼は學校友達と遊ぶ事もなかつた。彼等の遊戯を見ると自分が不快になるばかりであつた。或る時彼等は蝶の翅を捩いで苦悶する樣を見ては笑つてゐるので、レオナルドは顏を蹙めて靑くなりながら其の場を立ち去つた。そして彼が不平な顏をして居るので遂に其の苦情は祖父の方へ持ち込まれた。そこで祖父は大に怒つて答つて嚇した上に實際階段の下の戸棚の中へ三日間入れた。レオナルドは公正を失せる長い鎖の丁度此の條の環を思ひ出したとき日記帳を取つて次の如く書き附けた——

『小兒のときに義務を果したゝめ監禁されるとすれば、大きくなつたら何んな目に遭ふだらう?』

四

其の頃ヴィンチ町から遠からぬ處に新築中の一大別莊があつて、棟梁はフロレンスの人でピアヂオ・ダ・ラヴェンナと云ひ、フロレンスの大建築師アルベルチの弟子であつた。レオナルドは其處へ行つて壁が築かれたり、或は石工が石垣を同じ高さに積み、或は器械で大きな石を上げたりするのを見てゐたが、或る日棟梁と話をした事があつた。棟梁は此の小兒が有する理解力に驚いて、初めは冗談半分に後には眞劍になつて算術、代數、幾何、機械學などを敎へた。そしてレオナルドは各概念をば宛らそれが翼の上に載つてゐるやうに易々として會得して自家藥籠中の物とするのを見て益々驚いた。餘り無造作なので、これは學習するのではない、單に記憶から取り

出すのだとさへ思つた程であつた。然るに祖父は此の好き心に對して常に横目を使つて睨んでゐたが、就中此の子が字を書く際好んで左の手を用ゐるのに氣を揉んで緣起でもないと思つた、何故なら凡て飯綱使ひ、魔法使ひ其の他惡魔と契約を結ぶ者は左ぎつちよで生れるからであつた。殊に隣家にフォルツニアノから來た者がゐて、其の人はレオナルドの哺乳した黑山羊はアルバノ山の或る老婆から買入れたものであつて然かも其の老婆は疑ひもなく巫女であつたと斷言したとき祖父の疑念は一段と高まつた。

『あの畜生、何うでも勝手にするが好い。併し彼奴が狼を養ふと其の狼も始終森の方に目を配るだらう。まあ好いや。一切天の思召しに從ふ事だ!　何家だつても一人くらゐ出來損ひはあるものだから』と老公證人は獨りで思つてゐた。

それに付けても愛子ピエロに早く嫡子があれば好いと燒けになつて待つてゐた。斯くして道ならぬ戀の所產たるレオナルドはそれ以來甚だ名譽ある此の家に間違つて生れて來た者であるといふ事實を益々明白に示すやうになつた。元來アルバノ山にある動植物の色は大抵不思議にも白くなると言ひ傳へられて（これがためアルバノ卽ち白いといふ名を得たので）此の山の森や牧場を徘徊すると白堇、白苺、白雀に出會したり、未だ巢立ちせぬ黑鵶の雛の白いのを見たりする事があつた。そして小レオナルドも亦白山に於ける幾多の不思議の其の一つであつて、フロレンスの德操高きそして平凡な公證人の家の變り種であつた。黑鵶の巢の中に大きな白い杜鵑がゐるのであつた。

五

レオナルドは十三のときヴィンチ町からフロレンスの父の家に移されて、それ以來故郷を訪ねる事は稀であつた。それからずつと後、千四百九十四年に書いたレオナルドの雜記帳の一册に《昨年七月カテリーナ來る》との文字が見えたが、これは恐らく下女を雇ひ入れたといふ意味であらうと人々は解してゐたが、其の實該記事は生母の事に關はるものであつた。カテリーナは既に夫を失つてゐたし、それに臨終が追々近いて來る事を知つて、責めて一度なりとも倅の顏を見たいと切望した餘り、ミランに擧行される聖釘の祭禮に行く賽客の一行に加はつて、タスカニーから遙々レオナルドの家へ來たのであつた。レオナルドは深い敬愛の情を以て母を迎へた。母に取つて彼は依然たる小兒のレオナルドで、夜竊かに跣足でやつて來ては自分の側で横になる昔の儘のレオナルドであつた。

母はアンキアーノへ歸らうとしたがレオナルドは肯かずに、ヴェルチェルリナ門に近いサンタ・キアラ寺の靜かなそして萬事につけて便利な一室に母を住まはしめた。後にカテリーナは病氣に罹つたとき、フランチェスコ・スフォルツァ公の建築に係つてミランの病院中最も壯麗な大病院に自ら求めて這入つたが、其の入院の數月の間レオナルドは一日として母への見舞を缺かした事なく、最後には一時間として病牀を離れなかつた。そして斯くまで母を一念に懸けながら友人は勿論弟子にさへ母がミランに來てゐる事をば露ほども話さなかつた。

併し自分を生んだ此の農婦の冷めたい手に最後の唇を押したとき自分はありとあらゆる物を此の女に負うてゐるやうに思つた。そして母のために立派な葬式を出した。

それから六年にしてルドヴィコ・スフォルツァ公の沒落を見たのであるが、其の時レオナルドはミランを退去せんとして一つの櫃を開けた。すると丁寧に包んである小さな風呂敷包が現れたので、それを解くと帆布で拵へた粗末な肌着が二枚、山羊の毛で織つた靴下が三足入れてあつた。これは母が倅のため手細工で拵へて態々ヴィンチ町から持つて來た物で、レオナルドは今まで一度もこれを着用せずに打遣つて置いたのが今や科學に關する書籍や器械、立派なリンネルの着物の中に此の見窄しい物を發見して名狀すべからざる感動を覺えた。そして後年自分獨り國から國、町から町へと流浪して歩いた時、憐れにも小さな風呂敷包をば最も大切な寶の中に詰め込んで決して手放す事がなかつた。

六

幼少の頃馴染みであつたアルバノ山の坂に登つたときレオナルドの思ひ出は以上の如くであつた。今岩蔭に坐して記憶に明かな景色を眺めると、瘤だらけなそして矮小な槲の樹は未だ枯葉を着けたまゝ前後左右に生えてゐるし、百姓が箒と呼ぶ馥郁たる杜松や、面恥ゆ氣な白い菫、並びて枯れて背の低い山ヒースの叢からは陽春の匂ひの感觸せられぬ新鮮な氣が立ち上つてゐた。遙か遠くにあるアルノオの河谿は天に接するかと見れば、裸々たる高峰右手に聯り聳えて蜿蜒たる陰影や、大蛇の蟠蜒せるが如き洞穴や、妙なる紫の廣い谿があり、直下に見えるアンキアーノは白色を帶びて日光に輝いてゐるし、向ふの方圓錐形の小丘に隱着せるヴィンチ町は宛ち山蜂の

窩に似、其の城の塔はアンキアーノ街道に面して二本の綠杉のやうにくつきりと黑い。

自分が生れて初めて此の山道を登つた時と今とは少しも變りがなかつた。尤も四十年の其の時(箒)は夥しく繁つて、菫と百里香は空氣を匂はせ、櫚の樹の枯葉はかさこそと鳴つてゐたのに、今はアルバノ全山に色もなければ、葉もなく北方の山たるに負かぬ觀を呈してゐるが、それでも古代人の所謂エトルリア、今の卽ちタスカニー、永遠の春の地、錯りなき再生の地たる此の地方は、レオナルドの目には彼が初めて農婦たる母のカテリーナの顏に於いて見たと同じい美妙な、そして溫い、そして美しさの輝ける微笑を湛へてゐた(若し此の微笑がなければ流石の美も餘り端嚴に過ぎる嫌ひがあつた。)

レオナルドは立ち上つて步み續けた。徑は益々險しく、風は益々冷氣を帶びて銳く、愈々北地の風致を添へた。少壯時代の思ひ出は心に群つて湧き上る。

七

父ピエロ・ダ・ヴィンチは幸福な境涯であつた。業務の練達に加ふるに氣立ての善い人とて彼の生活は油を點せる車の走るやうに圓滿無碍に進んだ。生きよ且つ生きん哉——これが彼の金言で、何人とも能く調和したが就中僧侶社會との間は甚だ善く、サンチッシマ・アンヌンチァア僧院をはじめ、其の他幾多の富裕な財團の管理者として莫大なる財產に加ふるに更に夥しい富を得たが、然かも父から學んだ簡易生活を墨守して決してこれが變更を敢てしなかつた。三十八歲の時に妻を喪ひ、直ちにヂョーヴァンニ・ランフレヂニ氏の息女フランチェスカを後妻

に迎へた。フランチェスカは容姿雅美なる上に可なり年下であつたが前のアルビエラと同樣矢張り子がなかつたので庶子レオナルドは父と居を共にして九分九厘まで家を繼ぐべき見込みがあつた。

當時バオラ・ダル・ボッツォ・トスカネルリと云ふは天文學者、數學家として其の名著れフロレンスに住んでゐた。彼はクリストファー・コロンブスに書を寄せて他の半圓球から印度に到るのは世人が想像するやうに爾く遠距離でもなければ勞苦の多いものでもない、これは余の精確なる計算に徵して確實であると斷言して彼に冒險の擧行を激勵し且つ成功を預言したのであつた。卽ちフロレンスの一學究が空寂たる小房の中で考察した事をコロンブスが實地に試みたので、新大陸の發見者は言はゞ樂師の手で奏でられた樂器であつた。時人はトスカネルリを稱して《聖者の生活》をなせる人と言つてゐた如く、彼は交際を避けて極めて質素なる生活を營み、身を持すること貞潔、赫々たるメヂチの宮廷に出入せざるは勿論、古代の新プラトーン派の模倣者流が集まつて空談する會に出席する事なく、容貌は不思議なほど醜いが眼光の烱々たるはこれを償うて餘りあつた。

さて或る夜、未だ子供と言つて差支ない一人の少年が此の學者を訪ねて來た。トスカネルリは生半可な物好きから出た訪問と見縊つて冷かにこれを待遇したが、併し若いレオナルド——蓋し少年はレオナルドであつた——と語を交へる事少時にして此の天文學者は、嘗て棟梁ビアヂオ・ダ・ラヴェンナの時と同樣、少年が數學に對して驚くべき性向を有する事を知り、甘んじて彼の師となつた。夏の夜、先生はレオナルドを携へて自分の天文臺のあるボッヂオ・デル・ピノへ行つた。これは花の都を帶のやうに匝れる丘陵の一つで、松が一面に生え、ヒース草は毛氈を敷いたやうになつて香氣馥郁として漂うてゐた。彼は宇宙の法則に關して自分の知れる限りの事を少年

に敎へた。レオナルドが世の哲學者達の餘りに閑却せる自然に對して實驗的に研究するてふ信念を懷くに至つたのは實に此の時の敎授に基いたのである。

父ピエロ・グ・ヴィンチは子息の學問に就いては何等干涉がましい事を持ち込まなかつたけれど今少し金になる職業を選ぶやうにと勸告した。そしてレオナルドが彫塑、繪畫の方面に嗜好を有する事を知つて其の作品の若干をアンドレア・ヴェルロッキオに示した。そしてそれから暫らくの後レオナルドは正式に此の畫家兼金工に弟子入をした。

八

ヴェルロッキオは素と煖爐の火焚きを業としてゐた者の子で、レオナルドより長ずること十七歲、青味を帶べる容顏は靜肅として平かに、脣は二重に垂れ、屹と結んだ唇と鋭い目に於いてのみ不可思議な知性の閃めきがあつた。眼鏡を鼻の上に載せ、蟲眼鏡を手に持つてヴェッキオ橋の近くにある薄暗い店に坐せる彼は何う見ても詰らない店番のやうに見えてこれが大畫家とは兎ても受け取れない程であつた。彼はバオロ・ウッチェルロの門に出た人であるが、師と同じく遠近法は宜しく學理に叶ふべしと主張し、且つ《數學の一部分たる幾何學はあらゆる知識の母であつて同時に又繪畫の母である。そして繪畫はあらゆる藝術の父である》と言ひ、美を完全に知る事と完全に享樂する事とは同一不二であると見てゐた。ボッチチェルリ並びに其の流派の人々とは違つてヴェルロッキオは怪奇な美に接するとき恍惚として己れを忘れる事がない代り又異常の不具を拒斥する事もなく、兩者に於いて

共に研究の機會を見出してゐた。初めて解剖學を應用して人物を描いた者は實に此のヴェルロッキオであつた。ボッチチェルリはオリンパスとゴルゴタとを一つに混じたるが如き神秘な靄、並びに奇蹟と妄誕とに於いて藝術の魅力を發見したが、ヴェルロッキオは忍耐刻苦して自然界の眞實相を攷究したる後、これを確實に把握するところに藝術が存すると見たのである。彼に取つて奇蹟は眞理ではなかつた。眞理が奇蹟であつた。

ピエロが入門せしめた十七歲の少年の師匠は實に斯くの如き人であつた。初め彼はレオナルドの師であつたが後には弟子となつた。嘗てヴァルロンブロサの法師から基督洗禮の圖を依賴して來たとき、ヴェルロッキオは其の畫中の跪ける一天使をレオナルドに割り當てゝ描かせたが、其の結果自分がこれまで朦朧と感得して宛ら霧の中を大骨を折つて遲々たる歩みを以て手探りに摸索してゐた或る物を、此の弟子は直觀的に且つ明白に領會してゐる事を知つた。

後になつてヴェルロッキオが畫界から退いたとき人々は噂してそは蓋し此の若い弟子の技倆を嫉妬したからであると言ひ合つたが、其の實師弟の仲は膠漆も啻ならぬ程圓滑であつた。弟子には運筆の輕捷と精緻とがあり、師匠には堅緻と注意力の集中とがあつて、互に嫉妬せず、敵意を挾まず、兩者各々如何に多く負ふところあるかを殆ど知らずに與に斯道に携はつてゐたのである。

其の頃ヴェルロッキオはオルサンミケレのために《聖トマスの不信》と稱する靑銅の群像を製作したが、これはアンヂェリコの作品に見る天上の幻夢と異ると共に又サンドロ・ボッチチェルリに伴へる夢幻的の主觀とも異つてゐた。釘附された基督の傷痕の中に指を突込みながら莞爾たる笑顏を示せる聖トマスの微笑は人間の大膽さを初

めて神の前に於いて表出せるもの、正にこれ理性が奇蹟に向つた顏を突き合せてゐるのであつた。

九

レオナルドが一本立になつて描いた最初の作はフランドル織のカーテンの模樣畫であつた。これはフロレンスから葡萄牙王に贈る獻上品で、畫題を人類の墮落と云ひ、椰子の葉、種々の花、極樂に棲める獸の描寫は精を竭し微を穿つてゐたゝめ批評家ヴァサリは不拔の忍耐に一驚を喫したくらゐであつた。

智慧の樹に片手を伸ばせるイーヴが好奇の大膽な微笑を帶べるは師匠ヴェルロッキオが聖トマスに與へたのと同じものであつた。

それから少し後に父ピエロはレオナルドをしてロテルラと稱する木の圓牌に繪を描かせた事があつた。ロテルラとは家々の飾りに用ひる看板の事で、多くは寓意の畫を描く習はしとてレオナルドはメヅサの顏のやうな恐ろしい獸を描いた。卽ち蜥蜴、蛇、蟋蟀、蜘蛛、百足、蛾、蠍、蝙蝠、其の他有害なるあらゆる動物を集めて其の特性を研究した後、各動物が有する眞性を夫々選擇し且つこれを誇張して、言はゞ寄せ集め物を以て一箇の怪物を揑つち上げた。此の怪物は決して存在しないのであるが、然かも一ユークリッド氏、或は一ピタゴラス氏の精密を以て或は有から無を引き出すを得て能く此の怪物の存在を可能ならしめるかも知れないのであつた。怪獸は將に岩窟を出ようとする圖で、沙上の鱗は黑光りして逆立ち、あんぐり開けた口からは惡臭を發して鼻孔から煙を吐き、目は火燄のやうに燃えてゐた。そしてこれは物凄い形相には違ひないが、然かもそが畸形よりも寧ろ魅

力に於いて驚くべきものがあつた。そして其の魅力は美の魅力に劣らず力强いものであつた。

爬蟲類の死體から發する臭氣に毒せられて部屋の中は窒息するやうに苦しいのに、レオナルドはそれにもめげず晝夜共に熱心に研究し熱心に描いて遂に畫は出來上つた。そこで臺の周りに黑布を卷いて其の上に圓牌を載せ、且つ光線が怪獸をのみ射るやうな工合にして置いてから父を呼んで繪を見せた。ピエロは這入つて來て獸を見るなり思はず知らず後へ退つたが、やがて氣を鎭めて再び眺めたとき大恐怖の顏は見る〳〵大喜悅の顏に變じた。

『看板が出來上つたのです。預期した通りの結果を得ました。何うかお取りなさつて下さい』とレオナルドは言つた。

其の次ぎにサン・ドナト・ア・スコペトの法師から東方聖人拜禮の圖を注文されたが、此の畫の下圖に於いて披瀝した解剖上の知識並びに情緒を外形に表現するの知識とに於ては既往の如何なる畫家よりも優つてゐた。畫面の背景は殆ど古代希臘の風に模して美はしく描出せられ、聖母に抱かれたる聖子は內氣に微笑して異國の賢者が齎した貴重な奉獻の品々に驚異せるかの如く、一力賢者達は現世に關する古代の知識の重荷に疲れたと見えて膝を曲げ、頭を垂れ、目に手を翳して、奇蹟中の奇蹟卽ち人の形を假りて出現したる神を一心に凝視してゐた。

最初の畫《人間の墮落》には理性の大膽卽ち蛇の智慧を示し、此の拜禮の畫は鴿の淸淨、換言すれば信仰の謙讓が表されて、兩者相補してレオナルドの哲學範圍を遺憾なく發揮してゐた。

併し此の第二の畫は遂に完成を見なかつた。これが仕上げを促まれて筆を取つては見るが到底打ち勝ち難き諸種の困難が生じた。レオナルドはペトラルカの所謂《餘りに烈しく渴するため假令渴を醫やさうとしてもそれが

出來ない）のであつた。

父ピエロは三たび妻を迎へて新妻マルゲリタにアントニオ、ヂュリアノが生まれた。そこで繼母はレオナルドを憎んで夫が適法に生れた兩子に讓るべき財産をば巫女の黑山羊に哺乳されたといふ庶子のために支出するのを責めた。これに加へて若き畫家は相弟子の間にも敵があつた。そしてレオナルドとヴェルロッキオが嘗て告發された事があるとチェサレがヂョーヴァンニに話した其の告發を敢て企てた者は實に右の弟子の一人であつた。そして此の讒訴が幾分眞實らしく思はれた所以は一つは兩者の交情が異常に親密であつたゝめ、今一つはレオナルドはフロレンスの青年中隨一の美男子でありながら（レオナルドと時を同じふせる某氏の言に依れば彼の外貌には美が輝いてゐたゝめ愁ひある心も彼を見れば喜悅を覺えるに至つた）と婦人との交際を避けてゐたからであつた。素より告發は全然事なきを得たが併し彼は師の許を去つて獨自で描くやうになつた。

すると此の度は異端に與し無神論を懷抱するといふ噂が立つて益々フロレンスに居堪らなくなつた。父はレオナルドを君主ロレンツォ・デ・メヂチに紹介したが元來此の大君は敢爲に過ぎ非因習に過ぎる精神家を嫌つて常に卑屈なる諂諛を欲するの人、然るにレオナルドは勿論かゝる事をするに不適當な性格として折角の紹介も徒爾に終つた。そして無聊に倦む餘り彼は埃及大使に談じてシリアの（ヂオダリオ）に對する主任建築師たらん事を望んだ。それにはマホメット教を信奉すべき必要のあるのを知つては居たが、彼に取つてフロレンスを去るのが唯一の希望であつた。そして機會は遂に彼に幸した。彼は銀を用ゐて馬の首の形せる多紋の琵琶を製作したところ、ロレンツォ・デ・メヂチの心に叶つて、これをルドヴィコ・スフォルツァに贈るため製作者自身に持たせてミランに遣

した。

此の故にロンバルヂーの宮廷は科學者又は畫家としてレオナルドを迎へずに琵琶彈きとして迎へたのであつた。

併しミランに出立するに先ち彼は公に長文の書翰を送つて自分が公に取つて甚だ有用の材である事を進言した——

最も高名におはす君主、余は諸發明家の手に成りたる戰爭用の機械に就いて研究し且つ評價致し候ところ、何等目ぼしき新機軸を見ざるに依り、甚だ差出がましく候へ共敢て余の技術の秘奧を陛下に開陳仕るべく候。

一　余は橋梁に關して一工夫を心得居り候。これに依れば甚だ輕くして運搬するに易く、然かも甚だ丈夫にして火に燃燒致さず候。

二　要塞或は城にして堅緻なる岩石を切りて築けるものは格別、さもなくば爆裂彈を使用せずして如何なる種類のものをも破壞致す新方法を心得居り候。

三　塹壕乃至水流の下に在つて迅速且つ靜肅に坑道、通路を造るべく候。

四　敵に向けて大砲を運搬する際敵が抵抗する能はざるやうに保護されたる兵車を工夫致し候。

五　優美なる新式射石砲、大砲、臼砲、小砲を鑄造致すべく候。

六　並びに城壁破壞車、彈丸鑄造器、其の他驚駭すべき諸器械。

七　海戰に就いては攻守兩樣の工夫を有し居り候。卽ち側面に石彈、鐵彈を受くるもこれを撥ね反す船、及び未だ何人も知らざる破裂彈との事に御座候。

八　又平和の際に在つては建築、公私の家屋造營、堀割、水道の工事を以て陛下の御滿足を得べく候。余は又あらゆる美術家と等しく繪畫、彫刻の術を心得候ゆゑ大理石、金屬、粘土を以て或は油の繪具を用ゐて御尊命に應じ得べく候。且つ陛下の御父君並びに高名なるスフォルツァ家の多幸なる記念のため騎馬像を青銅にて鑄造して永遠の光榮と致すべく候。陛下若し上述の諸項中餘り誇張に過ぎ或は到底企及すべからざる事と思召され候はゞ請ふ余は陛下の御苑に於いてこれを實驗して叡覽に供すべく候。或は御苑ならずとも陛下の御思召に叶ふ場所にて致すべく候。玆に陛下の優渥なる御眷顧にまで敢て不肖レオナルド・ダ・ヴィンチを推薦致し候。恐惶謹言。

そして初めてロンバルヂーの綠野の上に輝くアルプスの雪峰を見た刹那、自分は新生活に這入つたのだ、眞に自分の鄕國となるべき不可思議な國土に來たのだと感じた。

＋

アルバノの山路を登りながら回顧した五十年の生涯は以上の如くであつた。路は棒を立てたやうに直立し、植

物は既に下方にて盡き、寂然として恐ろしい禿山は地球ならぬ他の遊星に屬するかのやう、そして氷のやうに冷たい風は猛烈に吹いて、ために目を開ける事が出來ず、石ころは足の下から壞れて轟々と谷間に落ちる。然かもそれに屈せず山を登つて行つた。一歩は一歩毎に眺望は擴がつて、周圍に聳える高山を次第に俯瞰するやうになり、從つて山々の寶ともいふべき草木は見えなくなる。山徑を攀ぢ跨る努力のために却て歡喜の情が湧いて來る。

フロレンスは眼界から逸して廣大なるエンポリ地方は脚下に擴がつた。先づ寒さうに黑ずんで廣い影を帶べる紫色の山々が見え始めて、それから無數の波濤のやうにリヴォルノからサン・ヂェミニアノにかけて起伏せる丘陵が現れた。到る處空氣と虛空と空間とがあるばかり。狹い山徑は將に盡きんとする、宛ら自分は素晴しい翼に乘つて無限の擴りの上を飛翔してゐるやうに感じたが、併し自分が未だ翼を有しない事に思ひ到つたとき不意に足を切斷される時に感ずるやうな驚駭が起つた。そして自分が子供の時分毎時も鶴の翔るのを眺めてゐたが、其の鳴く聲が恰ど《此處までお出で》と自分を呼ぶやうに聞えるのに自分は空を飛んで鶴のゐる處へ行かれないのだと口惜しくなつて泣いた事を思ひ出した。こつそりと祖父の鳥籠を開けて鳥を放してやつたとき自由を得た鳥どもが勢好く飛ぶので、それを見て喜んだ事もあつた。それからアイカルスの話を聞くのが面白かつた。アイカルスは蠟で翼を拵へてそれで飛行しようと思つたのに不幸にも墜落して死んだのであつた。そして學校の先生が昔の英雄の中で誰を一番偉いと思ふかと訊ねたとき、自分は一秒も躊躇せずに《アイカルスです、デーダルスの子のアイカルスです》と答へた事を思ひ出した。それからヂオットが建てたフロレンスの鐘樓にある薄浮雕のうち自分の大切なこのアイカルスの拙い像を見出して有頂天になつた事もあつた。一體自分には幼稚な時に得た一つの記憶

が保存されてゐる、これは他人から見れば馬鹿々々しからうが自分に取つては預言の意味があつた。それに就いて自分は斯んな事を記して置いた――

『これは未だに記憶してゐるが私の極く小さな時分、搖籃の中で寢てゐると一羽の鳶が飛んで來て私の唇を開けて翼を唇で擦つたと思うた事がある。だから私が生涯翼の事を口にするのは、或は私の運命かも知れない。』

實に人間の飛行てふ問題はレオナルド一生の先入主であつた。四十年前の其の頃と同じく今再び白山の阪に立つて以爲く、人類が翼を有たずにゐるとは堪ふべからざる不正である、寧ろ不可能の事に屬すと。

そして『一切を知る人は一切をなし得るのだ。私は知りさへすれば好い。知れば自ら翼を有するやうになるの』だと考へた。

十一

山徑の葛籠折りをなせる箇處を登り了へたとき誰か知ら自分に觸るやうに感じたので振り反つて見るとそれは別人ならぬヂョーヴァンニ・ボルトラフォィであつた。ヂョーヴァンニは帽子を手に摑んで目を半ば閉ぢ、首を曲げて風と戰ひながら一しきり先生の名を呼んだけれどそれがレオナルドの耳に達かなかつた。先生が長い髮を疾風に靡かせ打ち勝ち難き意思を面に表して、目は思索を以て深く、額に皺を溜め、長い眉毛を八の字に寄せてゐる容子は此の弟子に甚だ奇に且つ恐ろしく見えた、宛ら別人のやうであつた。そして風に脹らむ赤マントの廣い襞す

ら化異鳥の翼のやうに見えた。

ヂョーヴァンニは努めて大きな聲で叫ばうとしたが息切れが甚だしいため切れ〴〵にしか言葉が出なかつた。

『今……フロレンスから……來たのです。手紙が……重要な手紙が參りまして……直ぐに先生の手に渡して呉れとの事でした。』

レオナルドはケーザル・ボルヂア公からの來翰だと推察したが果して公の秘書アガピトの手蹟であつた。

『さ、これで下へ降りなさい。私は直ぐ後から行くから。』

ヂョーヴァンニが寒さのため青くなつてゐるのを見てレオナルドは斯う言つた。そして弟子が暴風と戰ひつゝ山を降つて、小さな灌木の厖弱い枝に攝まり、岩石の上を這ひ、腰をくの字に曲げて行く樣は周圍の事物に比して無暗と小さく、風伯の怒りに對して餘りに弱く、恰ど一切人類の《弱さ》を縮寫せるやうであつた。其のヂョーヴァンニを凝と眺めながらレオナルドは不圖自分の全生涯が無爲に終るべき呪詛を受けてゐる事を思ひ出した。そして其の呪詛は啻に學友から寄せる同情を奪ふのみならず自分に永遠の石胎を宣告したのであるまいかと氣遣はれた。

『あゝ私の翼！　翼も亦他の物のやうに失敗に終りはしないか？』と思つた。

そしてアストロが讒言の中で言つた事を思ひ出した。それは惡魔が深淵の恐怖、飛行の面白さを以て人の子を誘うたとき、人の子は《主たる爾の神を試むべからず》と答へた其の語であつた。

彼は頭を擧げ口を閉ぢ山と風とに打ち勝つて再び登攀した。徑は遂に斷えて恐らく未だ何人も足を踏み入れな

かつたと思はるゝ裸々たる岩石の上に出た。そして突然自分は斷崖の縁にゐる事が分つた。其の斷崖は今が今まで目に這入らなかつた。霧深い黑ずんだ紫色は頭上に滿つると共に脚下にも塞がつて、恰ど空雲漠々たる天涯が上にも下にもあるやうに見えた。風は今は旋風と變つて雷鳴のやうに間斷なく吼え且つ唸つた。それは目に見えぬ惡鳥が次ぎ〳〵群を成して大きな翼を羽搏きして自分の側を飛び行くやうに思はれた。最早や先へは進めない。自分が隨分久しく有つてゐる此の懷かしい翼の問題は未だ曾て斯くまで强大な力を以て逼つた事は一度もなかつた。飛翔力の理論と必然とを斯くまで强大に感銘させる事は一度もなかつたのである。

彼は叫んだ。

『必ず翼を有するやうになる！　私が完成しなくても他人が完成する。翼は必ず製作されるのだ。精神は横になつて寢てゐるものではない。人間が一切を知つて翼を有つやうになれば實に一箇の神と化するのだ。』

そして人間の知性を局限せるあらゆる法則を絶しあらゆる境界を超えて空中王を心に描いた。光榮と力とを有して軈て來らんとする人の子、青空の中に光其の物のやうに輝ける白い巨大な翼ある大白鳥を心に描いた。

其の時彼の魂は恐怖に近い喜悅を以て滿たされた。

十二

アルバノ山を降りたとき日は沒しつゝあつた。尖れる絲杉は金色の空に對して黑色に見え、遠ざかり行く山々は紫水晶の如く溫乎として半透明に光つてゐた。風は最早や靜かになつた。段々アンキアーノは近づいて來る

山邑ヴィンチは既に眼界に這入つた。

レオナルドは足を停めて呟いた——

『人間は征服者（ヴィンチはヴィンチェレ卽ち征服者の義）といふ名のある山から最初の飛行をなすのだ！』

そしてアルバノ山麓にある自分の出生の場所を凝視して言つた。

『彼を生んだ巢に永遠の光榮あれ！』

アガピトからの書面はファエンツァの包圍の近づけるを報じて新任工學技師兼建築技師が卽刻ケーザル・ボルヂアの陣營に到るべき事を要求してあつた。

それから二日の後レオナルドはフロレンスを去つてロマーニャへと出發した。

十二の巻　ケーザルか然らずんば無――

ケーザル・ボルヂア。　千五百年――千五百三年

「君主は人たり又獸たる事を要する」

――ニッコロ、マキャヴェリ君王篇。

一

神寵によりてロマーニャ公とビオンビノ卿と神聖羅馬教會の旗手とを兼ね且つ司令官たる朕卽ち佛蘭西のケーザル・ボルヂアは

將校、城守、主將、浪士の統領、官吏、臣民に告ぐ、

朕は朕の建築師にして且つ戰爭工學技師長たるレオナルド・ダ・ヴィンチ氏を汝等に紹介す。氏は名聲最も藉甚にして最も敬愛すべきの人、汝等克く氏をして隨處に通過せしめて敢て妨碍するなく、就中城塞の調査を望むの際は宜しく全部の檢閲と測量と判斷とを許し且つ氏に力を假すは勿論所要の人員はこれを供給すべし。更に朕の技師等は一切の事に就いて一に氏の意見に遵ふを要す。朕は氏に委ぬるに朕が所領内に在る凡ての要塞と城との監督を以てせり。

紀元千五百二年、卽ちロマーニャに於ける朕の統治の第二年、八月十八日バヴィアに於いてこれを布告す。

ロマーニャ公、ケーザル

レオナルドの新信認狀は以上の如く記してあつた。

近年ケーザル・ボルヂア公は法王アレキサンダー六世の代理として往昔コンスタンチン大帝より羅馬法王に寄進したと傳へられる教會の舊所領を漸次回收するに努めて、都會ファエンツァを十八歳の幼主アストルレ・マンフレヂより奪ひ、フォルリを女君王カテリーナ・スフォルツァより收めて、此の兩名の保護を委任されしを幸ひ聖アンヂェロ城に幽囚し、更に詐欺の協約をウルビノ公と締結したる後千五百二年ボローニャ征伐を計畫したが、これ皆公が伊太利を統一して絶對唯一の支配者たらんと欲する熱心に出でた事であつた。然るに十一月に至つて公の敵たるベルヂア、シエナの君公を初め其の他の有力者はムヂォーネに會し、秘密同盟を結んで公を伐たんとし、ヴィテルロッツィテルリの如きはハンニバルの口吻を眞似て、今後一年を出でずして余は必ず共通の敵ケーザルを投獄する、投獄せずんば追放すると誓言した。此の同盟の報諸方に傳はるに及んで勢威ある君主は續々これに加擔して先づウルビノの叛起を見、尋いでケーザルの軍隊が謀叛を計つた。佛蘭西王の救助は遲々として容易に來さうにもない。公は宛ら破滅の淵に立てるやう、岌々乎として殆かつたが、然かも公は此の瀨戸際に在つて能く機策を回らした。敵は手間取つて直ちに決行しない。斯くして機會は遂に逸して合縱の諸公は此の簒奪者と和議を講ずる事になつた。そこで公は敵を出し拔いて更に策を弄して彼等を抗爭せしめ、搗てゝ加へて深大なる虛僞と禮

儀とを用ひて稍己に有利なる態度に出でしめてから、直ちに新に征服したるシニガーリャ市に於いて敵と會して商議を行ふため急いで其の準備を整へた。

一方レオナルドは間もなく宮廷の重要人物となつて、公の命に依り諸市を飾るに宮殿、文庫、學校、兵營、堀割を以てした外、或は戰爭の器具、軍事地圖を製し、且つ公の最も激烈な戰爭ある毎にこれに臨んだ。

然かも周圍に起り來る事柄に對しては餘り明確に餘り緻密に眼を注ぐを避け、成るべく政事に遠ざかるやうにして、菓樹園の作り方、シエナ伽藍の鐘を鳴らす機械、リミニの泉から落つる水の低い音樂、ウルビノ城の鳩小舍等、凡て物理現象、社會現象のみに殆ど己れを委ねてゐた。アペナイン山麓に住める羊飼ひの角笛を見るに孔深く口の開け方が狹いがこれは反響の音量を大きくするためであつた。それから幾日となく朝から晩まで寂しいピオンビノの濱に立つて波の落ちるのを注視した。そして四圍悉く人間の正義の法則が破れてゐる間に在つて獨り造化の不變不易を想ひ、深く力の源の永遠の正義の中に存せる歡喜を發見した。

六月某日、幼主アストルレと其の弟の屍體がチベル河にあるのが見付かつた。屍體の首に石が結はへてあつた。人々は其の所業をケーザル公に歸したが、併し其の日レオナルドは、

『ロマーニャの荷車を見るに前の二輪は小さく後ろの二輪は大きいが、此の造り方は間違つてゐる。重味は凡て前の方にある。』

と手帳に記入した。

二

千五百二年十二月の下浣、ケーザル卽ちヴァランチノア公は悉く廷臣を引き具し、チェセナを發してファーノへ行つた。ファーノはアドリア海に濱してシニガーリャを距ること二十哩、公は一たび自分の敵であつたオリヴェロット・ダ・フェルモ、ヴィテルロッツォ・ヴィテルリ、ヂアン・パオロ・バリョーニの三人に對して此の地を會見の場所に指定したのである。そして數日の後レオナルドは公に會するためペサロを出發した。

ところが途中であらしに遭つて、山々は吹雪に埋もれて進み難く、馬は氷の上を滑るし、斷崖の眞下は海岸と見えて韃靼たる波浪の音が耳を打つ。更に夜になつてから路を間違へた。最早や絕體絕命、仕方なく手綱を放して馬の本能に任す事にした。併しレオナルドの馬は不意に停歩して何うしても前へ進まうとはせず、頸を伸ばして絞殺された男の屍體を嗅いだ。屍體は此の時尙だ木の枝にブラ下つてゐた。

そして漸つとの事で遠くに明りが見えて來た。それがノヴィララの旅館である事が案內者に分つた。ノヴィララは丁度ペサロとファーノの中央に當る山中の町であつた。旅客は一齊に馬を速めて、程なく旅館の入口の重い扉を叩いた。扉は恰も城門のやうに鉄を澤山打つてあつた。先づ馬丁が目を擦り〳〵出て來て次に亭主が顏を出したが、亭主は此の新來の客を拒絕した。

『何うも相濟みませんが部屋も厩もすつかり滿員でございまして……お泊りのお客はケーザル陛下のお歷々ばかり、大官も軍人も宮人ゐらつしやりまするが、それでゐて寢臺一脚に三人四人とお休みになる始末ですから

……』

併しレオナルドは姓名を告げて公の御璽ある證明書を示した。すると亭主は頻に謝つて自分の部屋を宛行つて呉れた。部屋の相客は佛蘭西の將校三人限りであつたが三人とも可なりに飲んだと見えて熟睡してゐた。

部屋を出てレオナルドは料理場へ行つた。料理場と言つてもロマーニャ地方に於ける宿屋の習慣として客室兼帶のもので、室内太く汚れ、壁は裸の儘で處々雨に染んだ汚點が見え、珠鷄は止まり木の上で眠つて、小豕は扉の邊を鳴いて歩き、葱、胡瓜、腸詰の類は天井に吊る下がつてをり、火の盛んに燃える竈の前には一匹の豚が燒いてあり、客は長い食卓を圍んで酒を飲んだり骨牌を玩んで爭つたりしてゐた。

レオナルドはストーヴの前に腰掛けた。そして傍にある四角形の食卓にバルダッサルレ・スキピオニのゐるのを逸早く認めた。スキピオニは嘗てケーザル公の槍兵隊に長であつた人、並びにスキピオニと共に大藏大臣アレッサンドロ・スバノッキア、フェルラから來てゐる公使バンドルフォ・コルレヌッキオが目に這入つた。そして今一人其處に自分の未だ知らない人がゐた。その人は盛んに身振り手振りを交へて細いキーくいふ聲で喋つてゐた——

『諸君此の事實を證明するに足る例は古代史、近代史の中に尙だくあるのです。諸君は試みに甲兵を以て譽れを得た國を思ひ出して御覽なさい。羅馬人、スバルタ人、雅典人、エトルリア人がそれです。アルプス以北の漂浪軍がそれです。そして偉大なる武將は凡て自國の民を以て軍隊を編制しました。卽ちニヌスはアッシリヤ人から、サイラスは波斯人から、亞歷山はマセドニヤ人から兵を募りました。勿論ピルルスとハンニバルは傭兵によつて勝利を得たけれども、あれは此の兩將が異常の天才であつたからです。諸君は又私の主張の根柢を成すも

の——まあ言つて見れば兵法學の基礎といふべきものですが、どうかこれを見逃さないで下さい。それは軍隊の强みは步兵、然り單に步兵のみにあるといふ事です。決して騎兵にあるのではありません。勿論近世の發明中滑稽なること玩具に類する銃砲、彈藥にあるのでもありません。』

『ニッコロー君、君は些つと言ひ過ぎたと思ふが』と前の槍兵隊長はニコリ笑つて言つた。『銃砲は可なり重要になつて來たぞ。君は羅馬やスバルタの事を喋々するけれど拙者の考へでは現今の軍備は昔に比して整うてゐるやうに思ふ。佛蘭西兵の一中隊乃至三十門の射石砲を有する一砲臺は君の言ふ古代羅馬兵を手も足も出なくするからな。』

『詭辯だ〳〵！』ニッコローと呼ばれた人は斯う叫んで益々熱心になつた。『あなたの說には恐ろしい危險な誤謬があると思ひます。他日伊太利人はどえらい目に遭つて初めて傭兵の弱い事、騎兵砲兵の憐むべき無力な事が分るでせう。あなたはルクルルスの事を考へて見なさい。ルクルルスは一握の手兵を提げて敵の騎兵一萬五千を擊破したではありませんか。そして其の一萬五千の中には、現時の佛蘭西騎兵中隊と全然同一な騎兵がゐたのです！』

宛らルクルルスの勝利を見て來たやうに言ふ此の人をレオナルドは物珍らし氣に眺めた。薄黑い赤味を帶びて長い襞が眞直に垂れてゐる其の着物はフロレンス共和國の官吏並びに同大使館の書記官が着用する服裝に似てゐるが、併し古びて汚れ目が見え、袖は既に絲が拔けて其處のリネンは磨れて汚くなつてゐた。そして骨張つた大きな手にインキがどつさり着いてゐて一本の指には疣があつた。痩せた顏の線は尖つて不規則な形を示し、一體

の容子に品威なく、肩は窄んで年配は四十恰好、人と話しながら時々相手の頭を見詰める癖があるが、これは恰ど遠目の利く食肉鳥が空間を覗くのに似てゐた。そわ〳〵と落着きのない擧動、土臺が黑い兩頰も今は熱を疾めるやうな赤さを帶び、就中大きな灰色の据つた目の鋭さには烈々たる火熱の潛める事を示してゐるが、然かも時時其の目に現れる冷笑と冷かなる不快の色とは殆ど傷しいくらゐ弱みの表現を帶びてゐた。

ニッコローは引き續き自己の意見を吐いた。彼は談話に眞と不眞とが奇妙にも混合してゐるばかりか如何にも大膽な言を弄する事、何かと言へば直ぐ古代人の權威を楯に取る事などにレオナルドは驚かされた。ニッコローが其の射擊距離の不正確なるを理由として大口徑の銃を使用するの難きを說いたが、それは學理に合してゐるのでレオナルドは成程と肯いた。併し直ぐ其の後に彼はスバルタ人、羅馬人が要塞を築かなかつたから要塞なるものは無用であると斷言した。此の人が古代の希臘人、羅馬人の說を重要視するのはレオナルドが數學の公理を尊重するに似てゐた。然かも此のとき亭主が來てレオナルドに二階の寢室の用意が出來た事を告げたゝめ論爭の結果が聞けなかつた。

三

雪は夜つぴて降つて翌る朝道案內の者は發足を肯じなかつた。

『此の模樣ぢやお前さん犬だつて外へ出るものぢやねえ。』

そこでレオナルドは已むを得ず今一日逗留する事にして兼ての發明に係る燒串の試驗に取り掛つた。此の燒串

は打遣つて置いても獨りで廻轉する仕掛であつた。

そして魂消た顏をしてそれを眺めてゐる人達に說明して聞かせた。

『此の道具を用ゐますと肉を焦がす心配がありません。何故かなら火熱が平均に當るからで、熱が增せば增すだけ益々早く廻轉するのです。まあそれくらゐの事ですな、此の串は。』

レオナルドにとつては此の割烹道具の完成が飛行機の成功に劣らざる喜悅を齎すかのやうであつた。

矢張り其の部屋で昨日のニッコローは若い砲兵軍曹を捕へて、此の方法は抽象數學から割出したもので百發百中だと說いてゐた。それは賭博必勝法、換言すれば彼の《所謂運命女郎を騙して機嫌氣褄を取る》法であつた。そして彼は其の必勝法の確實なるを實際に示すため幾たびか賽の目を振つたが、其の都度負けるばかり、ハテ凭んな筈ではなかつたがと自分は一方ならず吃驚りするし、說明を聞いてゐた人達は面白相に笑つた。そして勝負が附いたときニッコローは案に相違した結果を見てすつかり面目玉を踏み潰した。彼は馬脚を露した——財布は既にないふにになつてゐて負けた金は拂へないのであつた。

其の夜遲く一人の女客が此の宿へ到着したが、下部に扈從に馬丁に童坊に黑人の奴隷に種々の愛玩動物を伴ひ、長持、挾箱といふ仰々しい觸れ込みであつた。そして此の客は誰あらう綽名を大姐と言つて先年サヴォナローラの少年審問者のため既んでの事に裸にされさうになつたヴェニスの藝妓レーナ・グリフィンであつた。今を去る二年前同じ泥水稼ぎの人達がする例に習ひ此の新マグダレンは罪障消滅のためとあつて綠の黑髮ふつつと斷り、殊勝にも庵室に閉ぢ籠つたところが焉ぞ知らんこれは策略に出た事であつて、藝妓が市に納賦する稅金の番附面

（此の稅金番附は樣子の分らない嫖客のために出來てゐるので）に於ける自分の價格を高める手段であつた。卽ち尼寺の蛹は目が覺めると蝶となつて以前に比して一段と立派な新らしい世界へ飛び出した。斯くて其のヴェニスの花魁は一躍して聲價を揚げると同時に其の頃一流の藝妓の間に行はれた系圖の僞作を企てた。出來上つたレーナの系圖は實に堂々たるもので、ミラン公ルドヴィコの弟にして樞機官の一人であつたアスカニオ・スフォルツァの姫君になり濟ましてゐた。尋いで或る樞機官の妾となつたが此の老僧は數多の醜聞を巧く金で隱し了ほせた程の財產家、レーナを舐めんばかりに可愛がつた。そして目下ケーザル・ボルヂア公の軍營に附屬してゐるので、此の愛妾は公の行幸地なるファーノへ旅する途すがら今宵此の旅館へ來たのである。素より旅館の亭主は斯んなに羽振りの好い客を斷る譯には行かなかつた。そこで先づアンコナから來た先客の商人連に掛け合つて宿泊料の割引を約した上、鍛冶場で寢て貰ふ事にして可なり大きな寢室を明けさせ其處へレーナの供人を入れ、更に同じ懸け引きをニッコロー氏並びに其の合客なる佛蘭西の將校に持ち込んだ。これは言ふ迄もなくレーナを此の部屋に据ゑるためであつた。

然るにニッコローは憤然として抗議した。『貴樣氣が違つたのではないか』、『此の私を誰だと思ふ』、『往來から轉げ込んだ、何處の馬の骨だか解りもしないスベタの機嫌を取りたさに却つて尊敬すべき人に侮辱を加へるとは前代未聞の無禮であるぞ』と亭主に喰つてかゝつた。すると其處へ神さんがまあ〳〵暫らくと割つて這入つた。此の神さんは主人の權勢あるしたゝか者、俗に言ふ『猶太人に舌の入質』をしてゐない女であつた。夫に代つてニッコロー氏に詰め寄り、そんな大聲で呶鳴り散らす前にお前さんとお前さんの家來衆と馬との勘定を拂つて貰ひ

ませう、それに前週の金曜日に家の人が立て換へてあげた四ヅカットの金も返濟して欲しいと明かに言はねど其の意を仄めかした。然う當て擦つて置いて今度は芝居もどきの耳打の體宜しく、大道に群集して大人物を氣取り、ロハの場所に住んで眞直な人達を愚弄する山師、乞食共は何うかしてどえらい目に遭へば好いと思つてをります と言ひ足した。疑ひもなくお神の此の言葉は幾分利いたと見えてニッコローは默り込み、今は唯如何にすれば毫も面目を損せずに此の場を逃れる事が出來るかと思案してゐる體に見受けられた。それに頓着なく宿の下男共は既に氏の荷物を運び出してゐるし、それにレーナの猿は氏の方に齒をムキ出して机の上の紙や皮表紙の大きな書物の上を飛んで歩いた。其の書物はリヴィウスの年代記とプルタークの英雄傳とであつた。

其の時レオナルドはニッコロー氏の側へ行つて帽子を脫ぎ、

『お氣に入りますまいが私の部屋へお出になつては如何でせう。斯んな些細な事でも御用に立てば難有い仕合はせですが』と言つた。

ニッコローは驚いたらしく狼狽の容子が見えた。併し氣が落ち着くと共に相應の禮を述べてレオナルドの懇請を容れた。レオナルドは自室に導いて一番好い場所を取らせた。斯うして此の人を見れば見る程益々興味を感じて牽き付けられるやうに思つた。そして直ちに彼の名を知つた。彼はフロレンス共和國十人議政府の書記官ニッコロー・マキャヴェルリであつた。

狡猾にして用心深きメヂチはケーザル・ボルヂアと條約を結ぶ目的を以て今より三月前にマキャヴェルリを派遣した。するとケーザルは自分の敵にして又フロレンスの敵なるベンチヴォーリョ、ヴィテルリ、オルシニに對する防

禦同盟をフロレンスに申し込んだ。併しフロレンスではこれを容るれば公が餘りに厚く親和を希望するに至らん事を恐れたし、若し又拒絶すれば何れくらゐ深い敵意を挾むか知れないので、そこで使臣マキャヴェルリに命じて公の提議をば單に外交上の好辭令と曖昧なる好意とを以て折衝させ、並びにフロレンスの商人がアドリア海に瀕せる公の領内を自由に通過する事を竊に要求させた。此の通過の件はフロレンスの通商上極めて重要の事であつた。

レオナルドも姓名を名乘り官職を告げて二人は直ぐ種々と談話を交へた。互に反對の性質を有しながら常に孤獨に且つ冥想に耽る人は、兎もすれば互に造作なく自然に打ち解ける事がある。今の場合は卽ちそれであつた。

『レオナルドさん』と言つたマキャヴェルリの眞率な態度は滿更畫家の心を牽かぬでもなかつた。『大畫家としてのあなたの名聲は聞いてゐました、併し一寸斷つて置きますが私は畫に對する知識がありません、のみならず畫は餘り好まないのです。斯う言へばあなたは定めし往來でダンテを嘲弄して無花果を一つ與へようとした奴に大詩人は假令貴樣が二十の無花果を寄こしたつて私は私の有つてゐる一つと換へないぞ、と答へたあの論鋒を向けるのでせう……が併しケーザル公からあなたは兵法學に精しいと聞いたものですから畫よりも其の方に一段の興味を感じたのです。レオナルドさん、兵法學は實に重要です。偉大なる文明は戰爭を基礎としてゐます、規律ある軍隊に據つてゐるのです。私は此の頃君主國、共和國に關する著述をやつてゐますが其の中で恰ど數學者が數の法則を論じ自然哲學者が物理學を論ずるやうに私は各國の生命、發育、衰亡、死を司る自然の法則を論じよう

と思ひます。一體これまで國家の事を書いた人達は……』

と言ひ差して不意に言葉を切り惡る氣のない微笑を浮かべて自分で自分を咎めた。

『いや失禮しました、何うも手前勝手な事ばかり言ひまして……定しあなたは政治に對して趣味をお有ちではあるまいと思ひますが、恰ど私が畫に對して興味を有たないやうにですな。』

『然うでもありません。それは何ちらかと言へば政治上の談話は一體に下らないものですから私は好まないのです。併しあなたの御意見は非常に新らしいしそれに驚くべきものがありますから正直なところ私から望んでお聞きしたいのです。』

『分りましたかレオナルドさん、政治論は實際私の十八番なのです。私は聰明な人と政治を語る事が出來れば飯なんか食はなくても好いのです。ところが困つた事に聰明な人といふものは薩張りないものでしてな、私のフロレンスの大官は絹や羊毛の値段を考へるだけです。其の他の事は何一つ考へてはゐません。然るに私には（と苦い微笑を浮かべて）其の絹もなければ羊毛もないのですからな。』

レオナルドは彼を宥めて談話を續けさすため斯う言つた。

『するとあなたの御意見では政治は必ず數學を基礎とせる正確な科學である、自然の觀察と實驗とに其の確實性を發見すること將に機械學の如きものである——と私は斯う受け取りましたがこれで宜しいのでせうか？』

『正に其の通りです』とマキャヴェルリは顏を蹙め彼の癖として遠目の利く鳥のやうな恰好をしてレオナルドの頭をこして向うを眺めた。

『實は私は人事に關する新事實を人類一同に知らせたくて堪らんのです。自然律なるものはあらゆる社會生活の先導となる法則でありまして、超然として人間の意思以外、善惡以外に立つてゐるのです。それだのに昔の著述家は善惡貴賤といふやうなものを假りて自然律の說明に供しました。私は政府は必ず斯くあるを要すと說くのではありません。將來或は斯くあるべきかと言ふのではありません。單に現存する政府卽ち共和國乃至君主國の名ある大團體の性質を攻究するだけです。そして政府に對して數學者、解剖學者に倣ひまして稱揚も非難も一切加へは致しません。私は人類に向つて眞理を說くのです、それがために假令私の身體は焚かれても——ヂロラモ師のやうに焚かれても好いから眞理を說きます。眞理の宣傳は由來危險な業ですからな。』

レオナルドは微笑しながらマキャヴェルリの昂奮の狀を見て心の中で思つた。

『妙な人だ、あんなに熱情を湧かして非熱情を稱揚してゐる！』

そして聲を出して言つた。

『ニッコローさん、あなたの目的通りに成功すればあなたの事業はユークリッド以上です。アルキメデース以上です。』

まことレオナルドはマキャヴェルリの說が常套を脫してゐるのに驚いたのであつた。そして十三年前に自分は解剖用の手帳の隅に斯う書き入れた事を思ひ出した——

『最と高き神よ、余を助けて人間の性質と氣質と習慣とを研究せしめ給へ、恰もこれに於いて人間の內部諸機關を研究したる如くに。』

四

不意にマキャヴェルリは嬉しさうに目を光らせて叫んだ。

『レオナルドさん、御說を聞くに付け二人の斯うして一緒になつたのが益々不思議に思はれてなりません。多分これは運命を司る星が稀有な周り合はせをしたのでせうな！　私は人間の性質には三種類あると主張するものです。自己を見得る人が其の第一です、他人に示されて初めて自己を見得る人が第二です、自分でも見れず人に示されても見えないのが第三です。それであなたと私は——私は伴つて謙抑するの罪を犯したくないから斯う率直に申すのですが、あなたも私も第一の範疇に屬する方ですな。おや、お笑ひなさる？　併しレオナルドさん私は斯うしてあなたと落ち合ひましたが、これは死んで墓の中に這入つてからならばいざ知らず、生きてゐるうちでは然う容易く私にはない事だらうと思ひます。實際選ばれたる人は此の世では稀なものですから。それは然うと一寸御免を蒙つてリヴィウスの最も美はしい一節を讀んで見ませう。』

と言つて机の上にある件の書物を取つて蠟燭を直し、毀れて絲で繕つてある鐵緣の眼鏡を掛けたとき大きな丸い硝子玉のため彼の容貌は俄に重々しくなり敬虔の相をさへ添へて恰ど禮拜を執行する人のやうであつた。そして讀まんとする句を見付けてやをら口を開けようとする途端扉が開いて小さな皺くちや婆が這入つて來て膝を屈めて丁寧に禮をしながら、

『御免下さりませ、旦那樣、斯樣な御迷惑を掛けまして誠に相濟みませんが主人のレーナ・グリフィン樣の可愛

がつてゐらつしやる奴が一匹ゐなくなつたものですから――はい、兎でございます、首に青い紐が着いてをりまして……もう二時間も前から皆で捜してゐますけれども何うしても見附からないのでございます。』

『兎なんか此の部屋にゐるものか、此の婆あキリ〳〵出て失せろ』とニッコロー氏は呶鳴つて、件の老婆を突き出さうとしたが何故か急に其の手を止めて、眼鏡を外しては見、掛けては見て十分に顏を眺めてから叫んだ。

『此の婆あ、お前はアルヴィヂアぢやないか。然うだらう、アルヴィヂアだらう。私は又お前の老耄た身體は疾くの昔に惡魔に呉れたのだと思つてゐたよ。』

老婆は目を瞬き畏つて傷ましい微笑を見せてニッコロー氏の禮儀ある挨拶に答へた。

『まあ誰樣かと思つたらニッコロー樣でございましたか。隨分久しいぢやございませんか、何時かお逢ひ申してから餘程の年數になりますこと。豈や神樣は二度と斯んな嬉しい目に遭はして下さるものとは思ひませんでした。』

マキャヴェルリは何くれと昔の話をするため老婆を料理場へ誘はふとしたが、レオナルドは御遠慮には及びませんから其處で悠つくりお話しなさいと言つて自分は書物を抱へて隅の方へ行つた。そこでニッコローは此の宿屋で第一の上客であるやうな堂々たる威容を示して酒を註文した。

『おい貴樣の主人の吝ん坊に然う言へ、昨日の酒は酸つぱい味がしたから注意しろつて。此のアルヴィヂア婆さんも己も坊主のアルロット見たやうな人だからな、アルロットは酒が惡るければ御祈禱が上げられなかつたんだぞ。』

アルヴィヂアは兎を忘れニッコローはリヴィウスを忘れて共に德利を抱へて舊友のやうに喋つた。アルヴィヂアは自分の若い折の話をして聞かせた。其の頃自分は縹緻好し、引く手數多で思ふが儘に振舞ひ、頓着せずにしたい三昧、バヅアでは僧正の法冠を取り上げて自分の頭に載せた事すらあつた。それが年取るに從つて移りにけりな花の色、男共には捨てられる、貸間と洗濯仕事をして辛々其の日〳〵を送つてゐたところ憐れや病氣に罹つた。一時は此の勢ひで進めば寺の入口にうよ〳〵してゐる乞食共の仲間に這入つて最後は毒藥を服んで一思ひに往生せにやならぬかとさへ思つたが、難有い事に聖母樣のお助けがあつて一命は何うにか取り留めた。そして間もなく或る老住持の力添へで（此の住持は鍛冶屋の若い女房と通じてゐた）洗濯仕事よりもずつと金になる商賣に取り掛かるやうになつた……。

此處まで話したときレーナからの使ひが婆を呼びに來て話はこれ切りになつてしまつた。レーナの用向きは猿の創ある足に塗る膏附とボッカッチォの十日物語とを持つて來て呉れとの事であつた（十日物語は常に枕の下の祈禱文書の側に置いてゐた。）

老婆が去つてからマキャヴェルリはペンを削り直して紙を延べフロレンスの君公に上るべきヴァランチノア公の性格と行狀との報告書を作りにかゝつた。此の報告書の文體はすら〳〵として殆ど諧謔に近く然も深い政治的手腕の閃めくものであつた。

『レオナルドさん』と彼は畫家の方を向いて叫んだ。『私は古代スパルタの長所に就いて論じてゐたのに、それが急にあの婆と口を合はして下らない女共の事を喋つたものですから嘸あなたは吃驚なさつた事と思ひます。

併し何うぞ私を餘り輕躁な奴だと思はないで下さい。我々は自然を模倣する必要があります。我々は人間ではありませんか。昔アリストートルは其弟子亞歷山大王の見てゐる前で自分の背に四人の情婦を乘せたり自分も亦順ぐりに四人の背に乘つたりしたといふ話がありませう。ですから我々單純な罪人は彼アリストートルに比して不謹愼の度が少いではありませんか？』

今は家の中の人々は眠つてゐて唯蟋蟀の鳴く聲、アルヴィヂアの呟く聲、及びアルヴィヂアに藥を擦らせながら唸つてゐる猿と、此の三つの外は凡て森として靜かであつた。レオナルドは牀の中へ這入つてから目を擧げて一種變つた友の方を凝と見守つた、友は依然ペンを嚙みながら胸を曲げて書き續けてゐた。蠟燭の火によつて壁の上に映る彼の頭の大きな影を見ると角々は鋭く尖つて首筋細く、鼻は嘴に似て長く、下唇は突き出てゐた。マキャヴェルリは報告書を書き上げてから書翰の常用語『急に至急に迅速に』を記入し、尋いでリヴィウスの年代記を聞いて數年來著手せる纂注に取り掛かつた。

蠟燭の火がチラ〳〵と動いて深く燃え去つたとき壁の影もゆら〳〵と踊つて顏を蹙めたが、併しフロレンスの秘書の顏は森嚴にして凜乎たる平靜と古代羅馬の盛時の反映とを保つてゐた。唯折々目の奥と唇の隅に僞りの狡猾、嘲笑の皮肉が現れた。

五

翌日あらしは鎭まつて氷の結べる窓に太陽はキラ〳〵と光り、鳥の柔毛のやうな雪の野と小山は靑空の下に白

く輝いてゐた。レオナルドは目を覺まして見るとニッコローは早や室にはゐなかつた。そこで着物を着て料理場へ行つた。料理場では例の自動燒串で大きな肉片が燒けてゐるので料理番の男は喜んでゐた。

レオナルドは馬の支度を命じてから朝飯を喫するため腰掛けた。すると側でニッコロー氏は激昂の體で新に到着した二人の客と談話してゐた。其の一人は五分の隙もないめかしやの靑年と見受けられて顏に目立つた特徵がなく、名をルチオと稱してフランチェスコ・ヴェットリの緣者であつた。ヴェットリはフロレンスの著要人物で、同府の(旗手)たるピエロ・ソデリニと交り深く、マキャヴェルリを非常に最眉にしてゐる人、今諸友から來た手紙を本人のニッコロー氏に屆けさすため甥のルチオを遣したのである。

『金の事ならば御心配なさらないで下さい』とルチオは言つてゐた。『叔父の言葉によりますと先週の木曜に十人議政府の人達は約束し……』

『おい〳〵君、家來二人に馬三頭は約束だけで食へますか？　成程イモラで六十ヅカットを受け取つたけれど拂ひは其の上を超して七十ヅカットだつたのだ。幸ひ慈善家の憫みがあつたから好かつたものゝ然もなければフロレンス共和國の秘書は餓死するばかりになつてゐたのだ。全體議政府の諸公は外國へ遣した使臣に全く金がなくなつたから何うぞ願ひますと請求させるやうでは幾らフロレンスの名譽を喋々したつて其の甲斐がないぢやないか。』

ニッコロー氏は今更愚癡を並べたところで始まらないとは承知しながら責めてもの氣晴らしに斯んな事を毒突くのであつた。蓋し料理場には殆ど誰もゐないので遠慮なく話す事が出來たからであつた。

ルチオ君、此の方は矢張りフロレンスの方でレオナルド・ダ・ヴィンチさんと言ふのだ、確か《旗手》のソデリニ君の舊知の筈だ』とマキャヴェルリは畫家を紹介した。ルチオはレオナルドに恭しく一禮した。

『レオナルドさんは昨晩私が侮辱を受けたのを御覽になつたが昨晩ばかりぢやない、毎日あんな目に遭つてゐるのだ。ルチオ君、私は要求する、分つたかね早く私に役目を廢めさして貰ひたいね、これは請願するのでなくて要求するのだ』と言つた。そして尙もブン〳〵憤つて此の若いフロレンス人が議政府諸公の全體であるかのやうに蜚々呶鳴り附けた。『君、私は金のない人間だ。委任を受けた事柄は段々惡い形勢になるし、健康だつても其の通りだ。今の儘で進めば私は棺桶の中に這入つて家へ歸るかも知れないのみならず私は出來るだけ一生懸命に盡した積りだ、委任の權限は實に憐れなものだが併し其の權限內で隨分働いた積りだ。談判を開いてさ、ぐるぐる方々を奔走して、前へ一足後へ二足、行ると言つたり行らないと言つたり、全く私としては遣り切れたものぢやない。それで以て相手のケーザル公と來てはあんなに怜悧だから斯んな子供騙しの手に乘らないし。然う〳〵私は君の叔父さんに手紙を送つたが……』

『ニッコローさん、叔父は屹度あなたのために出來るだけの事は盡しませうから。正直のところあなたから來る報告書を十人議政府の人達はフロレンス共和國の福祉に對して甚だ主要なものだと考へてゐますから、あなたが退職したいと言つても許容はしますまい。《マキャヴェルリ君の代りをする人物がゐるものか。彼れは黃金に等しい人だ、我々共和政府の耳だ、目だ》と斯んなに言つてゐる位です。私は斷言します、あなたの報告書はフロレンスで素晴しい成功を收めたのでこれ以上偉くは成らうたつて成れない位なものです。あの文章の絢爛として麗な

こと、あれには誰一人として魅せられない者はありません。これは叔父に聞いたのですが、此の頃政事室で會合がありまして其の席であなたの興味ある書翰を一つ讀みましたところ閣員は餘りの面白さに大笑したと……』

『ほう然うか？』と叫んだマキャヴェルリの顏は憤怒のため歪んで見えた。『おゝそれで分つた！　私の書翰は議政府諸公の興味を牽くと言ふのか、諸公は顏を解いて私の言ひ廻し方を歎賞するのか？　それでは神に謝さなくちやならん、此のニッコロー・マキャヴェルリは滿更捨てたものでもないと見える！　それだのに其の當人は犬のやうな生活をしてゐるのだ。凍えて饑餓に逼つて、熱のため身體が顫へて、宿屋の亭主からは侮辱される。そしてそれは皆んなフロレンス共和國のためを計るからの事だ。畜生、共和國も旗手もあつたものかい、奴等皆んな惡魔に取つ摑まれば好い、水鼻垂らしの婆奴ー　君等も然うだ、懺悔もせず入棺もせずに埋葬されちまへ！』

そして市場で行はるゝ尾籠な罵詈を浴せ掛た。彼等十人議政府の諸公——賤劣極まる人物でありながら然かも自分が服事し且つ庶民の上に處る奴だと思ふと堪られない程癪に障るのであつた。其の時ルチオはマキャヴェルリの心を外らせようと思つて彼の若い妻君マリエッタから託された手紙を渡した。それは粗惡な灰色の紙に子供らしい大字で書いてあつた——

最とも懷かしきニッコロー樣、偖も承れば御滯在の地方には熱病をはじめ其の他の病氣猖獗に候由、妾の心配御察し下されたく候。夜晝ともに安き心地も御座なく候。

子供は仕合はせと丈夫にてゆき〳〵と太りあなたにそつくりに御座候。小さき顏は雪のやうに白く候へ共爭

はれぬものにて頭の形はあなたに似、濃き黑毛生えをり候。あなたに似てをり候ゆゑ美しと見受けられ候。

それは〳〵活潑にてニコ〳〵せる容子は丸一歳經ちたるやうに御座候。生るゝなりパッと目を開けて家中に聞ゆる程の大聲を揚げて泣き申候。何卒々々母子の事は片時も御忘れ下さるまじく候。

何よりお願ひ申上げたきは成るべく早く御歸り遊ばされたき事にてこれ以上御待ち申上げ候は妾に堪へがたく候。神樣聖母樣共にあなたに御保護あらん事を祈りをり候。シャツ二枚、ハンケチ二つ、タオル一筋入れて置き候、かしこ

フロレンスにて　　マリエッタ拜

手紙を讀めるマキャヴェルリは宛ら別人のやうに見えるとレオナルドは思つた。彼の峻しい顏に斯んな溫かな微笑があらうとは思へない程であつた。然も其の微笑は直きに消えて彼は肩を聳やかし手紙を皺くちやに丸めて手荒く財布の中へ入れて荒々しく言つた——

『私が病氣だといふ事を誰が言つたのだ？』

『それはニッコローさん、マリエッタさんは毎日會議の人達へあなたの事を尋ねにいらつしやるのです。そしてあなたが今何處にいらつしやつて何んな容子だとお訊きになるのです。』

『分つた〳〵！　多分そんな事だらうと思つてゐた。偖て〳〵國の政治は獨身者に限るね。政治と妻君と——これは兩立しないものだ、二者宜しく其の一を選ぶべきなりだ。』

そして急にルチオを顧みて言つた。

『そして君は？　君は未だ若いから早く結婚したいだらうね？』

『唯今は然うでもありませんが。』

『結婚なんてあんな馬鹿な事をするものぢやないぞ。地球を背負つてゐるアトラスの肩があるなら兎に角、然もない以上は廢す方が悧巧だ。何うですレオナルドさん、そんな物ぢやありませんか？』

併しレオナルドは悟つた、此の人はマリエッタを深く愛してゐるのに自分でそれを恥ぢて否認したのだと。

宿屋は急に空になつた。そこでレオナルドも出立の支度をしてマキャヴェルリに同行を誘つた。併しマキャヴェルリは首を振り悄然としてフロレンスから來る金を待ち受けてそれを得てから勘定を拂はなくては此處を立てないと言つて、今迄無理に見せかけてゐた氣輕さは忽ち消えてしまひ、如何にも病人らしく憐れな樣に見えた。長く一つ場所に逗留してなす事もなく日を過すのは彼に取つて苦痛であつた。併し又彼が理由なくして突然居處を變更する結果十人議政府はそのため國務に支障を來すと呟くのであるがそれも一應は尤もの次第であつた。

レオナルドはマキャヴェルリを側の方へ引いて行つて金は御入用なだけ都合しますからと言つた。それをマキャヴェルリは拒絕した。

『それでは私の好意を無にするといふものです』とレオナルドは押しかへして言つた。

『斯うして二人が逢つたのは運命の星の不思議な周り合はせではなかつたのですか？　まあ〳〵そんな事を言はずに私に惠みを垂れて下さいませんか。』

レオナルドの聲には深切が滿ちてゐた。マキャヴェルリは拒絶する勇氣がなくなつた。そこでフロレンスから來れば返濟するといふ約束で二十ヅカットを借りた。そして俄にお殿樣のやうな勘定の拂ひ方をした。

六

そして兩人は出立した。これは申分のない靜穩な朝であつた。日蔭の方は尙だ凍つてゐるが、日に當る方は春のやうにほか〳〵して、濃い青色の影ある雪を馬の足が踏む毎にサク〳〵と音を發する。雪白妙の山と山との間から冬の海の白い綠が輝いて、かなたこなたにちらつく黃色い三角形の眞帆片帆は宛ら蝶々が止まつてゐるやうであつた。

ニッコローは話したり、冗談を言つたり、笑つたりした。極く詰らない事でも何か知ら珍妙な考へ方をしたり皮肉な見方をしたりした。

漁村を通つたとき丸々と肥つて陽氣さうに見える何人かの僧達が寺の階段で女達に珠數を賣つてゐた。そして女の夫や兄弟共は遠くの方に離れて間抜けた顏をしてそれを見てゐた。

と見たニッコローは叫んだ。『馬鹿だなー　總じて太つちよといふものは直き火が附いて熱くなるのが分らないか、そして美人連はあの坊主を(聖父)と呼ぶ計りか又(父親)にするのだぜ。』

レオナルドはサヴォナロラに對しての感想をマキャヴェルリに求めた。ニッコローはこれに答へて、一時は師をフロレンスの救世主だと思つて熱心に味方をしたけれど餘りに迅くあの預言者の弱點が目に附いて來たと言つた。

そして『脾病疾みのやうに忿りつぽいあの宗徒全體が大嫌ひになりました。其の事を思ふだけでも忌やで堪らないのです。彼奴ら惡魔に取つ憑れゝば好いー』と力を入れて言ひ足した。

七

ファーノ市の門に馬を乘り入れたのはやがて晝頃であつた。家々はケーザル公の廷臣、將校、軍人で賑はつてゐた。技師長のために最も位置の好い室が二つ割り當てゝあつたので、レオナルドは其の一つをマキャヴェルリに與へた。斯んな人込みの中とて宿を取る事が六づかしかつたからである。

マキャヴェルリは直ちに參內した。そして重要な報道を得て歸つて來た。それは公の管領ドン・ラミロ・デ・ロルクッが死刑に處せられた事で、耶蘇降誕祭の日、首なし屍體が池の如き血の中に轉がつて、其の側に手斧が捨てあり、物凄い首は槍の穗先に刺し貫いてあつた。

『死刑の原因は不明ですが全市擧つて此の事一つを話題にしてゐます』とニッコローは言つた。『何うです、外へ行つて巷談の推測を聞いては。これも政治學に於ける自然律を學ぶ一つの機會ですからな。』

そして古刹サン・フォルツナトの前へ來ると人々は群つて公が軍隊檢閲のため出御せんとするのを待ち受けてゐるので、レオナルドとマキャヴェルリは其の中へ立ち混つた。口々に論ずるところは成程唯かの一事であつた。

『それに就いては俺は少しも分らないが』と言つたのは活氣はないがお人善しらしい顏せる若い職人であつた。『併しドン・ラミロ樣は朝廷で誰よりも一番愛されて又金がある方だと思つてゐたのだに。』

栗鼠皮の裏ある上着を着て風體卑しからぬ某店主がこれに答へた。

『ドン・ラミロ様は陛下を欺いたからそれで罰せられたのです。それが唯一の理由でした。吾々人民を壓抑したり拘禁したり掠奪したりしながら陛下の前では何食はぬ顏して羊の着物を着たやうに溫柔しく畏つて、事柄を隱蔽して置きさへすればそれが假令御法度に觸れる事項であつてもそれを守らなくても好いと高を括つてゐたのです。併し年貢の納め時が來ましてな、陛下は堪忍袋の緒を切らしなさつて臣民のためには友を惜しみになりませんでした。他人への見せしめとあつて、審問せず、躊躇せず、遲延せずスパリ首を刎ねられたのです。これで以て陛下が逆鱗遊ばすと如何に恐ろしいか、陛下の裁判は如何に公平無私であるか分りました。陛下は權勢のある者を免黜して低い者を登庸なさつて其の職に補せられるのです。』

と、一人の法師が叫んだ。『宜しく鐵の棒を以て彼等を治むべしぢや。』

『左樣々々、あの狗ころ共、あの人民の壓制者共は鐵の棒が要るのだ。』

『陛下は宥すべき時と擊つべき時をちやんと心得てゐらつしやる。』

『あれ以上の明君は我等に不要ぢやぞ。』

『主は到頭此のロマーニャをお惠みして下されたのぢや』と農夫が言つた。『以前はお前さん死んだ者も生きた者も身の皮を剝がれて稅金のために饑に逼つてゐたものぢや。厩には牛が唯つた二匹しか殘つてゐないのに、それさへ引き出された始末、其處へ丁度ヴァランチノア公がいらしつたゝめ下々の者は吻と息を吐いたのぢや。お神樣、何卒陛下の御健康を御護り下さりませ！』

『裁判官だつても然うです。裁判を延期してばかりゐて毎時も人を苦しめてゐたものが、今では然うでなくなりましてな』と店主が言つた。

『陛下は孤兒を保護して下さるし寡婦を慰藉して下される』と法師は口を挾んだ。

『そして慈善深い方だ。それは〳〵人民に對して慈悲深いこと、それを否認しようたつても駄目だぜ。』

『そして人の氣を惡るくなさらない所が偉い。』

『おゝ神樣』よぼ〳〵した老婆は公を稱贊する餘り狂氣のやうになつて言つた。『おゝ聖母樣、陛下は私達の父でござります、恩主、太陽でござります、何卒陛下の御身の上を御護り下さりませ。』

『彼等の言つてゐる事をお聞きでせう』とマキャヴェルリはレオナルドに言つた。『民の聲は神の聲です。私は常に言つてゐるのですが、人は野に在つて山を見、民に就いて君主を知る事が必要です。實は私はケーザル公を暴君だと言ふ者があれば好いと思つてゐましたが——總じて這般の事情は賢者にも分らず、思慮綿密なる人にも分りませんが、それが案外頭の單純な奴から知る事が出來るのです。』

此の時軍樂が聞えて人々は動搖めいた。

『そら陛下の御出だぞー』

人々は一齊に爪先きを立てゝ首を鶴のやうに伸ばした。そして奇妙な事に女や娘も窓から首を突き出した。彼等の英雄(金髮美貌のケーザル)を見たさに露臺、柱廊に走り出た彼等の目は愛に滿ちてゐた。公は滅多に人民に顏を見せなかつた事とて是は實に得難き好機會であつた。

先頭に立つ音樂隊は兵士の重い歩調に合はせて鑵鼓の響耳を聾するばかり、それに續くロマニョール親衛軍を選り拔きの美男子揃ひ、三十キュビットの長さある戟を携へ、鐵の兜に鎧を着込んで陣羽織は右側が黄、左側が赤の段々染めであつた。正眞羅馬風に模した此の服裝をニッコロー氏は飽かずに歎賞したっ次ぎは此の上もなく派手な裝ひせる侍從及び扈從の一隊で、金襴の上衣に金絲の開き口ある天鵞絨の外套を纏ひ、刀の鞘と蛇の鱗ある帶には七つの頭から毒を吐ける蝮（これはボルヂア家の紋章であつた）の鐶を施し、其の胸に CAESAR てふ文字を刺繍してあつた。これに續くはストラヂオットと稱するアルバニャ人の護衛兵で、彫りのある長劍を佩き。其の次ぎは軍の司令官バルトロメオ・カプラニカで羅馬教會旗手の劍を拔身の儘で捧持し、其の次ぎが卽ちロマーニャの君主にしてヴァランチノア公たるケーザル・ボルヂアであつた。公は鉢卷にダイヤモンドの太陽を鏤めたるバルバリ産の青毛に跨り、さらりと着流せる水淺黄の絹の外套には佛蘭西の紋章たる百合の花を白く眞珠にて現はし、獅子が口を開ける胸當てを着、眞鍮で鍛へた龍の兜には鱗、翅、鰭が備はつて身を動かす度に鏗爾たる音を發した。

今年二十六になる公の顏はレオナルドがミランのルヰ十二世の宮廷で見た時よりは痩せこけて憔悴して見え、あの時に比べて一段と峻しく、磨ける鋼鐵のやうに烱々たる眼光は一層の重々しさを加へ愈ゝ他人の窺知を許さぬ事を示してゐた。頭髪と尖々たる髭とは黑味を增し、長き鼻は益々鷲の嘴に似、冷々たる顏は彼の時と同じく依然として落着き拂つてゐるが、然かも今は一層勇奮敢爲の氣を加味し、更に磨き澄ましたる拔身の劍先きのやうに恐しい鋭さがあつた。

公に續けるは伊太利中最も精鋭との聞えある公の砲兵で、眞鍮の大砲、小砲、鐵の臼砲、發火石を牡牛に曳かせ、重き兵車は不活潑な音を立てゝ大地を轢り行き、喇叭と鑵鼓はこれと和し、大砲、胴甲、兜、槍は落日の光りに當つて電光のやうに閃いた。勝利者たるケーザル公は紫色の帝衣を着て血のやうに赤く且つ大きな太陽の方に馬首を向けてゐた。

沈默せる群衆は息を怺へて此の英雄を凝視し、歡呼の聲を揚げん事を望みつゝも然かもこれを敢てするを恐れて偏に恐怖に近い嘆賞の念に打たれて恍惚となつてゐた。或る乞食の老婆の如きは頰を涙で濡らしながら小聲で斯う言つた。

『おゝ聖徒樣！　聖母樣！　基督樣の御惠みで陛下のお顏を拜む事が出來ました！　おゝ陛下は私達の日輪樣でござりまする、美しい日輪樣でござりまする！』

法王がケーザルに託した閃々たる劍は宛ら大天使ミカエルの明煌々たる戟のやうであつた。

群衆と同じ天眞の熱誠をレオナルドはマキャヴェルリの顏に見て思はずニコリとした。

八

レオナルドは歸宅して見ると秘書アガピトから手紙が來てゐて明日ケーザル公に謁見すべき事を命じてあつた。暫らくして青年ルチオが訪ねて來たがこれはアンコナへ行く途すがらファーノを通つたから立ち寄つたとの事であつた。そこでマキャヴェルリは嘗領ドン・ラミロ・デ・ロルクッの死罪に就いてルチオに話した。

『ケーザル・ボルヂア公のやうな統治者の行爲を判斷するに眞の理性を以てする事は不可能だ。君が公の此の所業に就いて私が何んな風に考へてゐるかと訊くから君に言つて聞かすのだが、一體公が征服する以前のロマーニャは多くの小暴君に束縛されて到る處無秩序、掠奪、暴虐が行はれてゐたのだ。そこでケーザル公は此の騷擾を鎭壓するため聰明且つ忠實な臣ドン・ラミロを自分の代理として執政せしめたところ、ラミロは人民に有益な恐怖を懷かせ全然國内を靜謐に歸せしめて事業を完成したが併しこれを完成するには殘虐な刑罰を久しく續けたのであつた。兎に角これで目的は達したので、公は此の兇暴な器械ラミロを亡き物にしようと決心して、誅求を理由にこれを捕へて死刑に處し屍體を曝して遍く見物させた。勿論此の恐ろしい觀せ物を見た人民は喜ぶと共に又恐怖を感じたが、公は此の行爲に依つて明瞭に三つの利益を收めたから賢い行爲であつたと言へよう。卽ち多くの暴君を殺したのが其の一、ラミロを罰したゝめ公自身は管領の兇暴に坐さない事になつて結局公の性格は溫和だと認められたのが其の二、それから寵臣を犧牲にして清淨潔白な公平無私の例を示した事が其の三だ。』

マキャヴェルリは定理を推論するやうな冷淡な低い聲と表現のない容貌とを以て以上の事を語つたのである。

ルチオは叫んだ。

『ニッコローさん、果してあなたが言つた通りなら其の所謂公平無私は罪惡の極致でせうな。』

と聞いた秘書の目の中には火花が閃いたが併しあらぬ方を向いて依然冷淡に、『それは然うか知れない』と同意して更に、『併しそれが何うしたと言ふのだ？』と返し矢を放つた。

『それが何うしたと仰有る？　だつてニッコローさん、あなたはそんな惡徒の政略を是認なさるのですか？』

『フン、未だ若いな、流石に無經驗な青二才の言ひさうな事だ。政事ではね君、規範的に人の行はざるべからざる方法と實際的に行ふべき方法との間に非常な相違があるのだ。それが道德的になるのは單に自己に利益のためか或は恐見る譯さ。由來人の性は惡であり且つ兇猛であるのだ。そして其の相違を忘却すれば或る種の破滅を怖のためだ。そこで卽ち破滅を避けんとする君主は是非ともあらゆる危險を冒して有德を裝ふ術を學ぶ事を要するのだが。併し場合に應じて有德たる事を要する時もあり要しない時もあるのだ。それら密々の方策は權勢の維持を可能にするものだから、君主たるものは宜しく良心のあらゆる不安を無視してこれに從卽する必要がある。何故なら善惡の性質を精確に知つて論ずると往々にして君主の權勢は德を行つて破壞され罪惡を犯して却つて增益される事のあるのは明瞭だからな。』

ルチオは再び抗議した。

『あなたのやうに推理すれば何んな事でも許して差支へない事になります、そしてあなたは如何なる惡をも是認するのでせう。』

『其の通りだ』とマキャヴェルリは極度に嚴肅に答へて且つ自分の言葉の意味を强めるが如く手を擧げて『如何に統治すべきかを知る人に一切の事は許されるのだ』と嚴肅に言ひ足して、更に以前の如き冷淡な調子に復して論じ續けた。『であるからヴァランチノア公がロマーニャの掠奪と暴虐とを終熄させたあの峻嚴を我々のフロレンスに比して見ろ、フロレンスは國内の諸州をして反亂を繼續させ不秩序を釀成させてゐるのだが、あの寬裕を公の政策に比して見ると公の方が合理的であるのみならず、フロレンスのそれと同樣慈善的であると私は結論するの

だ。放恣の結果、一國を擧げて滅亡するよりも若干名を擊つ方が實際得策だからな。』

ルチオは稍怯んだが併し默つてはゐなかつた。

『併しそんな殘虐を行はない君主はなかつたでせうか？　例へばアントニヌスやマルクス・アウレリウスの事を考へて見なさい。』

『おい〳〵忘れちや可けないぜ、私は征服者の政府の事を論じてゐるのだ、世襲國ぢやないのだ主權を獲得する事であつて維持する事ではないのだ、勿論君が擧げた其の皇帝は寬仁を施せる譯だ、何故なら血腥い行爲が其の以前の時代に澤山あつたからだ。ルチオ君、羅馬の建設者が弟を殺したのは實に恐ろしい罪惡だ。併し弟を殺す事は單一の主權を樹立する上に於いて必要だつたからだ、若し生かして置けば羅馬は內爭のため國が弱くなつて必ず滅亡した事と思ふ。そして弟殺しの罪を《永遠の府》が有するありとあらゆる德と智慧とに釣り合はして是非する人があるだらうか？　疑ひもなく我々は最も微賤なる命數を撰んで惡行を基礎とする偉大を顧みてはならないが、併し人にして一たび抽象的正義の途を捨てゝ且つ滅亡を欲しない以上、宜しく斷乎として最後まで惡の道を歩み續けねばならない。元來人間といふものは區々たる微小な惡事を復讐するだけで、大きな惡事は人間の手から復讐の力を奪ふものだから、君主は專ら重大な害を臣民に蒙らしめて小つぽけな不正は控目にした方が好いのだ。ところが大抵の人を見るに惡と正義の中間を選ぶが、あれは最も危險だ。彼等は大きな勇氣を要する罪惡を回避して何の利益にもならない卑劣をのみ行ふのだ。』

『ニッコローさん、あんたの言葉を聞くと私は髮の毛がスク〳〵立つやうです』とルチオは非常に戰慄して言つ

たが、やがて返答の最も禮儀に叶へる形式は冗談に紛はすにありと考へて、『ニッコローさんの仰有る事は眞理でせうが、併し私はあなたの隱すところなき說を信ずるのは眞平御免ですな。』

『凡て眞理は何の時たるを問はず不可有らしく見えるものだ』とマキャヴェルリは冷淡に言つた。

傍で聞いてゐたレオナルドはニッコロー氏が態と平氣の體を裝つてゐるに拘らず實際は自分の言葉の結果が現れたか否かを知るためルチオの方に狡猾な瞥見を投げてゐる事を既に看破した。マキャヴェルリには自制なく、平靜なく、征服の力のなかつた事は明白だ。一つは他人と考へを同じうするを欲しないのと今一つは平凡を憎む餘り彼は反對を力說して却て錯誤に陷り、誇張に陷り、奇拔にして聳動すべき說ながら然かも完全を缺き、逆理的な意見の僞飾に陷つたのであつた。彼が德又は恐怖といふ語を弄ぶは宛も手品師が拔身を弄ぶに似、且つ磨きて煌々と光れる誘惑的に危險な武器を藏せる武庫を彼は所有して、以てルチオの如き人、並びに聰明にして尊敬すべき且つ因習に囚はれたる群衆を何時にても無力にする事が出來るのであつた。換言すれば彼等の得々たる平凡と自分の長所を彼等の認めないがために彼等を罰して、或は負傷せしめ或はカスリ傷を負はせるが併しこれを斬殺し或は重傷を負はせるのではなかつた。レオナルドは嘗て父ピエロのために木のロテルロに描いた怪獸を思ひ浮かべた。あの獸は嫌忌すべき各種の爬蟲類を集めて、夫々相異せる部分を揑ね合はせたものであつたが、ニッコロー氏も超人的に狡猾にして且つ良心なき君主に於いて無益且つ不可能な怪畸を寄せ集めたのではあるまいか？　俗物を恐怖せしめるメヅサの如きものを發明して、然かもそれは本然の性質と相反してゐるのではなからうか？　そしてレオナルドは以上の如きニッコロー氏の想像の放恣、態と扮へる冷淡の底に、例へば劍を弄ぶ手品師が錯

つて自分の急所を突くやうに、ニッコロー氏の魂の中に大苦痛の存するのを看取した。

そして畫家は思つた。

『これは不幸な病人ではあるまいか？　疵口に毒を入れて安靜を求めんとする人ではあるまいか？』

然かも彼は自分の心と酷似してゐるやうで其の實然うでないマキャヴェルリの暗い魂が有する秘密の最後の奥を突き留める事が出來なかつた。

ルチォが心の内でニッコロー氏の引き出したメヅサの首と爭つてゐる樣は、宛ら魘されてゐる人のやうであつた。

『まあ〳〵宜しい！　あなたと議論は致しますまい。我々は雄々しい德行、勇敢な偉勳のために君主の多くの罪を宥してやります。併しこれは失禮かも知れませんがあのロマーニャ公は然うした種類の君主でせうか？　ジューヴの神に宥しても牛には宥すな（Quod licet Jovi non licet bovi）といふ諺の通り、亞歷山大帝やヂュリアス・シーザーに宥しても法王アレキサンダーやケーザル・ボルヂァに宥されない事があるかも知れません、何故なら此の二人は眞のシーザーであるかそれとも無であるか疑とした事は言へないからです。少くとも私は此のやうに考へてゐるのです、世人も皆私に贊成だらうと思ひますが……』

『勿論誰だつて君に贊成するさ』とニッコロー氏は性急に遮つた。『併しルチォ君、多數者の贊成は事實の證據にはならんぞ、凡て眞理はあらゆる人が往來する大道にないものだからな。それは然うと私は議論の幕を閉ぢるが、唯最後の言葉としてこれだけの事を述べたい。私はケーザルの行爲を觀察すればする程實に瑕瑾のない立派なも

のだと思ふ、實際公は武器の力、冒險の成功を以て權力を得んとする人の龜鑑なのだ。殘虐と道德とを相聯ねるあの巧妙さ、そして愛撫する時と粉碎する時とを具さに心得てゐるし、それに彼の王業の基礎は置かれて未だ間がないのに早くもあんなに鞏固なものだから既に堂々たる覇王となつてゐたのだ。公の如きは伊太利に於いて唯一人、否、歐羅巴に於いて唯一人だ。實際あれは空前の事が、空前の事だから恐らく又絶後かも知れない。』

と言つたマキャヴェルリの目は燃え、聲は顫へ、痩せ悴けた兩頰は所々赤くなつた。彼は預言者のやうに見えて、皮肉家の假面の下から嘗てはサヴォナロォラの弟子であつた狂信者の顏が覗いてゐた。

併しルチォは最早や議論に飽いてゐる。メヅサの幻影が消えるや否やマキャヴェルリに向つて近所の酒店から二三本の酒壜を取り寄せませうかと言つて、それとなく休戰の調印を申し込んだ。

と聞いてニッコロー氏は熱心に叫んだ。

『それよりか他の酒屋へ二人で出掛けよう。斯んな事に掛けちや私の鼻は鋭敏だ。別嬪のゐるところは先刻心得てゐるから。』

『斯んな汚い小つぽけな町に別嬪が？』

『お聞きなさい』と嚴然としてフロレンス共和國の秘書は言つた。『君は此のファーノのやうな他の小都會を見ても決して蔑視してはならん。不潔な小路に時として素敵な奴を發見して喜びの餘り自分で自分の指を舐る事があるからな。』

ルチォはニッコロー氏の背を叩いて『此の狡るい犬めが！』と言つた。

マキャヴェルリは尙も續けて。

『さ、提灯を持つて、外套を着てと、それから假面を被つて行くかな。斯うした遠征は神秘なのが却て半分は愉快なものだ。如何ですかレオナルドさん、あなたも御同行なさいませうね？』

レオナルドはこれを謝絶した。

女に關する話は定まつて下品なるものであるが、彼は此の種の談話に興味を有せざるのみならず自らこれを嫌忌して避けるやうにした。齡知命に達したる彼は自然理の秘密を一心不亂に窮めんとするの人、死刑の罪人と同行して其の目に現はゝ最後の恐怖を見んとする此の人は屢冗談を聞いて赤面する事があつた。何方に顏を向けて好いか慌て惑うて學校に通ふ兒童のやうに赤面する事があつた。

ニッコロー氏はそれ以上は勸めずにルチオを伴つて出て行つた。

九

其の翌日朝早く內匠頭たるレオナルドの許へ侍從が來て旅館が氣に入つたや否やを尋ね且ケーザル公からの下賜品を進呈した。當時行はれた作法に依り賜品の目錄は食料品卽ち麥粉一袋、淸酒一樽、羊一頭、肥えたる鷄十二羽と並びに大きな火把を二本、蠟燭三把、コンフェッチ一箱とであつた。マキャヴェルリは此の伺候を見て感動して、自分が公に謁見できるやうに執成して貰ひたいとレオナルドに乞うたので、夜の十一時卽ちケーザルの定規の謁見時刻に兩人は打ち連れて參內した。一體公の生活法は奇怪を極めたもので、夏と冬は朝の四時乃至五

時に寢に就くのであるから公に取つて東の空は午後の三時に白み、四時に太陽が上つて、着衣も食事も政治を攪るのも凡て等しく五時であつた。凡そ公の行爲は不思議だらけであるが、これは自然に秘密を好む外に一つは故意にそんな打算をするせるもあつて、滅多に宮中を出る事なく、假面は常に被つた儘、そして盛大な享宴の時に限り臣民に接し且つ極めて危急の際にのみ兵士の前に姿を現すのであつた。公は人を呼と驚かす事が好きで、彼の容貌は半神半人のそれのやうに常に芝居染みてゐた。

彼が金錢を浪費するといふ噂は容易に信を措き難い程甚しく、間斷なく流れるやうに聖彼得寺の金藏に這入つて來る金貨は羅馬敎會のこの旗手の支出に足りないと云ふ。諸國から駐箚せる使臣の報告に依れば公の一日の費用は千八百ヅカットを下らず、偶々馬に乘つて外に出ると大勢の者共は公の後からゾロ〳〵跟いて行くが、これは公の馬に打つたる銀の馬蹄が容易に外れるからで、公の意は蓋しこれら人民への施物としてこれを拾ひ取らせるためであつた。彼の體力の强壯に關しても不思議な噂が立つて、痩せて婦人のやうに嫩い指で蹄鐵を打つたり、鐵の棍棒を曲げたり、船の錨綱を斷つたり出來るし、それに公が未だヴァレンツァの樞機官であつた數年前のこと羅馬で牡牛の仕合ひが催された時若年のケーザルは劍を拔いて一擊の下に牛を眞二つに斬つた。廷臣や列國の大使達の目を竊んで彼は屢々チェセナを周れる丘へ行つてロマーニャの荒くれ牧夫の拳闘を見るばかりか時として飛入りする事もあつた。

同時に公は騎馬の士としては理想の人であり、重ねて流行の師表であつた。曾て妹ルクレチアがエステのアルフォンソ公と結婚式を擧げた事があつたが、丁度其の頃公は或る城堡を包圍してゐたのに、誰にも見附からぬや

う密と陣屋を抜け出て結婚の式場へ乘り込んだ。そして黑い假面に黑い天鵞絨の着物を着て、會釋しながら賓客の間を過ぎたとき人々は驚きの餘りタヂ〳〵後に退き下つたが、公はそれに頓着せず音樂の調べに合はせて物の見事に踊つたので一齊に（ケーザル！　ケーザル！　無比のケーザル！）と稱揚した。

そして公は賓客や花聟の前をも憚らずルクレチアを傍に延いて何事かを耳語した。すると新婦は目を伏せて頰を赧めたが、軈て眞青になつたゝめ、眞珠のやうな美しさに一段と魅力を添へた。ルクレチアは或は潔白であるかも知れないが併し性質が脆いのは疑ふ餘地もなかつた。噂は更にルクレチアは素直な女性である、兄の恐ろしい心に靡いて敢て罪を犯すを厭はぬくらゐ素直であると傳へた。

これを察するに公は或る一點、卽ち微塵も證據を留めぬ事に意を用ゐてゐるらしい。恐らく公は名聲のために罪を誇張されて傳へられたかも知れないが、然かも事實は名聲よりも更に恐しいものであつた。それは兎に角、公は巧みに惡行を隱蔽して其の形跡を綺麗に拭ふ術を心得てゐたのである。

＋

ファーノのゴシック式の古い市役所が公の柳營に當てゝあつた。レオナルドとマキャヴェルリは身分の重くない參內者のために設けてある殺風景な大廣間を通り拔けて以前禮拜堂になつてゐた奧の一室に這入つた。槍の形を成せる窓にはステンドグラスが嵌まつて、唱歌隊の坐る高い席の上に槲の木で彫つてあるのは使徒並びに羅馬敎會の聖父達の像であり、天井には神聖な鴿が瑞雲と天使との間を飛翔せる壁畫の褪せたのが見られた。陛下が幾つ

か壁を隔てた彼方にゐられると思へば氣がさして廷臣達は立つたまゝ低い聲で話してゐた。玆にリミニから來てゐる使臣といふのは年老い頭禿げてよぼ〳〵した人であるが、公に拜謁するため三月此の方待ちに待つてゐるけれど運惡るくもそれが叶はないため今夜も溜りの間へ來てゐた。そして幾晩も眠らなかつたと見えて居眠りしてゐると、時々扉が明いて秘書アガピトが鼻の上に眼鏡を載せ、筆を耳に挿んで心配らしい顏で室內を見渡して謁見を待つ人々の一人を陛下の前に案內するのであるが、其の都度禿頭老齡なるリミニの使臣は身顫ひして飛び上るものゝ、今度も自分の番ではない事を見て溜息しながら再び居眠りするのであつた。然かも彼の居眠りは一人の藥劑師が乳鉢を棒で擦つてゐる音に心地よくされたのである。蓋し適當な部屋がないので此の禮拜堂は謁見の控室と醫療室とを兼ねてゐたからで、神壇の方にある一脚のテーブルには種々の壜、藥壺、醫者の藥局のレトルトなどが並べてあり、テーブルの後ろに控へてゐるサンタ・チュースタの監督にして且つヴァランチノア公の侍醫頭たるガスパレ・トレルラはコロンブスが新發見の島から持ち歸つて當時大流行となつたグヤコオ（俗にこれを聖木と稱へてゐた）の煎藥を調合して、其の恰好のよい手で黃色の塊を揉みながら病氣を治する此の木の性質を話してゐると、唱歌席の上にゐる槲の諸聖徒は主の羊群を牧する此の新しい人の奇異なる談話をば目を丸くして聞いてゐるかのやうであつた。禮拜堂にある燈火といへば此の國主の前にチラ〳〵搖らぐランプ一つだけ、そして空氣はグヤコオの刺激的な匂ひに滿ちて窒息するかのやう、加ふるに以前に焚いた燻香が未々室內に殘つてゐるため例へば或る隱秘な儀式を行はんとて高僧達が此處に集まつてゐるとも見られた。一方フロレンスの秘書マキャヴェルリは彼方此方廷臣の傍に寄つて巧みにケーザルの政略に就いて聞き出してゐたが間もなくレオナル

ドに近いて左も不思議さうに呟いた。

『私は朝鮮薊を食ひますよ、朝鮮薊を食ひますよ！』

『何んな朝鮮薊です？』とレオナルドは當惑して言つた。

『何んな朝鮮薊ですと問ひなさるのは御道理です。ケーザル公はフェルララから來てゐる大使バンドルフォ・コルレヌッチオに一つの謎を提出して《予は朝鮮薊を葉ぐるみ食ふのだ》と言つたさうですが、これは察するところ敵の同盟を離間して片端から滅ぼすといふ意味でせう。私は一時間も此の事に就いて頭を逃はしたのですよ。』

そして更に聲を低くして、

『此處の人は凡て謎と罠ですな。下らない事なら幾らでも喋るが一旦國政の事を持ち出すが最後忽ち食事中の坊主のやうに默り込むのです。併し奴らに騙される私ではありません、顔を見れば何か知ら能く分りますから。本統にレオナルドさん、私は魂を賣つても宜しいから何か知りたいのです。』

そして彼の目は死物狂ひの博奕打ちのやうにキラ〳〵と輝いた。其の時レオナルドはアガピトに呼ばれたのでマキャヴェルリに答へる暇がなかつた。

レオナルドはアルバニヤのストラヂオット兵が立ち並べる陰森な長い廊下を通つて公の寢室へ這入つた。寢室には垂幕や絹が廣々と懸かつてゐた。天井の壁畫はバシフェーと牡牛の情事が描いてあつたが、牡牛はボルヂア家の紋章として寢室にある一切の什器には三重冠と聖彼得の鍵、それに牛の模樣を飾つてあつた。寢室は暖かく且香

氣が匂つて、杜松の火は大理石の竈に燃え、ランプの油には菫が匂うてゐた。ケーザルは晴衣を着、室の中央にある平かな寢椅子の上に横つて（彼が好む姿勢は椅子に倚るか馬上に坐するか此の二つに限られてゐた）一切の事に無頓着らしく裝ひ、枕に肘を載せかけて一人の秘書からの報告を聞くと同時に、傍の碧玉の臺の上で二人の侍臣が將棋を鬪はすのを見てゐた。即ち彼には注意を分つ能力があつた。そして緩々と均一な且つ機械的の運動を以て、香氣滿てる黃金の珠を前から後へと左右の手に渡してゐた。此の珠は恰も自分のダマスコの七首のやうに宗教上の意味から持つてゐるのであつた。

十一

公は特別の儀禮を以つて嬉し氣にレオナルドを迎へ、拜跪せんとするのを制して自ら手を執つて傍らの肱掛椅子に坐せしめてから、兼てイモラの市（こは軈てヴァレンチノと改稱される筈）に一宇の精舍を建立する積りで、ブラマンテに調製させた設計書に就いてレオナルドに相談した。公は此の他に尙ほ病院、巡禮の宿泊所、見事なる禮拜堂の設備をも志してゐたが、これは斯くの如く寬仁なる慈善事業に依つて基督教に對する自己の善行を記念せんと欲したからであつた。ブラマンテの設計書の後、公はファーノに於けるヂロラモ・ソンチノの新印刷工場で丁度彫つたばかりの活字を出して見せた。蓋し公は美術工藝を領内に於いて熱心に奬勵したのであつた。其の時秘書アガピトは宮廷詩人フランチェスコ・ウベルチが作つた奉頌の詩集を公に呈した。公は鄭重にこれを受け取つて作者に充分報酬を與へるやうにと命じてから、奉頌の詩も然うだが諷刺詩をも見たいものだと言つて肯か

なかつたので、秘書は當時羅馬の聖アンヂェロ城に幽閉されてゐたネープルス人マンチオニの作つた一詩を公に示した。其の小曲は罵詈讒謗を極めて、公をば驢と呼び、これは素と私窩子と法王から生れた雜種で、嘗ては基督の椅子に坐してゐたけれど今は惡魔の椅子に坐し、割禮を施したる土耳古人であると共に衣を着ざる楓機官であつて、妹を姦し、信仰に背き、兄を殺した不義不道の大惡徒だと罵つてあつた。

詩に言ふ——

おゝ神よ、何故神は待ち給ふぞ、聖教會は驢の厩、享宴の洞と化したるを神は知り給はざるか。

アガピトは恐る〳〵訊ねた。

『陛下は此の惡漢を如何やうに御處分なさりませうか？』

『予が歸るまで其の儘にして置け、手づから處分するから』と公は靜かに答へた。『斯んな三文文士に作法を敎へる方法を心得てゐるから』と低聲で附加した。

そしてケーザルが何のやうにして作法を敎へるかは大方察せられぬでもなかつた。蓋し右の罵倒詩より輕い無禮に對してさへ其の者の手を斷ち赤熱した鐵を以て舌を燒いたのであつた。秘書は報告を終へて退き下ると尋いで謁見したのは星を占ふヴァルグーリョで、新に一種の占星術を發明した人であつた。公は星の威力を信じてゐる事とて熱心に耳を傾けた。ヴァルグーリョは陛下の此の頃の御不例は火星が天蠍宮に這入つたゝめだから金星が

牡牛座に現れさへすれば全快になると說明して、且つ陛下は若し差當り重要な事があればそれを十二月三十一日午後に決行する方が宜しい、陛下の星の相合は此の日が吉であるからと言つた。そして公の耳に身を屈め、公に印象を與へるやうに指を上の方に擧げ、次の如き不思議な呟きを三たび繰り返した。

『然うなさりませ、〳〵、〳〵。』

ケーザルは返答しなかつたが顏の曇りの消え失せたのがレオナルドに見えた。公は此の豫言者を退出せしめてから再び內匠頭の方へ向いた。

そこでレオナルドは軍事上の計畫圖と地圖とを開いた。地圖には地質、流域の方向、山河等を科學的に記載せる外に自然色の彩りを施し、一々巨細に遺漏なく描ける各地方の美術的鳥瞰圖とも見るべきものであつて、夫々都會の廣小路、街路より塔に至るまで指示し得べく、これを開いて見てゐる公は宛も地上を飛行して脚下に無限の擴がりを俯瞰するが如くに感じて、此の地方の地形卽ち南を限るボルセナ湖、北はエマの谷、東はアレッツォ、ペルヂアの二州、西はシエナから其の海岸に至る間を甚だ注意して檢した。これは伊太利の中核にしてレオナルドの故國、卽ち公が久しく垂涎せるフロレンスの地方であつた。公は深く考へに沈んで想像の飛行に喜びながら久しくレオナルドの繪圖面を凝視して、自分と此の大發明家とが恰も同一の仕事に從事してゐたやうに感じた。公はレオナルドの顏を見て懇ろに彼の手を執つた。

『難有う、レオナルド。何時までも予に仕へてゐて呉れ。予は君に報いる方法を知つてゐるから。君は予の宮廷で滿足してゐますか？』と氣遣はし氣に言つた。『俸給に不滿はありませんか？ 何か予に要求する事はありま

せんか？　予は君の滿足を得さへすれば愉快なのだから。』

レオナルドは此の機を外さずニッコロー氏の謁見を乞うた。すると公は快く微笑して肩を搖がせた。

『其のニッコローと云ふ男は妙な奴で予と謁見したいと言ふから會つて見ると實に下らない事ばかり喋るのです。何故あんな奇妙な奴を予の方へ派遣してよこしたか知ら？』と呟いたが、併し直ちに此の人に對するレオナルドの所見を求めた。

『陛下、マキャヴェルリ君は私がこれまで會つた人の中で最も聰明で最も目の明るい人だと思ひます。』

『左樣、確かにあの人は聰明です、そして國政に對して理解力ある事も疑はんが……併し……信賴するに足らぬ男ですな。一體手段方法の心得はないのだから。併し予は快く逢つてやります。君の言葉添へがあるから尙更の事です。一體彼は自分くらゐ狡猾な者は人間の中にゐないと己惚れてゐるけれど、其の實は正直者です。そして此の予をフロレンス共和國の敵と見て何うとかして欺かうとしてゐるが、彼は自分自身の魂よりも自分の國を愛してゐるのです、それを予は知つてゐるから彼を宥してゐるのです。宜しい、會ふから君から其の通り言つて下さい。それから彼の男は政治道と戰術とに關する書物を編んでゐると聞きましたが？』

と言つて、曾て擦つたく感じた事を今思ひ出したものゝやうに低く笑つた。

『君はマセドニヤの方陣の事を聞きましたか？　未だ？　では聞きなさい、それは斯うでした。或る時ニッコローは予の司令官バルトロメオ・カプラニカや其の他の將校を集めて今言つた其の著書の中にある方陣によつて軍隊を排列する法則を說明しました。そして其の說明が非常に雄辯であつた結果、將校は其の方陣を實地に見せて貰

ひたいと言ひ出して予らは適當な原へ行く事になりました。ニッコローは此處で命令を與へようといふのです。然るに殆ど三時間近く二千の兵士を寒氣風雨に曝して一生懸命になつたが方陣は何うしても出來ないのです。と見たバルトロメオは癇癪を起して軍書は未だ一册も讀んだ事がないのに軍隊を提げて瞬く間に所要の形に步兵を排列しました。卽ちこれが實際と空論との差違が分つたと言ふものです。併し此の事は口に出さぬやうにしてゐなさい、ニッコローはマセドニヤに關する事は一切回想を好みませんから。』

時は丁度三時で、公の前に夕餐が備へられた。見れば果物が一皿、鱒、白葡萄酒の三品で、眞正の西班牙人のやうに（蓋しボルヂア家は西班牙の出であつた）最も質素な飮食を取つた。レオナルドは退出したときケーザルは再び地圖の禮を述べた。三人の扈從は松明を持つて內匠頭を旅館まで送つた。

レオナルドは公との會談の模樣をマキャヴェルリと語つた。そしてフロレンスの地圖の事を話した時ニッコロー氏は思案氣に言つた。

『何ですつて？　あなたがですか？　吾々の共和國の一市民が最も恐ろしい敵のためにそんな事をしたのですか？　あなたは其のために謀叛の罪名を着るのですがそれを御承知ですか？』

『それは實際でせうか？』とレオナルドは驚いて言つた。『私は左樣に考へたくはありません。私は政治家ではないのです、盲人のやうに唯順ふだけです。』

兩人は默々として目を見合はせた。そして各自の差違を認めた。一人は國のない人と言つて差支なく、一人はケーザルの言つたやうに（自分の魂以上）に鄕國を愛する人であつた。

十二

其の夜ニッコロー氏は用向き、行先きを告げてブラリと出て行つたが、翌日寒さに凍え身體疲勞してレオナルドの部屋に入り來り、扉に閂を懸けてから、偖て或る大秘密の件をあなたに打ち明けたいのですがと言つて其の話を始めた。

それは今より三年前の冬の一夜、ロマーニャのチェルヴィアとチェセナチコとの間、卽ち人里離れた寂しい邊陬を一隊の騎兵が夫人ドロテアと其の姪マリアとを警護して通過した事があつた。夫人はヴェニス大統領の步兵軍長バッチスタ・カラッチオロの妻、マリアはウルビノ尼院の新發意で當年十五歲、共にウルビノからヴェニスへ行く途中であつた。然るに其の時不意に武器を帶び假面を被れる騎馬兵が、此の一行を襲うて夫人と尼とを馬に載せ、何處ともなく奪ひ去つてそれ切り二人の消息は聞えなかつた。ヴェニスの內閣と議會は隊長の一身に加へられた暴行は則ち內閣と議會とに加へられたに等しいと考へて西班牙王ルヰ十二世と法王とに上書し、强奪したる者はロマーニャ公に外ならぬとケーザルに罪を歸したが、併し其の證據を摑んでゐる譯ではなかつた。斯くと聞いた公は空嘯いて、女に不足するケーザルではなし、何の必要あつて道に要して盜まうかと、せゝら笑つた。然かも噂は益々弘まつて、夫人ドロテアは直ぐに諦めを附けて夫の事を忘れてしまひ、今では公のあらゆる征旅に隨行して居ると傳へられた。

然るに小尼マリアの兄にヂオニヂと云つてフロレンスに仕へてゐた若い將校がゐた。彼は右の事變をフロレンスの大統領に訴へたが、併し大統領の告訴はヴェニスのそれと同樣何等の效果を見なかつたので、ヂオニヂはそれでも自分の力一つで事を行はふと決心し、名を改めた上ケーザル公に接近して信任を得、終にチェセナ城の牢に入るを許されて其處に妹を見出し、これを少年に扮せしめて共々逃亡した。併しペルヂアの國境で追手に掛りヂオニヂは斬殺されマリアは拉して元の牢屋へ打ち込まれた。

そしてフロレンス共和國の秘書たるマキャヴェルリは勿論此の事件に關與してゐた。彼はヂオニヂと善かつたので、妹を救ひ出す謀の外に、妹が禍を得るに至つた詳細の事、並に妹は奇蹟を行ふ名譽ある聖徒で、シエナの聖カテリーナと等しく聖痕を有せる事などを此の兄から聞いてゐた。

ケーザルは軍長の夫人ドロテアに飽きが來てマリアに目を附け始めた。そして自分は從來あらゆる女——最も强情な女に對してさへ何等の困難を覺えなかつたから、此の少女の如きは容易に我が物になる事と信じてゐたのに、其の目算は外れて少女の抵抗に遭ひ、公はそれに打ち勝つ事ができなかつた。そして此の頃公は絕えず牢を訪ねて、長い間マリアと二人限りでゐると噂されたが、併し如何なる事が此の間に行はれるのかそれを知る人はなかつた。

マキャヴェルリは此の話を終へたとき斷然マリアを救ひ取る決心を顏に現した。

『レオナルドさん、若しあなたが私の擧に贊成なすつて助力して下さる積りなら私は巧く事を計つて此の企てにあなたが加擔してゐなさると云ふ事を何人にも知れないやうに致しますが——それでマリアはサン・ミケレ城に監禁されてゐますから、城の內部の模樣、間取りの具合ひをあなたに報告して貰ひたいのです。あなたは內匠

頭ですから容易に城内へ這入つて私の要する一切の事を發見できる筈です。』

レオナルドはこれに答へんともせず驚いて相手の顏を眺めた、するとニッコロー氏は稍怒りを含みながら強ひて笑つて言つた。

『レオナルドさん、マキャヴェルリは餘り情に脆い奴だ、餘り武俠的の情け心があり過ぎるとあなたに考へて貰ひたくはありませんな。ケーザルが此の少女を口說き落すと否とは私に取つては何でもありません。それでは何故私は此の事件に關與するのか？　其の理由の第一は私のやうな者でも與太ばかりやつちやゐない、何かの役に立つ男だといふ事を大統領に示したいからです、そして第二は――これは主眼ですが、詰り私は興味を有ちたいからです。人間と云ふものは馬鹿を演らないでゐると無聊に苦しむために頓智が亡くなつてしまひます。私は饒舌に飽きました。賭博、女郎買にも飽きたしフロレンスの羊業商達に報告書を作るのも厭やで耐りません。其處で以て此の冒險を計畫するに至つた譯ですが、これは口の先だけではないのです、私は斷じて實行します。此の機會をムザ〳〵逸してはなりません。そして計畫の準備はすつかり出來てゐます。必要な警戒も致しました。』

彼は自分を辯明するやうに慌てゝこれだけの事を言つたが、然かも彼は純なる深切を打ち明けるのを羞ぢて此くの如く皮肉の假面の下にそれを押し隱してゐるのだとレオナルドは悟つた。

『マキャヴェルリさん、此の事件に就いては私をあなた同樣に信賴して下さい。但し萬一失敗すればあなたの責任を私にも分けて下さる條件で……』

と聞いたニッコロー氏は太だ感動してレオナルドの手を捽つた、そして直ちに右の計畫に着手する事になつた。

レオナルドはこれが果して實行できるか何うかを心の中で疑つてゐたけれども敢て善いとも惡るいとも批評は挿まなかつた。女囚の救ひ出しは十二月三十日と定まつた。

ところが事を擧げる二日前にニッコロー氏が賄賂を遣つてゐた牢番の一人がアタフタ駈けて來て、陛下はすつかり計畫を嗅ぎ附けなすつたと注進した。併し本人のマキャヴェルリが不在のためレオナルドは此の報道を齎して彼を捜し廻るうち遂に或る酒屋にゐるのを見付けた。酒屋には賭博師の一團就中西班牙の兵士が陣取つて賽やカルタでいかさま博奕を打ち素人連から捲き上げてゐた。そしてフロレンスの秘書は陽氣な放蕩少年の一群に取り卷かれて、ペトラルカの《ラウラ》に與へた有名な小曲の

吾は彼女の心の深く傷けるを見ぬ。

といふ結末の句を說明して、各行毎に何か知ら猥褻な喩へを持ち出して聽衆をゲラ〳〵笑はしてゐた。

と、不意にマキャヴェルリの隣室にワッといふ音が起つて、女供は泣き叫び、卓子は引つくり覆され、劍を拔いて打ち合ひ、德利の缺片や錢が壁と牀とに投げ附けられた。これは博奕打ちの一人が相手のいかさまを看破したからで、ニッコロー氏の聽衆は喧嘩に加はるため隣室へ駈け附けた。そこでレオナルドは牢番の知らせを氏に囁いて共に家に歸つた。

夜は森として星が輝いてゐた。新に積つた雪は足の下でザク〳〵音がする。窒息するやうに苦しい酒屋にゐた身には夜の空氣の匂ひが快く感じられた。ニッコロー氏はマリアを救ひ出す兩人の計畫が公の知る處となつたと聞いたとき案外平氣で、目下の場合たとひ公の耳に這入つたにもせよ慌てるには及びませぬと答へた。そして口

達者に自分の行爲の辯解を試みた。

『私があの下等な西班牙人を相手にして馬鹿騒ぎをやつてゐましたから定めしあなたは驚いたでせう。だつてレオナルドさん、あれ位の事は構はないぢやないですか。あれも實は必要の法則から起つた事です。必要は跳躍します、必要は舞踏します、必要は歌ひます。成程彼等は無賴の徒でせうがそれでもフロレンスのメヂチよりは優つてゐますからな。』

斯う言つた言葉の中には痛く悲哀に惱み自己を非難してゐる事が分つたのでレオナルドはこれを聞くに堪へなかつた。

『それを私に言ふのは間違ひです。私はあなたの友人で、世間並みの判斷をあなたに加へるものではありません。』

マキャヴェルリはあらぬ方を向いて低聲で答へた。

『それは私だつて知つてゐますとも。何うかレオナルドさん、私を殘酷に判斷しないで下さい。折々私は詼諧を弄したり笑つたりしますが、あれは皆な心が悲しくなつて泣きたくなるのを紛らすためなのです。併しそれが私の運命でせうね、詰り生れた時の星廻りが惡るかつたのです。何等智能のない私の同僚は萬事に成功して、名譽ある生活、奢侈な暮らしをして權力と富とを得てゐるのに、私といへば何時も彼等の後塵を拜して、あの愚昧の奴らのために除け物にされるのです。一體、奴等は私を幇間か何ぞのやうに思つてゐます。成程私は幇間かも知れませんが、併し私は決して多大の勞力に怯む者ではありません、危險を恐れる者でもありません、唯私の堪

へられないのは僅かばかりの金のために何時もビク〳〵して月々の收入と出費とをうまく合はして行く事の出來ない事と、それに毎日々々私より劣る奴等が失敬な無禮を私に加へるのを凝と我慢する事と、此の二つが何よりも辛らいのです。私は實に詛はれた生涯ではありませんか。若し神が救ひに來なければ私は私の仕事、私のマリエッタ私の息子は斷然捨てます。私の妻に取つて又世人に取つて私は厄介物でなくて何でせう！　然うです、構ひませんとも、何とでも考へるが好いです、私を死んだ者だと思つて呉れゝば好いです。然うすると私は遠い〳〵小さな村へ隱れます、誰も私を知らない地球の或る隅つこに隱れます、そして官吏の書記になるか、でなければ村夫子になつてイロハを敎へます。そんな事でもして居れば私の五感が利く限り恐らく餓死はすまい。本統にレオナルドさん、事を成す力が自分にあると知りながら、然かも自分は何一つ成就せずに此の世を終るのだと思ふくらゐ恐ろしい事はありますまい。』

十三

冒險の日が近づくに從つてレオナルドは注意して見てゐると、マキャヴェルリは成功疑ひなしと信じてゐる癖に動もすれば冷靜を失して過度に警戒したり時には又餘り噪急に失する事もあつた。併しレオナルドに此の心理狀態は能分つてゐた。これは臆病乃至小膽のためではなく意思の叛逆即ち實行よりも思惟の人として造られた者に固有なる先天的不決斷のためであつて、將に一擊を加へんとする刹那卒然として到來するものであつた。

愈々快擧の日の前夜、ニッコロー氏は最後の準備を整へるため、サン・ミケレの城塔の附近にある或る小さな家

に行くし、レオナルドは又翌朝早く其處へ行く筈になつてゐた。そして自分獨りになつた時レオナルドは今にも凶報がマキャヴェルリから來るやうに思はれて、此の事件は學童の惡戯と同じで、九分九厘までは馬鹿な失敗に終るに相違ないと見極めてゐた。

そして懶い冬の夜が明けて、これから出掛けようとしてゐるとき思ひ掛けなくマキャヴェルリが歸つて來た。青醒めた顏色は悲しみに沈んで半ば失神したやうに椅子にドッカと掛け、『駄目です！』と簡單に言ひ放つた。

『多分然うだと思つてゐました！　到底失敗は免れないと思つてゐたのです』とレオナルドは叫んだ。

『失敗したのぢやありません、時期が後れたのです。鳥は逃げました。』

『逃げた？　何うして。』

『今朝夜明け前にマリアは牢屋の牀の上で喉を突いてゐたと言ふ事です。』

『其の加害者は多分……』

『否、加害者は何者だか分りません。ケーザル公ではないのです。ケーザルにしろ死刑手にしろ、あんな不間はやりませんからな。何しろ可哀さうに滅多斬りにされたのです。噂では死骸は未だ淨い處女であつたといふ事です。私の考へではマリアは自分で自ら……』

『そんな事はありません！　それは何ほ何でもしなかつたでせう。マリアは聖徒ですもの……』

『否、何だつてしようと思へば出來ない事はありません。あなたは未だあの手合は何んな性質の者であるか御存じないのです。そしてあの不名譽な殺人犯——然うですあの不名譽な殺人犯は斷じて何んな事でも行るので

す！　聖徒が自殺するやうに仕向ける事も出來るのです。マリアが未だ死ぬ前、そんなに嚴重な見張りの附いてゐない時分私は顏を見た事が二度ありました。纖弱な體で、小兒のやうに邪氣のない顏をして、嵩の少い髮の毛が薄い金色を呈せる容子はバチアにあるリッポ・リッピの聖母を見るやうでした。レオナルドさん、あの少女は何んなに可愛らしかつたか、何んなにかよわい娘だつたか兎てもあなたに想像は附きません。』

彼は涙で睫毛を濕して横を向いたが、併し力ある尖つた聲で言ひ續けた——

『だから眞に尊敬に値する人は此の宮廷では揚鍋の中にゐる魚のやうだと始終私は言つてゐるのです。そんな例は最う澤山です。私は奴隷になるために出來てはゐないから是非大官に然う言つて他へ轉職させて貰ひます。實際斯んな處にゐたくはありませんからな。』

レオナルドは心の底からマリアを憐れに思つて、彼女のためならば極力努める積りでゐたが、事茲に至つては斷乎たる行動を取る必要がなくなつて、自分も將たマキャヴェルリもこれで安心出來るのであつた。

十四

ケーザルの率ゐる軍の大部分は十二月三十日の昧爽にファーノを進發してシニガーリャの郊外に陣營を張り、公は翌日（卽ち星占師が勸めた日）其處へ行く事になつてゐた。元來シニガーリャを包圍した者はムヂョーネの同盟諸將で、彼等は曩にケーザルと和睦して今は公のために働いてゐるのであつた。シニガーリャ市は降服を誓つたが併し城の司令官はケーザル自身が來なければ城門は明けられないと言つて肯かないので、偖てこそ公は親しく

出馬する旨を傳へ且つ軍兵をメタウロ河の岸に駐めるゆゑ軍事會議を其處で開くから來つて會合して呉れと叛將連を請待した。以前の敵今は同盟者たる此の人達は恐らく身に禍難の及ばん事を慮つて公との會見を謝絶しようとしたが、併し公は後にマキャヴェルリが記したる如く（亞弗利加の沙漠に住む怪物が好調の歌曲を以て巧みに餌食を引き寄せるやうに彼等諸將を魅し去つて）安心せしめた。

マキャヴェルリは公と共にファーノを去るし、レオナルドは數時間後れて其の行を追うた。

道は濱傳へに南の方を指して右手の山々は海岸に逼つて截立つやうに聳え、其の裾では狹い道路すら通じ難い程であつた。此の日は空も海も灰色に曇つて甚だ穩に睡けなる空や鳥の囀り、雪の面に見える黑い斑點と孔竅、これらは凡て雪が融ける前兆を示してゐた。

やがてシニガーリャの煉瓦塔が見え始めた。市はアドリアの海岸を隔つる事一哩弱、然かもアペナイン山の麓から弩を射る距離すらない。卽ち海と山とに挾まれて宛ら罠のやうな地形であつた。道は小流ミサに會して急に左折し、其處に斜に架せる橋の後、卽ち低き建物の並べる廣小路を横切つて、市の門は嚴しく立つてゐた。右の建物といふのは主としてヴェニスの商人の有に係る倉庫であつて、當時シニガーリャは半ば東歐方面の大互市場たる觀を呈し、伊太利の商人は此處で土耳古、アルメニヤ、波斯の人々並びにモンテネグロ、アルバニヤのスラヴ族と商品を交換するのであつた。然かもレオナルドが到着した時は最も繁華な町すら洞然として、途で逢ふ人と言へば獨り軍人のみで、往來の兩側に單調に擴がれる其處此處の長き拱廊、店舗、倉庫には掠奪の痕が見えて、硝子は毀れ、鉸前は扭ぢ切れ、門や門の鎖は割き斷たれ、扉は明け放した儘、商品や荷物の梱は無殘にも表

に曝され、木なくさい匂ひが鼻を衝き上げて、半燒けの家々は今尙ほ煙を吐き、幾多の死骸は宮殿の隅の鐵のランプ柱にブラ下がつてゐた。

宮殿近くの大きな廣場にレオナルドが來たとき日は暮れかゝつてゐた。廣場ではケーザル公が親衞軍と共に陣取つて、市街を掠奪した兵士を罰し、アガピトをして其の宣告を讀ませ、公親らは合圖を與へて處罰兵を刑場に引かしめた。其の時レオナルドの傍へマキャヴェルリが來て、

『で、あなたはあの事を何う思ひます？　若し實際お聞きになつたのなら……』と熱心に言つた。

そしてレオナルドを伴つて隣りの往來に出て、其處から雪の堆い狹い小路を通り抜けて寂しい岸にある船大工の後家の家に這入つた。これは崩れかゝつた破家であるが、マキャヴェルリは市中を隈なく歩き廻つて宿るべき家を搜した擧句、僅に此の家に小さな空き間が二つある事を見附けてこれを借り入れて、一つをレオナルド、一つを自分が占める事とした。そして今此家へ這入るなり蠟燭に點火して、ポケットから酒の壜を取り出し壁に叩き附けて其の口を折つてレオナルドに對して坐し、目を光らせて相手の顏を見詰めた。

『それでは未だお聞きになりませんか？』と頗る重々しい口調で言つた。『實に稀代なそして記憶すべき事が起つたのです。ケーザルは敵に復讐しました。一味の叛將は捕へられたのです。オリヴェロット、オルシニ、ヴィテルリの三人は死刑を待つてゐるのです。』

そして椅子に背を投げて、レオナルドの驚く樣を興味あり氣に眺めたのち、强ひて熱奮を抑へ、平靜たらん事を努めて、公がシニガーリャで陷穽を作つた話をした。

ケーザルは朝早くメタウロ河畔の軍營に着して、騎兵の中より二百を割いて前進を命じ、別に歩兵を動かして親らは殘りて騎兵を率ゐて其の後から行つた。公は聯盟の諸將が必ず會見に來る事を知り且つ彼等は市を繞れる諸處の要塞に兵を分派して新に到着するロマーニャ軍のために餘地を作る事を知つて、門外の路が彎曲してミサの河岸に聯れるを幸ひ、公は騎兵を二列に組みて歩兵が通るだけの隙間を列の間に明けたので、歩兵は停歩せずして橋を渡り、市の門に這入つて行つた。

そして聯合軍のオルシニ、グラヴィナ、ヴィテルロッツォは公に見えるため僅少の騎馬兵を從へて馬を進めて來た。ヴィテルロッツォは禍身に振り懸るのを蟲が知らせるのか非常に陰氣臭く且つ薄ぼんやりしてゐるので、平生此の人のハキ〳〵しないのを熟知せる人達すら驚いた程であり、且つ宛ら死に行く者のやうに妻子と訣別した事さへ分つてゐた。三將は馬を降りて公に敬禮すると公も亦馬を降りて一々握手を交しながら抱いて接吻して彼等を予の親愛なる諸兄と呼び、過分の儀禮を示したばかりか、公の諸將も豫め謀つて置いた手順に從つて三將を取り卷いて夫々會釋したので、各將はケーザル幕下の士の一團宛の中心になつた。公はオリヴェロットの來ない事を見て部下の將軍ドン・ミケレ・コレルラに或る合圖を與へた。忽ちコレルラは馬を馳せて行つて見るとオリヴェロットは軍隊と共にゐたので、これをケーザルの前に引くため巧に口實を作つて途々睦まじ氣に軍事並びに將來の兵法に關する話を語りながら、轡を並べて宮殿まで來た。宮殿は丁度要塞の前面に位してゐた。

そして宮殿の玄關で四將は退き下らうとしたが、公は相變らず鄭重を盡して宮殿の中に請じた。

そして取つ附きの室に足を入れるか入れぬに扉は締まつて武裝の兵士がバラ〳〵と競ひ懸り刀を奪つて縛り上

げた。餘りの事に四人の者は呆然として手向ひさへしない程であつた。そして公は今夜直ちにこれらの囚人を宮殿内の寂しい場所で絞殺して、安心の息を吐く積りであつた。

『本統にレオナルドさん、公が彼等を抱擁して接吻した模樣をあなたに見せたかつたです。これつぱしも不信な容子は見えず、あの態度ではそれと感附けるものでもなし、胸中の密計は實際露程も見透されませんでした。あの聲と云ひ顏の容子と云ひ、腹の眞底から來るとしか思はれませんもの、あんな事があるとは最後の瞬間になるまで分る筈もないし、それに公が芝居を演つてゐるとは何うしても思へなかつたのです。何しろ政治始まつて以來、確にあれは計略中の白眉なるものでせうな。』

レオナルドは微笑した。

『疑ひもなく陛下は大膽と狡計とを示したでせうが、それにしても何故あなたがそんなに騙し討ちを感心なさるのか私には分りませんが。』

『騙し討ちですつて？　然うぢやありませんよ、レオナルドさん、既に國を救ふのが問題ですもの、騙し討ちだの忠義だの、善だの惡だの、寛仁だの暴虐だの、そんな事は一切論題外です。何んな手段にしろ皆同一ですからな——目的が達しさへすれば。』

『併し唯今のお話は陛下が國を救ふといふ問題になりませうか？　公は單に自利を計つてゐるとしか考へられませんが。』

『これはしたり、あなたさへ分らないのですか？　お聞きなさい、ケーザルは軈て統一さるべき伊太利の獨裁

君主ですぞ。凡そ今の時くらゐ英雄の出現に好都合な事は未だ曾てありません。若しイスラエルにしてセーゼスを起たしめんがために奴隷になり、若し波斯にしてサイラスを稱揚せんがためにメヂア人の軛の下に横はり、雅典にして獨りテセウスに永遠の譽れを得しめんために殺戮を演じたものとすれば、目下の伊太利は新に英傑を起たしめて自國の救世主たらしめんために、奴隷となり、恥しめられ、繫縛せられ、散り〳〵ばら〳〵になつて、元首なく領袖なく指揮者なきに至つて荒廢され、蹂躙され、一國民として耐へ得る限りの悲哀を荷つて粉微塵になる事は大に必要です。これまで屢々此の人こそは我が伊太利の運命を雙肩に荷ふ人だと輕信した人物が出現したが、然も何等大事業を果さずに空しく死んで行きました。レオナルドさん、半死同樣の伊太利は息も絶々になつてゐますが、今尙ほ救ひ吳れる人を待つてゐるのです。疵を癒して吳れて、ロンバルヂーの無秩序、タスカニーの掠奪、ネープルスの强奪殺人を禁ずる救ひ手を待つてゐるのです。伊太利は救世主を送つて下さるやうにと日夜泣いて神に祈つてゐるのです！」

彼の聲には張り詰めた絃の如き響きがあつた。以上言ひ終ると同時に顏色靑醒めて身體を震はせ、目はキラキラ光つた。其の興奮の狀態は癲癇に似て何となく力なき痙攣に類せるものがあつた。

マキャヴェルリが先日マリアの自殺の事を語つたとき、ケーザル公を稱して罪惡で固まつた怪物だと言つた事をレオナルドは思ひ出したが、併し此の人が折角人を稱揚して柔に溫みある氣分になつてゐるのに、若し今言つた言葉の無定見を指摘すると其の好い心が消え去るだらうと恐れた。

『命長ければ見聞多しですな、ニッコローさん。併し私に一つ質問をさせて下さい。何故ケーザル公が伊太利

を救うための神聖な選人であると今日に限つて保證なさるのです？ シニガーリャでそんな詭計を行つたからそれで公の剛勇が證明されたと仰有るのですか？』

『然うです』とマキャヴェルリは偏頗のない顏色に復して答へた、『公の殘虐な行爲に就いて見るに種々の偉大な性質とそれに反對の性質とを實に珍らしいくらゐ併有してゐる事が分ります。私は非難するのでもなければ稱揚するのでもありません、單に吟味するに止るのです。唯今話した事柄に關して私は下の如く推理する者です。それは特殊の目的に達する人の行くべき道は二つある——第一は法律、第二は暴虐です。苟も統治せんと欲する人は必ず以上二つの道を歩む必要があります。如何にすれば獸となるか、如何にすれば人となるか、それを知る事が肝要です。半人半馬のカイロンに養育されたアキルレス並びに其の他の英雄に關する古代傳說の內部の意味は卽ち此の事を寓してゐるのです。元來人類の大部分は自由の重みに堪へる者ではありません。彼等が自由を恐れる事は死以上です。一つの罪を犯すと直ぐ樣それを後悔して意氣地なくなつてしまひます。ところが英雄卽ち運命の人のみは自由を支へる力を有すると同時に法網を破つて敢て恐怖は致しません、悔いもしません、惡を行つて惡たるを知らぬ事は恰ど獸や神が然うであると同じです。私は今日初めてケーザルが神に選ばれた人である確證を見たのです！』

『成程々々、それで分りました』とレオナルドは沈んだ聲で言つた。『併し私は斯う考へます、ケーザルのやうに無知無愛であるが故に敢て一切の事を行つて憚らぬ人を自由とは言へないと。一切をなすと同時に一切を知り且つ一切を愛する人でなければ自由の人とは言へません。そして此の意味の自由によつて人は善惡に勝ち、高

山と深淵、地球の境界、地球の障碍、地球の重荷に勝つのです。其の人は神のやうになつてそして飛行するのです。』

『飛行する？』とマキャヴェルリは訝しさうに言つた。

『然うです。完全な知識を有するやうになれば翼が出來るのです。實際此の事に就いて私は思ひ潛めてゐるのですが、恐らく收穫は私には六づかしいでせうが併しそんな事は意に介しません、私でなければ他人であるまでの事ですから。翼を有する日はやがて來るのです。』

『宜しい、私らは互に祝しませう。此の談話は一個の新創作物に導きました――私の君主卽ち半神半獸の人にあなたは翼を與へて下さつた。』

此の時附近の塔の時計が鳴つた。ニッコロー氏は宮殿へ行つて四將の身の上に迫れる死刑に就いて學ぶため急いで外へ出て行つた。

マンツァ侯の妃イサベルラ・ゴンツァガは公に祝賀の印としてカルニヴァル祭の贈品卽ち色絹製の美しい假面百個を贈つた。

十五

千五百三年の三月上旬ケーザルは羅馬に歸つた。法王は（羅馬教會のために戰ふ勇士）に與へ得べき最高の名譽たる黃金薔薇を公に下賜して功勞に酬いては如何と提議して樞機官の同意を得、二日の後に其の式を擧げた。

當日は法王を初めとして列强から駐箚せる使節はベルヴェデレの內庭を見晴らし得る法王の間に集まつた。法王アレキサンダー六世は七十の老齡ながら身體肥滿して甚だ矍鑠、威風堂々として三重の法冠を戴き、寶石を鏤めた外衣を着し、駝鳥の扇で頭を煽がしめて玉座に着いた。

すると喇叭の嚠喨たる音が起つて、式部長官ヨハン・ブルックハルトの合圖によりロマーニャ公ケーザルの扈從、傳令使、親衞兵、甲冑持ちが靜々と式場に繰り込んだ。此の一團を率ゐたる司令官バルトロメオ・カプラニカは羅馬教會旗手の劍を拔身のまゝ捧持してゐた。此の劍は金色燦爛として精巧な意匠を凝らしたもので、其の第一の模樣は女神（忠誠）が椅子に坐して、忠誠は劍甲よりも强しとの銘があり、第二は戰勝車に乘りたるシーザーの圖で、銘はシーザーか然らずんば無とあつた。第三はルビコン通過の圖で、賽は投ぜられたりといふ銘があり、最後のはボルヂア家の紋章たる牡牛に贄を捧げる圖で、裸體の尼僧が一人の人間を犧牲として捧げて香を薰らし、畫中の神壇に、（最善最大の犧牲たる神に）といふ銘と、並びに其の下に（ケーザルの名に於ける兆）といふ銘があつた。苟も獸に對して人間の贄を捧げるのは恐怖すべき事であるのに、抑々此の畫と此の銘とはケーザルが兄を殺して教會旗手の此の劍を橫領なさんと目論見てゐる最中に彫らせた物であるから更に恐怖すべき事實が貴つてゐると見るべきである。

軈て當の主人公たるケーザルは己が官職の權標を從者に持たせて式場に這入つた。公の頭に戴ける高い帝冠には聖なる鴿の形が眞珠で鏤めてあつた。ケーザルは法王に近づいて冠を脫ぎて跪き法王の靴に篏めてあるルビーの十字架に接吻した。すると樞機官モンレアレは黃金薔薇を法王の手に渡した。此の薔薇は驚駭すべき寶

石師の技術を示せるもので、細き金線細工の下に埋めてある硝子壜から夥しく薔薇の香氣を發してゐた。法王は玉座から起ち上つて、感動の餘り聲を顫はせつゝ次のやうに言つた——

『最愛の子、汝これを享けよ。これは天と地卽ち二つのエルサレムの象、戰ひの敎會と勝利の敎會との象であるぞ。此の朽ちざる花は聖徒の喜び又不朽の法冠の美であるぞ。基督に於ける汝の德ある花——多くの海の岸に咲く汝の花は願はくは此の薔薇の如くであれ。アーメン。』

ケーザルは其の不思議な花を父の手から受けた。

老齡の法王は感極まつて最早や座に耐へないのを見て、薄野呂の獨逸人にして式部長官たるブルックハルトは忌々し氣な顏をした。蓋し法王は豫定の式の順序を滅茶々々にして、我が子ケーザルにのし懸るやうにして、打慄ふ兩手を差伸べ、顏を蹙め肩を震はせて呟くやうに言つた。

『ケーザル、ケーザル！　おゝ子息よ！』

公は黃金薔薇をサン・クレメンテの樞機官に渡した。法王は今は狂氣の如く喜んでケーザルを搔き抱き、泣いたり笑つたりした。

再び喇叭の音が響くと同時に聖彼得寺の鐘が鳴つた。すると忽ち羅馬にありとあらゆる敎會の鐘が鳴り且つ砲兵が一齊に祝砲を放つてこれに和し、ベルヴェデレの內庭ではロマーニャの親衞軍がケーザル萬歲！　ケーザル萬歲！　と叫んだ。

公は露臺に現れて親衞軍に會釋した。靑き空、輝々たる朝日の下に、金色紫色の衣を着て、聖靈の標象たる鴿

の冠を戴き、手に不思議なる薔薇を携へる公は民衆の目に人ではなく神として映じた。

十六

其の夜堂々たる假面行列の催しがあつた。行列の仕組みはヴァランチノア並びにロマーニャ公たるケーザルの劍に彫つてあるヂュリアス・シーザー凱旋の圖に則り、公は《神聖なるケーザル》と記せる戰車に乘つて頭に桂冠を戴き、手に勝利の象たる棕櫚の枝を携へ、古代羅馬兵に扮裝せる兵士は鷲と投箭とを持つて戰車を取り卷いた。書籍並びに記念物、鑄牌の圖面に見る通りに模して一毫の微と雖も古式に相違した處がなかつた。

戰車の先には埃及の祭司が着る白衣の長袍を纏へる人が立つて紫と金とを交へたるボルヂア家の牡牛の旗を持つてゐた。牛は卽ちアレキサンダー六世の守護神たる血腥いアピスで、銀衣の少年達は羯鼓に合はせて、牡牛萬歲！　牡牛萬歲！　ボルヂア萬歲！　と歌つた。

そして其の獸の像は群衆の頭上高く搖らぐ松明の光に照らされて宛ら朝日のやうにキラ〳〵と赤く動いた。

群衆の中にはレオナルドの弟子ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオがゐた。彼は新にフロレンズから羅馬へ來たのであるが、紫衣の獸を見て默示錄中の語を聯想せざるを得なかつた——

『又その獸を拜し曰けるは誰か此獸の如き者あらんや誰か之と戰をなし得るもの有ん乎。』

『われ絳色の獸に乘れる婦を見たり、此獸あまねく體に僭妄の名あり又七の首と十の角あり……その額に名を